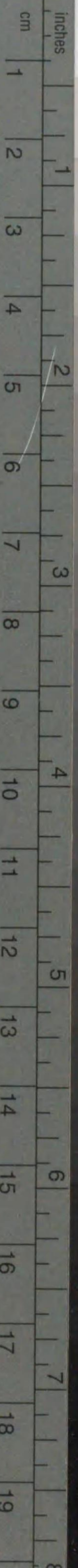


Kodak Gray Scale



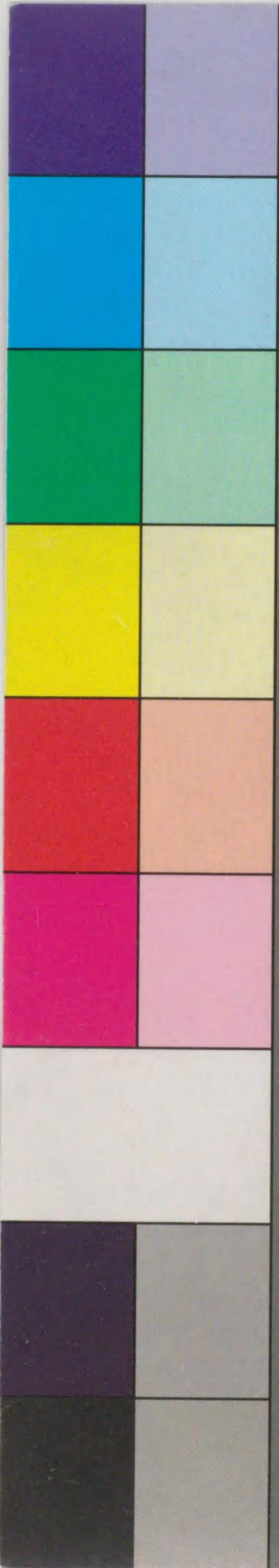
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

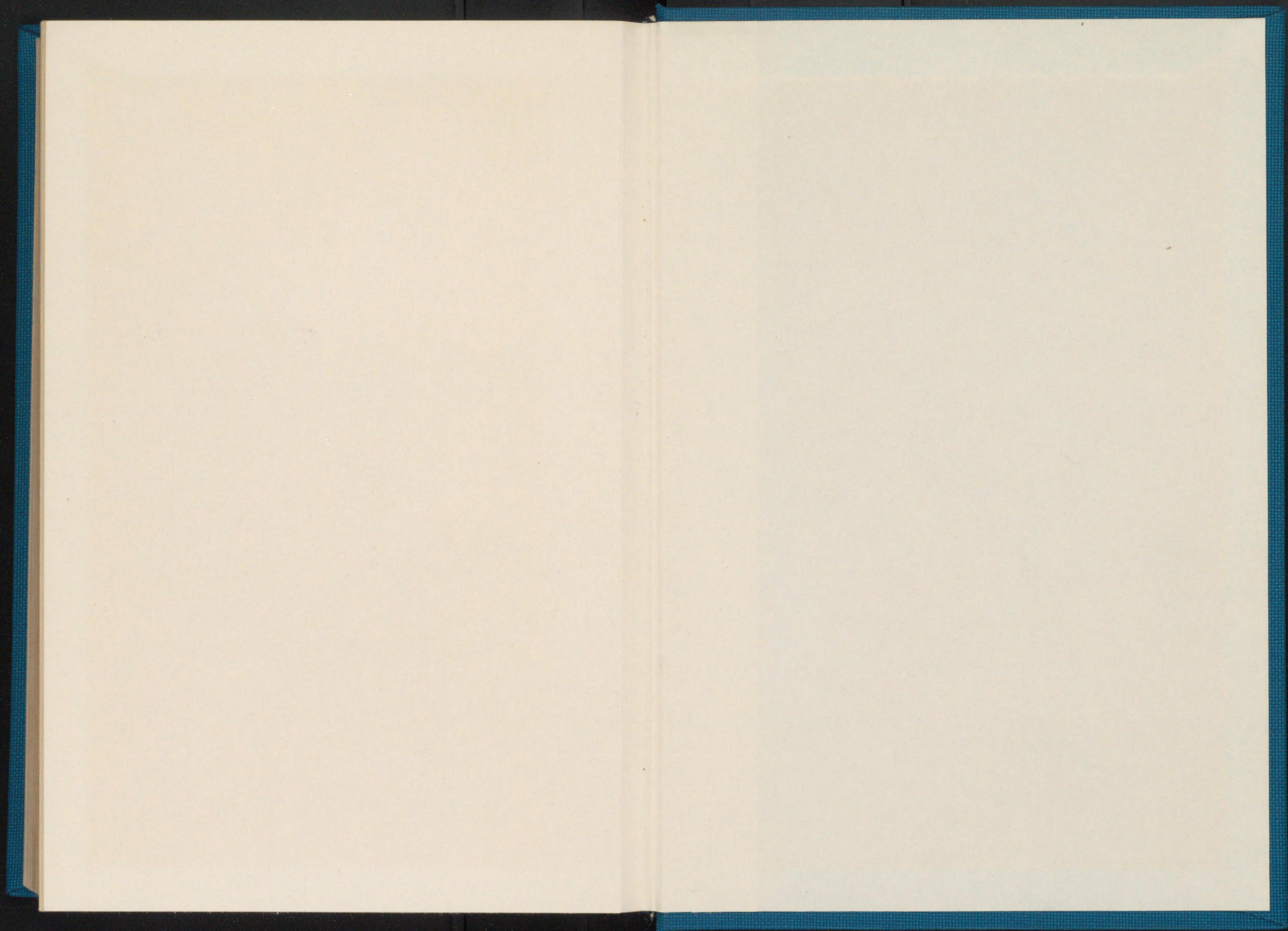
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

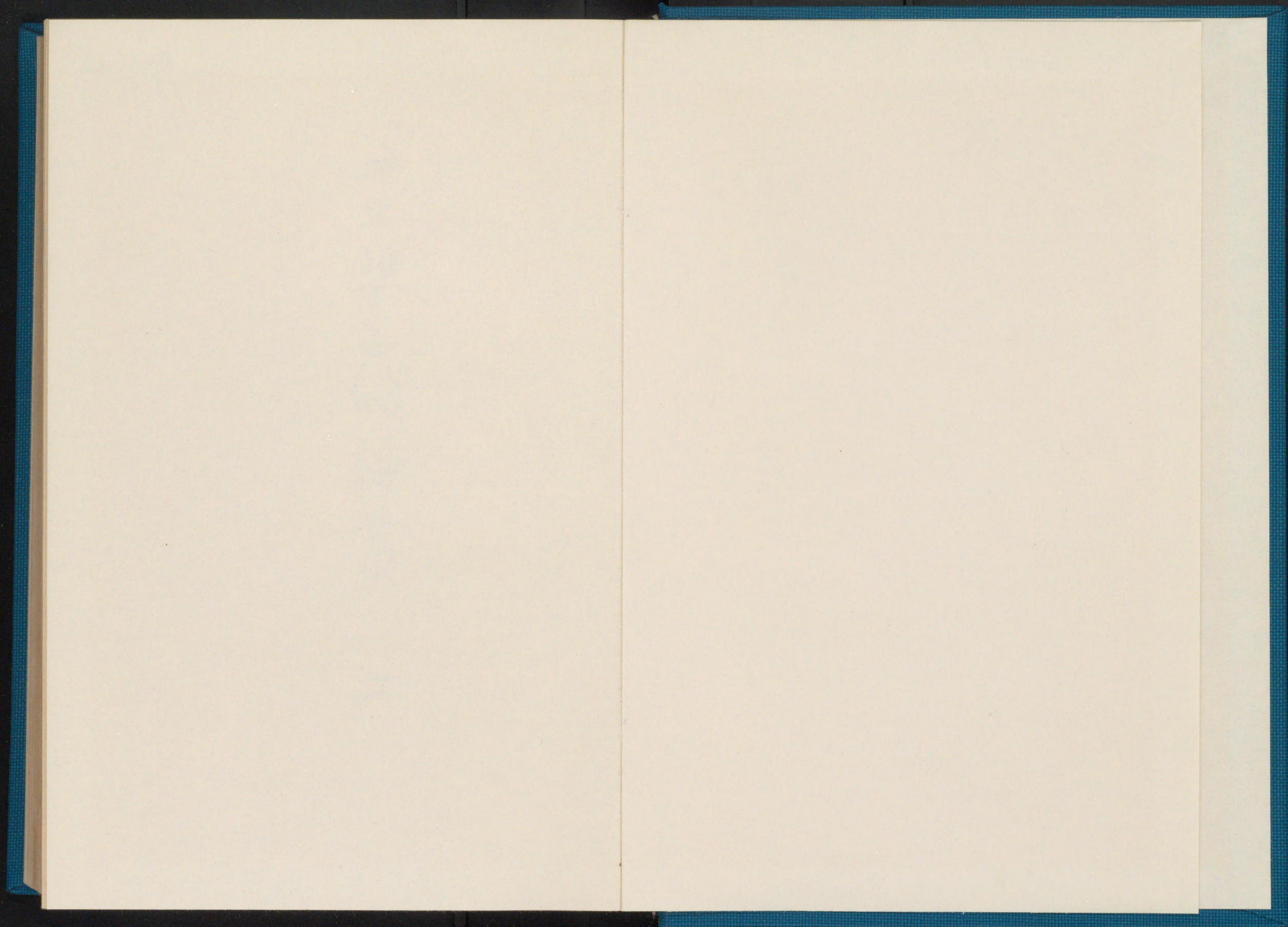


a336-76



1200801444977





JK10

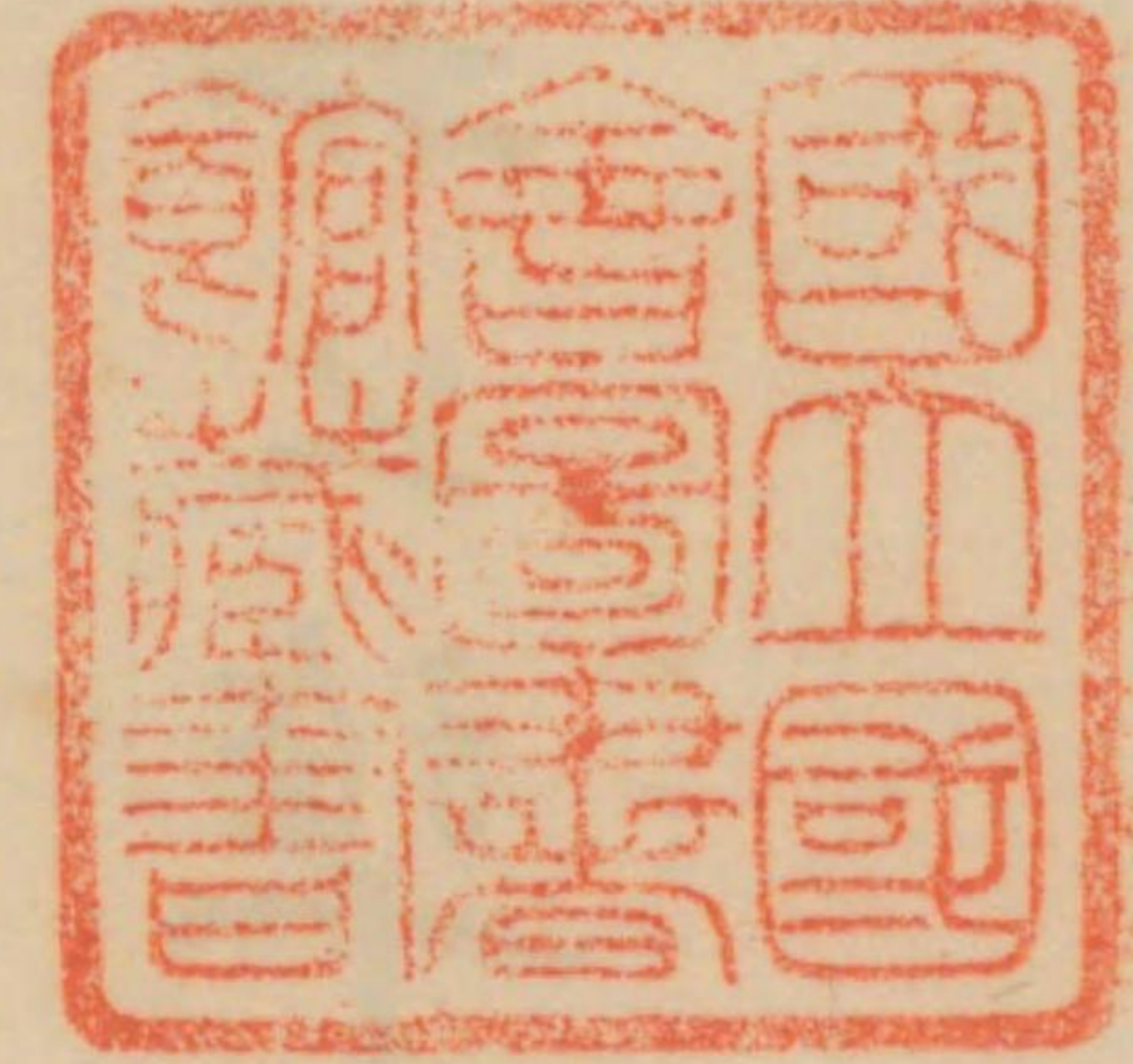
井上準之助論叢

二

~~325
76~~

~~338.04
I476i
I III~~

a 336
76



1805

1805

井上準之助論叢 第二卷(演説、講演) 目次

日本銀行行員時代の講演

英國に於ける銀行支店制度……………一

英國銀行支店制度の發達……………一

銀行の買収と合併方法……………三

本店と支店との關係……………七

支店計算の監督……………八

支店營業上の監督……………四

横濱正金銀行時代の演説、講演

工業資金融通法……………三

現在の工業資金調達法……………三

増資は寧ろ有害なり……………二五
米國の工業資金調達法……………二六
擔保附債券の利點……………三
社債を賣る方法……………三
得意先を結びつける方法……………三
工業資金の運用……………三
結 論……………四

外國貿易と國際間の貸借關係……………四

日本の外國貿易……………四
日本は借金國にして輸入超過……………四
外資輸入の結果と毎年の利拂……………五
輸出増加の方針……………五
輸入超過救済の方針……………五
金融の調節……………五
今後採るべきは積極方針、消極方針の何れにも非ず……………六
外國貿易と國際爲替關係……………六

戦後に於ける世界の金融……………六

列國の戦費は公債による……………六
戦後經濟界の壓迫……………六
戦後産業資金の切要……………六
米國の採れる對應策……………七
帝國經濟發展の方策……………七
日米爲替關係と印棉買入資金問題……………一〇
蠶絲資金の運用と蠶絲の取引に就て……………一〇
東洋に於ける日本の經濟上及び金融上の地位……………一五
金融の中心市場たる絶對的條件……………一五
金の自由市場……………一五
取引の決済市場資金の調達場所……………一六
日本の金利……………一七
銀行制度……………一八
對外放資……………一八

對外貿易	一六
中繼貿易	一八
國際貸借と爲替政策	一六

日本銀行總裁時代(第一次)の演説、講演

第十六回全國手形交換所聯合會演説	三三
第十六回關西銀行大會演説	三三
東京手形交換所新年宴會演説	三六
第十七回全國手形交換所聯合會演説	三四
大阪經濟會演説	三五
東京手形交換所新年宴會演説	三四
第十八回全國手形交換所聯合會演説	三〇

第二十一回關西銀行大會演説	二八
東京手形交換所新年宴會演説	二八
第十九回全國手形交換所聯合會演説	二四
財界所感	三〇
第二十三回關西銀行大會演説	三一
東京手形交換所新年宴會演説	三九

大藏大臣時代(第一次)の演説

第四十七回帝國議會に於ける財政演説	三三
-------------------	----

閑居時代(第一次)の演説、講演

人口増加に伴ふ諸問題	三四
------------	----

人口制限	三三三
海外移民	三三六
工業立國	三三九
食糧の供給	三四四
燃料問題	三五六
關稅政策	三五八
物價の調節	三五九
社會政策	三六三
國運の將來	三六五
朝鮮視察談	三六八
現在の政情	三七八
教育の一斑	三七四
産業の開發	三七六
鐵道の經營	三七九
間島の鮮人	三八〇
農産の増殖	三八三
石炭の利用	三六九
養蠶、棉花、牧畜	三九二

朝鮮に對する國民の責務	三九九
統治の現状	三九九
産業の開發	四〇六
財政と金融	四一三
刻下の財界所感	四二〇
金融制度改正問題	四三二
爲替問題	四三九
現下の金融、經濟問題	四五九
預金協定に就て	四五九
金融制度の調査	四六六
金融、經濟の現在及び將來	四七五
金輸出解禁の時機及び方法と國際收支の改善に就て	四八八

序言	四八八
金輸出禁止時代に於ける爲替相場	四九〇
金輸出解禁の時機	四九三
金輸出解禁の實行方法	五〇二
通貨に及ぼす影響	五〇七
解禁後の國際收支に就て	五二二
餘論	五三〇
金利の問題	五三三
銀行の放資と社債に就て	五三八

日本銀行行員時代の講演

井上準之助氏が明治二十九年七月より同四十四年三月に至る日
本銀行行員時代の講演は氏の論文と共に横濱正金銀行時代のもの
の一括して氏が著書「財界時言」の中に収録しあるを以て、同書
より採録したり。

美国銀行支店制度

第一 英国支店制度、發達

第二 支店より銀行權を得る制度、利害得失

第三 本店支店ノ干渉

第四 支店、監督

第一

支店、生るるニツ、方店アリ、一、支店、新設ニシテ、他、銀行、買収又ニ合
併スルニシテ、方店ニシテ、銀行權得ル増スルニシテ、只、名称、変更、止
ナリ、英国、三、支店、新設、多ク、今、日、新設、各地、ナリ、故、
テ、二、買収、合併、方店、多ク、有、標、也、

英国銀行社界、大勢、見、凡、日、二、年、銀行、権、得、増、加、ス、ト
小銀行、大銀行、合併、見、凡、日、二、年、至、實、ナリ、

英國に於ける銀行支店制度

(明治三十二年十月六日
於銀行同志會秋季大會)

英國銀行支店制度の發達

英吉利は、私が見ました所では、支店の發達して居ることは世界第一ぢやなからうかと思ふのです。尤も佛蘭西或は獨逸あたりにも、支店は、大層澤山あります。獨逸の中央銀行の如きは二百九十といふ澤山な支店を持つて居りますが、併し之れは特別な事情があるのであつて、他の獨逸に在る銀行を見ると、案外に支店が少ないのであります。それから佛蘭西に行きますと、佛蘭西の中央銀行が九十四ばかりの支店を持つて居る、又他にも私立銀行で百以上支店を持つて居る銀行が二つばかりある。併しながら其の數から云つて見ても、制度の上から云つて見ても、英吉利が世界中で一番支店制度が發達して居りはせぬかと思ふ。英吉利には今銀行の數が丁度六千ばかりありますが、其の中で支店と本店とを比較して見ると、

本店は僅か三百五十九とかいふ數であつて、あとの五千四百四十八といふものは悉く支店であります。それから百以上の支店を持つて居る銀行が、英蘭に十以上あります。又蘇格蘭には主なる銀行が七つありますが、其の七つの銀行共皆百以上の支店を持つて居ります。英吉利中で一番澤山支店を持つて居る銀行はロイズといふ銀行でありますが、其の銀行は支店を二百四十八程持つて居る。私等の居りましたパースバンクは、倫敦の街の真中に二十四地方に八十四程支店を持つて居りまして、合計して先づ百八つ程になります。斯くの如く支店制度は、英國が一番發達して居るやうに思はれます。それで英吉利の今日の有様を見ると、先づ支店も殖え銀行も殖えますが、銀行の殖える速度よりも小さな銀行が大きな銀行に合併せられて、其の爲めに支店の數の殖える方が餘程速力が速いのです。今、日本と比較して申し上げますと、現今日本の銀行の數は約二千九百ばかりある、先づざつと三千あるものとしまして、其の三千の中で本店と支店とを比較して見ると、本店の數が千八百、支店の數が千百であります。英吉利では本店が三百五十九で、支店の數が五千四百何十あるに對して、日本では本店の數が千八百、支店の數が千

百。之れは大層國情も違へば色々な事が違ひますし、又統計を見ましても支店の殖える勢ひは餘程日本も強いのでございますが、英吉利のさういふ有様で進歩して居ることも、諸君の御參考になりはせぬかと思ふのでございます。

銀行の買収と合併方法

英吉利といふ國は大層古くから銀行の發達した處でありまして、今日では殆ど新たに支店を立てるといふ餘地は少ない。だから支店を増すには、合併をするか、或は他の銀行を買収するより外はないのであります。ところが合併と云ふと、日本にも多少弊害がありませうが、重役の間の關係とか、或は今までの仕事の仕來りとか、色々な事で向ふの者も餘程てこずつたのであります。それで今日一般に英國で行はれることは、大きな銀行が小さな銀行を買つてしまふことでありまして、まるで小さな銀行の得意先から何から擧げて買つてしまふのであります。其の買ふことに就きましては、私等が二人でパースバンクに居るうちに丁度一つパースバンクで他の銀行を買つたことがあります。其の時私も色々總支配人に會つ

て聞いたこともありますが、其の時の買収の契約なんかは一の御参考にもならうと思ひますから、簡単に其の主なる條項だけを申上げますと、買収する前に一番買収價格の主な標準となるものは、其の銀行の株が今取引市場で幾らして居るか、即ち今買はうと思ふ方の銀行の株が幾らして居るかといふことを調べて、それを以て向ふの銀行の評価をする。勿論それが第一の標準で、其の次には得意先ですが、此の得意先は己れの方に買へば逃げてしまふ得意先であるか、或は從來其の得意は十分の利益を銀行に與へた者かどうかといふやうな事が、餘程値段に關係して來ます。それから出事上つた契約の條項は、一番先には買収價格であります、尙諸君が一寸不思議に思はれるのは、此の買収をしたならば當時の重役は、同じ場所で此の後相當の年限を定めて、其の間は、例へば四年或は五年間は、他の銀行の重役となることはならぬぞといふ條項が一つある。例へば、東京の銀行が名古屋に在る一の獨立の銀行を買ふ、さうすると其の契約の中に、名古屋で重役をして居つた人が同じ名古屋の中で他の銀行の重役となつて貰つては困る、といふ一の條項がある。これは、英國の銀行では重役の爲めにも餘程得意先を取つて居る習慣があ

つて、あの人がやつて居るならあの人は大層堅い人だからといふやうに、其の人の信用で其の銀行を信用して居る得意先もある。さういふ處にもつて行つて、さういふ信用のある人が外に新たな銀行を立てて、今までの得意先に向つて己れの方に來いと云つて勧誘したならば、其の銀行は値打が無くなつてしまふから、斯ういふ條項は英吉利のやうな信用の發達した國に於ては必要かと思ふのです。それから第三には、使用人を悉く使ふ、決して罷めもしないし、又追出しもしないといふことです。固より年數を限つての話ではあります、新たに從來の使用人の爲めに斯ういふ條項を設ける。之れは英國では餘程舊弊のやうでございますが、決して土臺から一時に物を引繰返して改良するやうなことはない。例へば、今例にとつた名古屋の銀行を東京の銀行が買つたとすると、東京の銀行にはなつたけれども、今までのお得意先が店へ行つても、よく顔を知つて居る先生達が皆居つて、一向變つたことが表面に現れて居らぬといふやうな風の主義を採つて、漸次に改良して行く方針なのでございます。それで計算の事或は帳簿の事とか云ふものは、決して即座には改良しない、改良をするのは唯本店に出す計算位なものであつて、本

店に一纏めにするから、色々區々では困るからそれだけ改良をして、他のものは其の儘そつくり一二年間は用ひて行く、さうして得意の機嫌を損はぬやうにして置いて、漸次好い方針に變へて行くのであります。斯ういふ條項で買収するのですが、此の買収といふことは、合併よりか餘程好い結果を得ますので、向ふでは今銀行を合せると云へば、必ず買収といふ策を採るやうに思つて居るのです。日本にも大層銀行が増加しまして、今統計に據つて見ますと、銀行の數で日本の總人口を割つて見ますに、日本では一つの銀行に就て人口殆ど一萬五千ばかりとなりますが、英吉利では銀行一つに就て人口六千人位の割合であります。さうして見ると、日本も若し英吉利のやうに國が富んで來て市場が發達して來たならば、銀行も亦今から見ると増加する餘地は十分にあると信じます。即ち今日の銀行の數が倍になつて、始めて英吉利と同じことになります。さうして銀行を増すのは、小さな銀行を新たに立てるよりも、支店制度を發達させる方がよくはないかと思ひます。まあ支店の現在の有様は、そんなものでございます。支店制度がよいか、或は本店制度がよいかといふやうなことは、之れは私も大分研究しましたけれども、餘程

ゆつくりした議論でございますから、他日お話を申すことに致しませう。

本店と支店との關係

其の次に本店と支店との關係がどういふ風になつて居るか、之れは日本の本店と支店との關係とは餘程違ふ。私等も初め行つた時に、矢張り日本の本店、支店の關係のやうであらうと思つて居た頭腦で見たものですから、餘程了解し悪くかつたが、よく調べて見ると大分違ふ。本店といふと、日本では矢張り皆他に向つて取引もする。ところが、英吉利の本店と稱するものは、純粹に支店を監督するだけの仕事をするので、外部に向つては一厘一毛の取引も直接にしないのであります。だから何處々々の本店、例へば、バスバンクの本店といふと、二階か三階の隅に蟄居して居ます。一番下に居て、外の人と取引をする必要は少しもないのです。極く普通には、其の本店が三階に在ると、其の下には支店が在る、其の支店のことを稱して俗には何々銀行の本店といふが、併し本店の眼から見ると、自分の下の家に居る支店も、外の田舎に在る支店も、一つも變らない。本店といふものは、外部に對し

て一つも取引をせず、全く支店を監督するのみに出来て居る。之れが餘程、日本の本店と支店との間と違ひはせぬかと思ふ。それがつまり、英吉利では支店が大層多いからさういふ必要が出来て来たのかも知れませぬが、之れは、若し日本でも段支店が殖えて来れば、一つの御参考になる事ではないかと思ひます。

支店計算の監督

それ故に、本店といふものは全く他に向つて取引をしないのであるから、其の内輪の組織は、支店監督局といふものが一つあつて、總支配人があつて、局長になつて居ります。それから各支店の計算を纏める計算局といふものが一つある。又重役會議の記録等、總ての文書類を司る祕書役といふ者が居る。其の外に、各支店を検査する検査役といふ者が居る。それだけのことでございますから、現金出納係、割引係といふやうな者は、全く本店と稱するものには無い。支店監督と云へば、之れはもう分つて居る、計算局も全く支店のもを集めて、一の帳面を拵へて總勘定元帳を持ち、それに附屬の帳簿を持つて居るだけの話、祕書役といふ者も、株券書換

とか各支店に専屬しない仕事をして居るといふだけであります。検査役といふのは、年から年中、各支店を廻はつて、帳簿或は現金、様々な事を検査をして居る。さういふ風の支店、本店の關係でございますと、其の間に支店と本店との關係で色々な事が起つて参りますが、計算の事は、之れはもう傳票でも持つて来まして、一々帳簿と引合して説明をしなければならぬ事で、甚だ諄い事でございますから、全くぬきにしてお話しませぬが、本店が外に向つて取引をしない、支店の監督だけして居るといふことになる、本店の費用の出やうがない。向ふの銀行は、監督上では、まるで支店を本店の手足のやうに働かして居るが、相互の貸借に對する利子などに至つては、全く獨立の銀行と同じことで、外の支店から金を借りれば相當の利子を拂ふ、貸せば利子を取るといふやうな仕組にしてある。で、本店が支店だけ監督して、外に向つては取引をしないといふと金の這入つて来やうがない、然るに重役であるとか或は支店監督役、或は計算局長とかいつて、中々給料を多く取る人がある、そんな經費はどうして拂ふかと云ふと、それは妙な仕組になつて居る。極く根本的の考へから云つて、本店は何の爲めに成立つて居る、本店がこんな經費を使つて

態々苦心するのはどういふ譯かと云ふと、畢竟各支店が得意先に向つて貸出をする、其の貸出をするには危い貸出をしてはならぬからと云つて監督する爲めに本店が成立つて居るのであつて、割引と貸付とを監督する外には、何も仕事は無いと云つてもよい。従て餘計貸付をすれば本店は餘計力を用ひて監督して居るといふ一の根本的考へから來て、餘計に貸付、割引をする處は餘計本店に金を献上しろといふやうな仕組で、各支店は割引、貸出の半期の平均をとつてそれを合計して置いて、さうして本店の経費を片方に於て合率比例をとつて、多く貸出、割引をしたものが多く本店の経費を拂つてやるといふやうな風に、各支店から本店の費用は持寄るのであります。日常の経費の支拂の事はそれだけで、偕てそれから支店が他の支店に金を貸すときにはどうするかと云ふと、多くは皆さん御承知のやうに、本店勘定で本店に一度貸して、本店から他の支店に貸してやる勘定になる。然れば金を貸した方はどれだけの利子を貰ひ、借りた方はどれだけの利子を拂へばよいかと云ふと、之れは各支店の支配人がどの位の一年間に働きがあつて、伎倆があるかといふことを見るのでありまして、大いに必要ぢやないかと思ひますが、總ての

會計を獨立させてしまつて、其の一年の働き高で支配人の伎倆を見るといふことは、支店を監督する一の方法ぢやないかと思ふ。で、或は貸した或は借りたといふことに就ての利子の計算方法は種々様々の説があるが、今では先づ斯ういふ風に極まつて居るさうです。貸方の方から云つて見ますと、或支店が平均百萬圓の貸がある、即ち本店に對しそれだけ半期の間に貸があるとする。さうして其の支店の預金利子が幾らであるかと云へば、例へば二分とします。さうすると其の支店は、預金でもつて百萬圓の金を取つて、それを本店に貸したのであるから、其の二分の預金利子を拂ふだけの金は本店から貰はなければ合はない。そこで先づ二分だけは本店から貰ふ、さうして預金利子を拂つてやるといふ勘定である。それから借りて居る方の側から云ふと、之れも矢張り預金利子を見るのでございます。預金で百萬圓借りて居るとすると、矢張り預金利子を拂はなければならぬ。それを場所が變つて一分半なら一分半とする。若し百萬圓得意先から金を借りるとすれば、それだけの預金利子はどうしても拂はなければならぬ。之れはもう本店に第一番に拂ふが當り前で、百萬圓の一分半、壹萬五千圓といふものは拂つて

やる。すると、一方の貸して居る方の支店は、預金利子だけは貰つても手数料だけ損をする。ところが借りて居る方の支店は、預金だけの利子を拂つて預金は皆貸付けてあるから其の差は悉く儲かる、つまり儲け過ぎることになります。そこで借りて居る方の貸出利子の平均を五分とする。一分半で借りて五分に貸すとすれば、三分半は借りて居る方がまる儲け、これでは借りて居る方が好過ぎるからといふのでそれを二つに割る、其の三分半を掛けた三萬五千圓なら三萬五千圓の金を二つに割つて、自分が其の半分貰つて、貸して居る方に半分やるのです。さうしますと、之れが一番公平な勘定になるといふのであるさうです。大分妙な勘定でございますが、之れが一番公平な勘定としてある。

それから本店に居りまする検査役といふ者ですが、私等の居りました銀行では検査役を二つに分けて、倫敦だけの街を何時も検査して居る人間と、地方の支店を何時も検査して居る人間と、二つに組が別れて居た。私も土方さんも其の検査役に隨いて廻はつて見たが、中々厳しく検査をする。大概二人で主にやつて居つて、それに監督者みたいな者が隨いて居ります。其の監督者みたいな者は重役會に

も列席して、あの支店は斯ういふ働きをして居るとか此の人は此の支店には不都合でいかぬとか、あの人は此方に移した方がよからうといふやうな人事に就ては、皆此の検査役に本店の方から任してあつて、さうして検査役が重役會議に列して其の意見を述べる事が出来る。で、其の人が監督して、あと二人を使つて、始終倫敦市中をうろついて支店の検査をして居る。其の支店検査の有様は、通知も何もしない、突然行つて現金の検査をして、それを帳簿に合せ、それから帳簿をすつかり検査し、其のあとは抵當品を検査する。之れも唯簡單にこれだけの株がある、これで株が幾つといふやうな簡略なことではなく、或は土地を抵當にして居るものもあれば、拂込の濟まぬ株を抵當にして居るやうなものもあるから、其れ等は田舎の支配人では目の届かない所があるものだから、検査役に良い人間を使つて、極く厳しく検査をして、悪いものがあつたならば悉く其の場所で云つて改正させる。検査役といふ者は何處でも大層憎まれ者で悪くは云はれるが、支店の方から見ますると、少しも粗漏な事が出来ず、始終氣をつけて、何時でも銀行の計算といふものは夕方にはちやんと出来上つて居るといふやうな仕組になつて居て、大層向ふでは檢

査役の效能はあるやうに思ふ。

支店營業上の監督

それから一番終りに支店の監督の事ですが、計算上の事は計算局でさういふ風の仕組だから何でもないが、營業上の監督の事は、さういふ風に澤山支店を持つて居て支店を段々に發達させて來たので、餘程向ふでも研究した末が次のやうになつて居ると思はれる。私等も餘程感心しましたから、ざつとそれを申し上げます。之れにも色々な表や何かありまして、完全な事はとても申上げかねますが、唯大體の事だけ申しますと、先づ支店の得意先が一人居つて、其の人が預け金だけをして居る間は支店の監督は格別生じない。ところが英國の習慣では、當座を開いて一年なり二年なり過ぎて、其の人の資力が分るやうにならないうちは貸金はしないのです。勿論之れには例外があつて、身元をよく分つて居る人は今日得意先になつて明日金を貸す人もあるが、先づそれが一年なり二年なり當座を開いて後貸すのが普通の習慣であります。さうすると、今度得意先から金を貸してくれろと云

つた時にはどういふ風に支店支配人はやるかと云ふと、先づ非常に詳しい表がありまして、其の表には總て其の得意先の身元に關して支配人の頭の中にある事を悉く書いて本店に出す、例へば今まで一年間の當座の有様は斯うである、此の人は何處にどれだけの財産を持つて居る、どれだけの借金が何處にあるさうだ、此の人はどの位の資産があるといふことはどういふ確かな口から聞いたとか、あるだけの事を表に書いて、さうして本店の支店監督局に出して、これ／＼の者が金を貸してくれと云ふが、これだけの金を貸してやつてもよからうかといふ一つの許可を経る。乃ち其の表が本店の支店監督局に來ると、それを翌日の重役會議に出して、重役會議の決議を経る。さうすると、重役は處々方々から集まつた人で、種々様々な商賣をして居る人があるし、從來の經驗上中々各地の事を知つて居るから、これはこれだけでは多過ぎるとか、これだけ貸してもよからうといふ評議があつて、これだけは貸してもよからうといふことが決まると、直ぐに其の表を支店監督局に返す。支店監督局では、各支店分けにした帳面が一冊宛置いてあつて、其の貸金を受ける者が名古屋なら名古屋支店といふ帳面を出して、其の中の何の某といふ名

前の下に、支店から送つて来た表に書込んである總ての身元を書込んでおく。さうしてこれだけの金高までは貸してよいといふ、重役會の決議があつたことを書込んでおく。さうして支店へ重役會議の決議を通知してやる。それから支店では金を貸してやるといふ順序になる。

ところが又他日、其の金を今まで百圓のを二百圓に殖やしてくれといふ請求があると、又初めの通りに、其の後變つた形勢をずつと書いて来て、さうして本店の許可を受ける。さうすると、本店で變つた意見があるとすると、其の元帳にすつかり書込んでおく。それ故に支店の支配人は、此の得意先はこれだけの資力があつて、どれだけ金を貸してもよいといふ頭の中にある事は、本店の支店監督局に行くと、帳面をひろげて見ればよく分る。故に本店の總支配人は、居ながらにして、斯ういふ得意先にこれだけの金を貸してよいとか、貸してあるとかいふ事を知り、十分支店を手足を動かすかのやうに、監督して居ることが出来る。それから又、人間の資産といふものは毎年變化するものでございますから、其の詳しい表は毎年一度宛は必ず支店監督局に繰返し、或は其の後新たなる事が出来れば書加へて、本店へ送

つて來ることになつて居ります。送つて來ますと、本店の支店監督局では、前に書いてある書込と比較して、さうしてそれに變つた事があれば又書込む、同じならば其の儘にして置いて、それを段々集めて其の帳面を完全にして行くといふ仕組になつて居る。それでございますから、一方から云ふと——私等が考へて見ると、英吉利では支店を監督するのは實に嚴しい、或は嚴し過ぎはせぬか、支店支配人は本店の重役會の決議を経て、此の得意先ならば何萬圓貸してよいといふ極度を決められ、其の極度内でこそ金を貸すことが出来るが、其の極度を超えて一厘でも貸さうと思ふと、本店の許可を得なければならぬ。故に餘り英吉利の支店監督の仕方は嚴し過ぎはせぬかと思ふやうな事もございますが、何にしても百以上の支店を持つて居つて、自分の手足のやうに各支店を働かして行かうといふには、それだけの監督は必要と思ひます。それでございますから英國では、支店の爲めに事無くじつたとか、本店の監督が届かずして、支店の支配人が專斷で事を計つた爲めに銀行全體に狂ひが來たといふやうな例は、餘程少ないさうです。それは皆自分の仕組を譽める爲めに云ふのかも知れませぬが、さういふ事を云つて居る。金錢

上では全く各支店は獨立して居り、監督上では全く本店の各局部が働くといふやうな風に働いて居る。これが英吉利の支店監督の有様でございます。

横濱正金銀行時代の演説、講演

井上準之助氏が明治四十四年三月より大正八年三月に至る横濱
正金銀行副頭取及び頭取時代の演説講演は「財界時言」中より採
録したり。「財界時言」は氏の日本銀行時代並に横濱正金銀行時
代の論文演説講演集にして氏が大正八年三月、日本銀行の總裁に
任命せられ横濱正金銀行を去るに當つて行員一同より贈られた
る記念品に對しての返禮として頒たれたるものなり。

外に貿易するに於て日本ノ
位置

地域狭り農産物少ナシ
天然ノ富原タル鑛山少ナシ
只石炭、銅、鉛、耳
次、金、之

工業資金融通法

(明治四十四年
財政經濟研究會)

工業資金、即ち廣く云へば、稍固定的の性質を帯び、長期に亙る資金融通の問題は、我國目下の最も重要な問題であり、我國工業の振はざるは、資金の調達方其の宜しきを得ざる爲めではないかと考ふるのである。故に茲に、職業上より得たる經驗と、先年米國滯在中に研究したる諸點とを述べて、識者の教へを請ひたいと思ふ。我國の銀行制度に於ては、工業資金と銀行とは全然關係が無いのである。何となれば、我國の銀行は一、二の特種の銀行を除き、他の普通の銀行は預金を以て主要の資金として居るから、性質上如何に有望なる工業と雖も、手出しをすることは出来ぬのである。換言すれば、銀行自身の有する資金の性質は、工業資金には融通し得ぬものである。即ち預金の性質として、或少額は比較的長期間——長期間と云つても大抵一年位より長い期間のものは無い——の預金であるが、其の大部分は

預け人の請求次第支拂はなければならぬ當座預金である。故に之れを、三年とか、五年とか、十年とか乃至三十年とかいふ如き、長期間に亘つて固定的に放資しなければならぬ所の工業資金に融通することは出来ぬのである。又第二の資金たる資本金、積立金の如きは、諸銀行共、今日では餘程其の高が殖えては居るが、此れ等は銀行それ自身の建築とか、或は止むを得ざる長期間の資金とかいふものに固定せしめて居ることが普通の状態であるから、之れを以て工業資金に充つることも出来ぬ。又假令、此の雙方の資金のうち、幾分を融通し得るとしても、其の額は極めて僅少なるべきが故に、事實上工業資金としての用をなすに足らぬのである。

今試みに、日本の銀行が如何に工業資金を融通するに至難であるかといふ一例をあげて見れば、明治四十年の暮から四十一年にかけて、日露戦争後の經濟界の小恐慌があつた時に、新事業に對する資金を得るに非常に困難なる場合に立至つた。其の時に日本銀行の當局者と東京の主要なる銀行家とが相集つて、此の新興の工業といふものは決して不健全なものではないのであるから、何とかして之れに金を貸したらよからうといふ話があつて、銀行業者も内心皆救済すべきものである

と認めながら、自分の銀行の手許から割出して算盤をとると、如何にしても工業資金として放資することが出来なかつた。何故ならば、此の時は敢て取付に遇ふといふ程ではなかつたが、恰も預金の減少する時であつた爲めに、確實、有望なる工業が眼の前にありながら、見す／＼放資するを得なかつたのである。斯かる有様であるから、工業資金といふものは、現在の日本の銀行にとつては非常な難問題である。而も單に難問題といふよりも、寧ろ殆ど之れに直接關係する能はざる實情であるといふ方が至當であると思ふ。尤も之れは、日本興業銀行若くは日本勸業銀行の如き特殊の銀行を除いた所の普通一般の銀行に就て云ふのであつて、日本興業銀行や日本勸業銀行に向つては、此の筆法を以て對することの出来ぬのは無論である。

現在の工業資金調達法

然らば日本の現在に於ける工業資金の調達法は如何であるかと云ふに、百萬圓とか乃至五百萬圓とかいふ大資本の工業會社に對しては、日本興業銀行等の手を

經て、十分に資金が供給せられて居るかも知れぬ。併しながら、日本の工業の基礎たり中心たる所の小資本の工業家——之れを日本の工業の基礎、中心と云ふは、或は余の獨斷かも知れぬが、余は斯く信ずる——に對して、例へば東京の場末の深川とか、本所あたりの小工業家、又は大阪市の周圍を圍繞して居る所の小工業家、資本金の高から云へば、五千圓、一萬圓乃至五萬圓位までの大多數の小工業家に對して、如何にして資金が調達せられて居るかと云へば、實に哀れなる状態にある。日本の銀行家は、前にも述べた如く、全然此れ等の小工業家とは直接の關係が無い。故に工業家が銀行から金を借りようとするには、嘘をついて借りなければ借りられない。即ち眞面目に、私の工業は三十箇年経たなければ元金は還りませぬ、十箇年経たなければ基礎を確立することが出来ませぬ、などと云つては、銀行家は金を貸すものでない。従て工業家が銀行から金を借りる時には、勢ひ、或はこれは材料を買ふ爲めに要する資金であるとか、或は又賣掛代金の集まるまで一時借用したいとか云つて、嘘をついて借りるの外はない。斯かる實際の有様であるから、普通の銀行が純粹の工業資金として放資して居るものは極めて稀である。此の故に、此

れ等の工業家は如何に確實、有望なる事業を持つて居ても、到底低利の資金の供給を受ける途は無いのである。茲に於てか余は、此の工業資金の供給といふ問題は、實に日本の將來の爲めに、大いに考究を要する所の大問題であると思ふ。

現時の日本に於ては、常に工業資金融通の途がつかざるのみならず、小商人の爲めの金融機關たる銀行といふものは餘程少ない。現任大藏大臣であつたと思ふ、一度日本橋通を一端より他の一端まで歩いて見て、小資本の商人に對して資金を供給する爲めに、一戸に付千圓以下の金を撒く積りで銀行をして手形を取らして見たならば、勿論餘程骨も折れるであらうが、非常に役に立つと、何時か座談の一節に云はれたことがあると思ふ。要するに、小資本の商人に對して、資金供給の途が十分に開けて居ないといふことは、工業家に對して工業資金供給の途が開けて居ないと同様、吾人の最も遺憾とする所である。

増資は寧ろ有害なり

斯くの如く目下の我國に於ては、工業資金融通の途は殆ど斷たれて居るのであ

るから、何等か變通の方法によつて之れを調達しなければならぬ有様となつて居る。而して其の方法は種々あると思ふが、先づ普通日本で行はれて居る方法は、會社の資本金を増す方法である。併しながら、これは非常に弊害の多い方法で、多くの場合に於て、會社の事業よりも株主そのものの私の利益の爲めに増資を迫るのである。故に増資の結果は、其の會社に非常の不利益となるのである。世人の知る如く、我國で云へば、七分以上の配當をなさざれば株券が額面以上の價格を維持しない。額面以上の價格を維持する場合に増資をすれば、株主は非常の利益を得るが故に、株主は増資を迫る。而して斯くの如くして増資した結果、會社が七分の配當を爲すとすれば、之れはとりも直さず、七分の利息の金を借りたと同様である。又一割二分の配當をすれば、一割二分の利息の金を借りたと同様である。故に工業上、これ程不利益な事は無いのである。如何に日本の金利が高くても、一割以上の金利を標準として事業をなすことは、多くの場合に於て計算が立たぬ。さらばと云つて、銀行は前云つた如くであるから、到底之れより資金の供給を仰ぐことは出来ない。或は銀行が増資して、其の増資額だけを工業或は不動産に對して放資

しようといふ企てもあるが、斯かる姑息の方法では、到底無限の需要ある工業資金を十分に調達することは出来ぬと思ふ。加之、若し預金を主なる資金として居る日本の銀行が、其の一部の資金を工業に放資することとならば、或は其の爲めに弊害を生ずるが如きことはあるまいかと危ぶまれる。何故ならば、銀行より金を借りる者はなるべく長期間借りようとし、貸す銀行はなるべく短期間の金を貸したので、常に其の間に意見の衝突がある。然るに一部の金を長期間で貸付けるといふことになる、人情の弱點で、終には銀行全體が此の爲めに捲倒されるの虞れがありはしまいかと、危険に思ふのである。而して銀行から借りることが出来なければ、外に何處からか資金を得來る途があるかと云ふと、間々個人の資本家が工業家に金を貸すことがないでもないが、之れは日本の現状から云ふと、非常な弊害があるから、努めて避くべき事であると思ふ。即ち現に我國に於て小資本の工業會社に資金を貸して居る個人の資本家は、多くは高利貸であつて、或は自分に多少の有價證券を所有し、或は多少の信用あるを利用し、之れを以て銀行より金を借りて、更に之れを會社に轉貸し、非常に高い利子を貪るのである。故に今日の我工業

家は、正當の途を以てしては、個人の資本家からも金を借りるの途は無いのである。茲に於てか我工業家は、殆ど何處からも資金の供給を受け得ない窮境に陥つて居るのである。果して此の窮境に陥れる工業家を救ふべく、資金を供給するの途は無いであらうか。余は之れを論究して見たいと思ふのである。

米國の工業資金調達法

工業資金を調達するに就て、余の經驗上最も参考に資すべきは、米國の工業資金調達法である。米國と雖も、普通の國立銀行が、工業に對して放資して居るといふことは絶対に無い。又州立銀行、信託會社と雖も、自己の資金を工業に供給しては居ない。然らば此れ等の各種の銀行と工業との關係如何と云ふに、唯單に工業會社の所有せる材料或は賣掛に對する手形を割引するより外に關係は無いのであつて、此れ等の銀行が自己の資金を以て長期に亙る工業資金を貸與せる例は無い。英吉利となると少しく趣きを異にして、比較的長期間の性質の金を貸して居るが、米國では一切之れが無い。米國では主に社債を發行して、工業會社に對する資金

を提供して居る。其の社債は大小種々あつて、極めて少額のものは一會社五千弗より、多額のものは一會社五千萬弗位まである。そこで米國は社債が非常に盛で、毎月發行せらるゝ有價證券の額は一億弗以上、即ち之れを一箇年で計算すれば十億弗以上に達するのであるが、其の中の約三分の二は社債で、残り三分の一が株券といふ割合である。米國人の言によれば、既設の會社にして株券を以て増資するが如きことは殆ど無く、唯之れあるは、社債が募れる見込の立たない場合に止むを得ず株券を募り、敢て危険を踏むの株主を求めのみである。此の故に、苟も會社の目的さへ確立すれば、敢て株を以て増資するの必要は無いのである。而して其の社債の發行に就ては、バンカー、即ち個人銀行家ありて之れを取扱ふのである。其の取扱ひの方法は一様ならざるも、極めて普通の場合にありては、其のバンカーが次の如き方法で社債を募るのである。(米國の金滿家は殆ど悉く皆バンカーであつて、かの有名なるモルガンもシッフもバンカーで、會社組織になつて居るのである。)

例へば或鐵道會社が社債を募るとする。此の時には其の懇意のバンカーに依

頼する。而して米國ではバンカーの勢力範圍が定まつて居て、例へばハリマンの鐵道ならばシッフが資金の供給を引受けるとか、又グレイト・ノーザンの鐵道ならばモルガンが資金を調達するとかいふ如くに、系統が分れて居る。故に例へばハリマンのユニオン・バシフィックの社債を募らうといふ場合には、之れをシッフに相談する。シッフはハリマンの事業をよく知つて居るから、別に取調べる必要も無いが、若し假にシッフがユニオン・バシフィックの性質を知らなかつたとすれば、其の現在の組織とか、將來の見込とかいふことに就て、非常に綿密な調査をする。(バンカーは皆有力なる調査機關を持つて居る。)其の上で、例へば、今回資金が五千萬弗入用であるといふことが宜しいとなれば、五千萬弗だけの資金供給を一手に引受けてしまふ。故に其の以後に於ては、ハリマンの方では資金の調達に就ては一切心配する必要無く、金の要るに従ひシッフの方から供給するのである。而してシッフの方はどうするのであるかと云へば、巨額ならばシンディケートを組織して引受け、若し時機が悪ければ、自己が社債を發行して悉く之れを握り、之れを以て他の國立銀行、信託會社等から金を借りるのである。又或場合には社債を發行せずして、自己の有する信用、若くは有價證券を以て資金を他に仰ぎ、此の資金をユニオン・バシフィックに貸付けておき、好時期の到來せし時、社債を發行することもある。

今や紐育では、大銀行は殆どシッフ系統とモルガン系統との二つに分れ、各、此の兩者の意志に應じて金融をして居る。斯くしてバンカーは工業家の資金調達を引受けるが、然らば其の發行したる債券に對するバンカーの責任は如何と云ふに、バンカーなる者は元來自己が爲し能ふだけの取調べを爲して、其の債券を自己の得意先に賣込むだけであるから固より法律上の責任は無いが、併しながら徳義上の責任は何處までも負ふのである。故に若し自己が世話して債券を發行せる會社が、自己の言を聽かずして、其の會社を危険に瀕せしむるが如き企てを取てなす時には、自己が勧めて債券を買はせた人々に警告を與へて其の社債を處分せしめ、或は内密に自己の世話せる社債だけは賣らせてしまふ。又不幸にして、其の會社が支拂の停止をなすが如き場合には、之れに關係せるバンカーは第一著に破産管財人となり、又會社再興の場合には其の委員となり、社債の所有者をしてなるべく

損失を少なからしむることを常に心掛けて居るのである。

而して最近の新現象として認むべきは、社債發行に際して國立銀行、信託會社等がシンディケートを組織して、漸次地歩を占めつゝあるといふことである。或は他日、此れ等の銀行がバンカーの地位を奪ふやうなことがあるかも知れぬと思ふ。

擔保附債券の利點

米國の債券が悉く擔保附なることは考慮を要する事である。余の調査せる所に據れば、無擔保の債券はニューヨーク、イングラント州の往昔の社債の殘存せるもの一、二あるのみで、他は悉く擔保附債券である。故に英國流儀の所謂デベンチユアーなるものは皆無と云うて宜しい。何故英國と米國とが斯くの如き差違があるかと云へば、種々説はあるが、普通は次の如くに説明して居る。曰く、英國は舊國なるが故に何れの工業を見るも多くは、或は十箇年或は十五箇年と云ふが如くに、事業の成績をあげて居る。然るに米國は之れと反對に、餘程大資本の會社を尋ねて見ても、十年以上のものは極めて少ない。假令十年以上のものがあつても、合併等に

よつて新しきものとなつて居る。極く新しいものとしては、二年或は三年位のものがある。斯かる有様であるから英國の會社は、既に十五箇年間斯くの如き成績をあげ得たから、此の後と雖も斯くくの成績をあげ得るならんとの豫想がつくが、米國の方の會社は皆非常に新しく、三年、五年のものが多いので、十年以上のものは餘程尠なくなつて居る。従て從來の成績を以て直ちに將來二十年、三十年間の成績を測量することは困難である。故に此の危険を防ぐ爲めに、資金を融通する總財産を擔保に取つておくことが、信用を維持する上から云つても非常に利益である。余は此の點は日本に應用し得ると思ふ。事業が未だ十分に信用を博するまでに發達せず、又事業に手を著けた年數も新しい間は、債券の信用を維持する爲めには、擔保附債券の方が無擔保のものに比して遙かによからうと思ふのである。

社債を賣る方法

次に如何なる方法を以て社債を賣るかと云ふに、米國では例へばシッフの如き大なるバンカーの下に無數のバンカー・エンド・ブローカーがあつて、或者は取引所

のブローカーであり、又或者は取引所に無關係の單純なるブローカーであつて、甲のブローカーは公債のみを取扱ひ、乙は殆ど市債のみを取扱ひ、丙は會社の社債又は株券のみを取扱ひ、丁は例へばペンシルヴァニア州の市債のみを取扱ふといふが如くに、各、特色を持つて居る。而して之れが又各、自己の得意先を有するが故に、例へばシッフが今回斯くくの社債を取扱つたと云へば、其の社債の種類に應じ、各、特色の異なるブローカーを吸收するといふことになるのである。

尙日本にあつては一寸想像の及ばざる程の巨額の債券を賣捌くことを得るのは、其のバンカーが歐羅巴に非常に良い連絡を有して、米國で發行せる社債を悉く之れに賣込むからである。世人も知る如く、米國は非常に金利の激しく動く處でありますから、社債を永く持つて居ることが出來ぬ事情がある。故に大頭のバンカーは大抵、獨逸とか佛蘭西とかに連絡を持つて居て、其の方面に賣捌くことに努めて居る。例へばシッフの如きは、元來獨逸出身の人であるから、獨逸の金融業者と非常な良關係を有し、之れによつて常に巨額の社債を賣捌く、又佛蘭西にも良關係を持つて居る。嘗て彼がペンシルヴァニア鐵道の社債四千萬弗を一手で引受

けた時には、一枚も之れを米國に於て賣らずして、悉く獨佛兩國へ向けたのである。

又米國の銀行と日本の銀行との異なる所は、米國の國立銀行及び信託會社は、自己所有の有價證券中に多くの社債を持つて居ることである。今一例をあげて云へば、ナショナル・シティ銀行といふのが紐育で最も大きな銀行であるが、之れが何時でも殆ど二千萬弗乃至三千萬弗の社債を其の手許に有し、而して銀行の店先に於て之れを自己の得意先其他に賣るのである。これは米國の國立銀行にとつては、非常によい収入になつて居て、大きなものになると、日に二百萬弗位は賣れることもあると聞いて居る。此れ等の點に就ては、餘程日本の銀行と考へが違つて居て、彼にあつてはシンディケートの組合員として、或は其の賣残りの社債を所有し、或は他のシンディケートのものを多く引受けて持つて居るといふこともあるので、日本の銀行のやり得ない仕事をやつて、非常に好い利益を得て居る。

得意先を結びつける方法

曩に余はブローカーが各、自己の得意先を有することを述べたが、其の得意先と

自己との間を如何にして結びつけるかと云ふに、普通商賣上に多く用ふる所謂賣子を用ふるのである。米國では、農具とか麥酒とかを賣るにも各州に受持の賣子を出してあるが、社債を賣るにも之れと同様に、ブローカーが多く、賣子を使ふのである。而して此の賣子は米國中を賣つて歩く。獨り米國內のみならず、歐羅巴にも此の賣子が出してあつて、此れ等の賣子だけの収入が、年々三萬弗位はあるとのことである。從て如何に賣子が勉強するか、又米國中に多數の資本家を有して居るかといふことが大體分るのである。

尙面白いのは、良いブローカーになると常得意が非常に多いので、之れは祕密のものとして取扱つて居る。此の常得意の名前は他のブローカーの常に知らんと欲する所であつて、現に余の親しく見聞、記憶せる一例であるが、或一人のブローカーが破産したことがある。其のブローカーは可なり良い方のブローカーであつた爲めに、其の常得意の人名簿を五萬弗で買ひたいと或人が申込んだことがある。以て、米國に於て如何に資本家の名簿が重んぜらるゝかといふことが分る。而して斯くの如く資本家の名簿が重んぜらるゝ所以のものは、米國の地域廣大なるが故に、豫め系統を明かにして賣込むにあらざれば、勞多くして功少なきによるものであらう。

工業資金の運用

直接工業資金ではないけれども、之れと同性質のもので、又同様社債によりて調達した資金が、米國の廣漠たる土地を開拓し、又間接には工業を起すに就て、如何なる運用をなしつゝあるか。一、二の實例を述べれば、米國南部のテキサス州のあれほど廣き土地を今日の如く開拓したのは、非常な巨額の資金を注入したのであるが、其の資金は何處から如何にして供給したかと云ふと、多くは聖路易、市俄古、紐育から來たものである。其の方法は二つあつて、第一は極く簡單なる方法で、テキサス州の信託會社が不動産又は工業會社に向つて、自分の資金を以て金を貸すのである。而して貸金證文は比較的多額のものであれば、之れを數枚に分割し、何時にても他に権利移轉の出来るやうにしてある。それは得意先の中で、多少長期に互つても利子の高いものを希望する者に、此の貸金證文を譲り渡すのである。さす

れば其の得意先は、定期預金證書に抵當の附いたのを持つて居ると同様であつて、頗る確實のものである。即ち其の人は自ら直接に不動産なり工業會社なりに金を貸した形となつて、其の上に中間の信託會社の關係もあり、旁、大いに都合よく資金の調達が出来て居るのである。又第二の方法は、純粹の社債の發行であつて、其の社債も十中八、九までは聖路易、市俄古、紐育の放資家が持つて居るのである。これはテキサス州の信託會社が不動産又は工業を抵當に取つて債券を發行し、之れを右の都會の取引先の銀行家なりブローカーなり、銀行又は信託會社に送つて、賣捌くのである。而して市俄古、紐育、聖路易の如きテキサスから遠く離れた都市の人がどうして安心して放資するかと云ふと、それは實に巧く出来て居る。例へばテキサスの甲村の乙番地の地所の賣買價格が一エーカー十弗であるとすれば、之れに信託會社が金を貸して債券を發行する最高限度は、二分の一の五弗である。如何に紐育、市俄古、聖路易あたりの人でも、テキサスの何處々々あたりの地所ならば一エーカー十弗の價格であるといふ位の事は大概知つて居る。故に、それに對して五弗の金が貸してあるならば大丈夫と考へるから、此の債券は非常に賣れる。

然らば信託會社の立つ役目は何れかと云へば、テキサスに在る信託會社を市俄古、紐育あたりの者が信用する筈はないが、テキサスの何處々々の地所に對し一エーカーに付五弗の金を貸してあるから大丈夫だといふことになるのである。

序に此の擔保附債券と興業債券、即ち無擔保の債券との差異に就て一言すれば、興業債券は興業銀行が自己の信用を利用して債券を發行し、得た所の金を自己の勝手に貸出すのであるから、テキサスに對する擔保附債券の如く、債權者が直接に土地そのものに放資した形とはならないで、債券の所有者は、先づ第一に興業銀行の信用、第二に興業銀行の所有財産といふものに重きを置かなければならぬことになる。斯くの如く、放資者と放資物との間に他の或者が介在して直接の關係が無いといふことは、果して工業資金を供給する上に於て遺憾なきことであるかどうか、これは餘程考へなければならぬ問題であると思ふ。余が嘗てカナディアン・バンク・オブ・コムマースの頭取エドモンド・ウォーカー卿に就て研究せる所に據れば、加奈陀の開発は全く擔保附債券で母國の資金を吸収、注入したるによるものであつて、新開地に於ける興業債券の如きは、英本國に十分の信用を有せざるが故に、

到底其の資金を吸収することは出来ないとのことであつた。

結 論

以上米國の例と云ひ、又加奈陀の例と云ひ、新興國の日本にとりては殊に參考に資すべきものではなからうかと思ふ。而して若し日本が此の方法を參酌して、在來の銀行以外に或一種の新機關を備へて、工業資金供給の途を開いたならば、茲に初めて日本の工業は發展の基礎を得るのではなからうかと思ふ。

然らば如何にして之れを實行すべきかといふことになる。餘程の難問題であるが、第一は何事によらず同様であるが、日本で初めてやるに、徒らに歴大な會社が出来ても役には立つまいと思ふ。斯う云ふ所以は、先づ第一に斯ういふことの世話をする適當の人が無ければならぬのであるが、それは日本の工業の事に極めてよく通じて、而も相當の資本もあり、諸方面の資本家に十分の信用と十分の連絡とを有して居なければならぬ。即ち或工業が資金を必要とする場合に、假令時期が悪くて社債を發行することが出来なくても、其の會社の信用と資本とを利用して、

一時金を調達しておく位の事が出来なければならぬ。

又社債を發行するにしても、現在の如き無責任の態度ではいけない。米國で社債を發行する方法を見るに、皆非常に重大な責任を負ふことを覺悟して居る。銀行が三箇月か六箇月の期間の手形を取るのでも、其の身元を調べるに非常な苦心をする。況や、三年、五年、乃至三十年に亙る社債を發行するに當つては、極めて嚴重にして綿密なる取調べをした上でなければならぬ。若し然らずして、單に自己の引受けた社債だけを賣抜けることのみ之れ汲々たるが如きことあらば、恐らく社債の信用は地に墜ちるであらうと思ふ。若し社債の信用を失するが如き場合には、延いて日本全體の有價證券の市價に非常なる悪影響を及ぼすであらう。此れ等の點は、くれぐれも吾人の注意しなければならぬ所であると思ふ。此の新規の機關の組織、損益計算及び業務執行の方法に就ては成案あれども、詳述するの場合に非ざれば、他日再び批評を請ふの機會あるべしと思ふのである。

外國貿易と國際間の貸借關係

(大正三年七月)
於早稻田大學

日本の外國貿易

今日は諸君に何かお話をする約束でありましたが、これは餘程私にはむづかしい問題でありまして、學理の講釋なら諸君の方が餘程先生で私は弟子であるし、又私が實際關係して居ります仕事は洵に面白くない事柄であるのみならず、吾々銀行者はお饒舌りをしてはいかぬ、無駄な事は云ふなといふことが教への第一義で、それを守つて居る私でありますから、面白くない問題を拙く説明するやうな譯で、お聴きになる諸君は、餘程お困りであらうと思ひます。併しながら折角のことでありますので、外國貿易の事と、其の結果として國際間の貸借といふ事をお話して見たいと思ひます。これは、苟も日本の經濟の事を少し考へて居る人は、誰も念頭にかけて居られる事であるし、日本の此の五、六年間の經濟界を支配して居る最も

重大なる事柄である。殊に此の度、現内閣の財政方針として若槻大藏大臣からお話のあつた事も、全く此の外國貿易といふことを主眼として立てられた財政方針のやうに見えます。これは餘程、日本の現在に於ては重大なる問題であります。併しながら又頗る廣汎な問題でありますから、茲には諸君に事實をお話して、私自身の意見を述べることは避け、以て諸君の研究の材料に供したいといふのが、私の精神であります。

外國貿易と申しますが、一體内國の商賣と何處が違ふかと云ふに、内國の商賣であると、其の商賣の結果の貸借の決済は其の國の通貨であるのであつて、至極簡單です。例へて云へば、九州の人が東北の品物を買過ぎて金を拂ふにしても、日本銀行の兌換券で宜しい。東北の人が北海道の品物を買過ぎて其の金を拂ふにしても、日本の通貨で宜しい。併しながら國と國との間の貿易になると、さうは行かぬ。例へて云へば、日本が品物を買過ぎて金を拂はなければならぬ場合に、日本銀行の兌換券は日本國內にのみ流通するので外國には効力は無いから、所謂兌換券の基となつて居る金貨を積出して行かなければ其の代金を支拂ふことは出来ぬ。斯

ういふ差がある爲めに、外國貿易といふものは内國の商賣よりも種々複雑なる問題を生ずる譯であります。諸君は十分御承知でありませうが、一體日本の外國貿易はどうかつて居るか、進んで居るか退歩して居るかといふことを觀察して見ますと、日本に外國貿易が開けたのは、統計表には明治初年からとなつて居りますけれども、實は明治七、八年位から漸く外國貿易と名のつくものが出て來たのであつて、それから段々日本の外國貿易は進んで來たのであります。私の見る所では、日本の外國貿易といふものは非常な長足の進歩をして居る、決して悲觀するには及ばない、其の進歩の仕方は甚だ祝すべきものであつたと、斯う思ふのであります。之れを數字に就て見ると、明治十年には輸出入の合計僅か五千萬圓でありましたが、其の五千萬圓が、今から二十年前の明治二十七年には、二億三千萬圓に進んで居ります。それから十年後の明治三十七年には、幾らになつたかと云ふと、七億、更に十年後の昨年は幾らかと云ふと、十三億餘となつて、殆ど明治三十七年の倍に進んで居ります。斯ういふ風で、明治十年に五千萬圓であつたものが、大正二年には十三億餘となつて居るといふことを思ふと、決して日本の外國貿易は進んで居ない

譯ではない、洵に満足すべき程度に於て進歩して居ると、私は思ふのであります。けれども日本の外國貿易といふものを外國の外國貿易と比較して見ると、非常に小さな數であつて、比較にならない。英、佛、獨、米、斯ういふ先進國にはとても及びもよらぬのであります。ずつと世界中を探し歩いて見て、先づ吾々が相當に名前を知つて居る國で、日本と匹敵する國は何處かと云ふと、瑞西、西班牙、それから支那である。常に吾々が小弱國と思つて居る國の外國貿易が、日本と丁度同じ位な數字になつて居る。而してそれより以上の大きな國とはとても比較にならないのでありますから、日本だけの進歩から見ると、稍満足すべき數字が出て居りますけれども、外國の先進國の外國貿易と比較すると、まだ餘程努力する必要があるのであります。

日本は借金國にして輸入超過

そこで外國貿易そのものは輸出輸入共に段々進んで居りますが、偕て日本が最も外國貿易の上で注意すべきことは、此の輸出と輸入とがどういふ風にバランス

がとれて居るかといふ事である。そこでずつと最初から比較するのは煩雜でもありますから、近い十箇年だけを比較して見ると、十箇年の中で明治三十九年と四十二年との二箇年だけ、日本は餘計品物を賣つて少く買つて居るのである。即ち輸出超過は僅かに二箇年しかない。あとの八箇年といふものは輸入超過である。十箇年の間は殆ど毎年、外國から日本は餘計品物を買つて居る譯である。而して其の數字が非常に大きな高でありまして、十箇年間の輸入超過と輸出超過とを差引いて見ますと、殆ど四億といふ數字が出ます。さうすると一箇年平均、四千萬圓宛外國から餘計物を買つたといふ譯であります。さう云へば何でもないやうであるが、餘計買過ぎれば今私のお話した如く、日本國としては金を以て外國へ拂はなければならぬといふ結果を生じて来る。即ち十箇年の平均では、毎年四千萬圓宛日本の金貨が失くなつて居るといふ譯であります。而も又最近四箇年間は殊に此の輸入超過が甚だしい、其の平均は殆ど六千萬圓になつて居るのであります。即ち毎年六千萬圓の金貨を、日本が失はなければならぬ譯になつて居る。外國貿易の表を御覽になれば分りますが、輸入超過の國は世界に中々多い。輸入

超過だからと云つて、何も左程心配することはないのである。英吉利も輸入超過、佛蘭西も輸入超過、獨逸も輸入超過、所謂農産國でないところ、即ち亞米利加のやうに土地が廣くして農産物の出来る國を除いては、殆ど何れの國も輸入超過であります。であるから、輸入超過といふことを以て餘り悲觀する必要は無いのである。併しながら英吉利にしても、佛蘭西にしても、獨逸にしても、輸入超過の國は何時でも外國へ金を貸して居る國である。外國から金を借りて居る國でなくして、外國に金を貸して居る國である。諸君はお讀みになつたか知らぬが、此の度の大藏大臣の演説に、日本は債務國だから輸出超過の國でなければならぬのだ、それが逆に輸入超過であるのは實に困つた現象である、といふことを述べられて居るのは、即ち其の邊の事を指されたものであらうと思ふ。然らば何で日本は斯くの如く輸入超過を來したものであるか、殊に最近四箇年間に非常なる輸入超過を來し、過去十箇年間に四億といふやうな輸入超過をどうして一體來したものであらうか、斯う考へて見ますと、其の重大なる原因は外資の輸入である。外國から金を借りる爲めに、斯くの如く輸入超過を來して居るものだと、私は思ふのでありま

す。これには種々の細かい原因はありませうが、概して云へば、外國から金を借りるから斯くの如く輸入超過を來すのである。日本は、日露戦争前には、僅か一億幾らといふ位な金しか外國から借りて居なかつた。然るに日露戦争後の今日は、政府の公債だけで十四億といふ金を外國から借りて居る。其の上に尙東京の市債、或は大阪の市債、京都でも名古屋でも神戸でも、殆ど日本の大きな市は皆外國から金を借りて居る。其れ等の外に又、會社、銀行の社債といふものがある。此れ等の市債、社債を合せると三億近いものになりますから、日本では全體で十七、八億の金を外國から借りて居る譯である。斯ういふ金を十箇年の間に借りた爲めに、斯くの如く輸入超過を來したものと、私は思ふのである。

然らば何故に外國から金を借りれば輸入超過を來すかと云ふに、其の金を借りるに就て、倫敦なら倫敦で金を借りたと致しますと、其の金を日本の内地で使ふのに三つの方法があるのである。一つは、外國で借りた金を、外國で品物を買つて日本へ持つて來る、即ちそれが輸入が殖える譯であります。例へば、日本の電氣鐵道會社が、機關車とか或は電氣のモーターとかいふものを金を借りて外國で買ひ、そ

れを日本へ輸入して來れば則ち輸入が殖える譯である。それが一の方法で、即ち借りた金が物に變つて這入つて來るのである。もう一つは、外國に金を借りて居るに就ては多少の不利益を忍んでも其の金を取りたい、取つて内地で使はなければならぬ、斯ういふ事になると、正金銀行とか香港上海銀行とかいふやうな、國と國との間に爲替を取扱つて居る銀行が其の金に關係する。さうなると、外國から品物を日本に輸入する場合に、外國に金が無ければ、外國から日本へ品物を持つて來るのに大變不利益であります。外國に借りた金が在つて、之れを内地で使ひ度いと思ふと、爲替相場を非常に安くして爲替を組んでやる。さうして日本に來ると其の金を取立てるといふことになるから、外國に金を澤山置くと爲替の上で外國の品物が日本に來易くなる、即ち輸入がし易くなる。斯ういふ事が即ち外國で金を借りれば、輸入が殖える一つの原因になるのであります。もう一つ日本に行はれて居る方法は、政府が外國から金を借りて、其の金を鐵道なら鐵道に使はうといふ場合に、外國で日本銀行に其の金を賣り、内地で日本銀行に兌換券を發行させ

ることであります。此の方法は輸入を奨励することにはならぬけれども、日本銀行が外國で政府から金を買ひ、それで日本で兌換券を發行するから、通貨が非常に殖える。御承知の通り、通貨が殖えれば内地の金利が安くなり、従て事業が起る、即ち輸入を便利にするといふことになる。乃ち外資を輸入すれば、此の三つの方法によつて輸入を超過させる原因になるのであると思ふ。

外資輸入の結果と毎年の利拂

然らば此の外資輸入といふことは善いか悪いか、斯ういふ問題になりますと、餘程考へを要することであつて、私は之れに就て少し述べて見たいと思ふ。先づ今日まで外資輸入をしたといふことを考へて見ますと、若し假に外資輸入をしなかつたとしたならば、日本の外國貿易といふものは斯くの如く盛大にはならなかつたに相違ない。先刻お話したやうに、十三億といふ數字にはならなかつたに相違ない。そこで日本の如き資本の少ない、殊に精巧なる製造品の少ない國に於ては、外資輸入といふことは程度問題であるけれども、絶対に悪いといふ議論は立つ

ものでなからうと思ふ。若しこれまで外資輸入を一切して居らなかつたならば、日本の外國貿易はまだく、非常に小さい數字であつたに相違ないと、私は確信して居るのであります。然るに前申したやうに、日本は十箇年間に四億、即ち毎年四千萬圓宛の借金をした。其の上に、先刻申した通り、十七、八億の借金がある。其の利拂として毎年八千萬圓拂はなければならぬ。さうすると、前の四千萬圓と八千萬圓とを加へて一億二千萬圓、最近四箇年に就て云ふと、一億四千萬圓といふ金を外國に拂はなければならぬといふことになつて居る。さういふ譯で、日本は外國貿易の上と借金の利拂だけで、元金を一文も拂はずに、毎年一億三、四千萬圓といふ金を拂はなければならぬといふに至つては、實に啞然たるもので、諸君と共に、之れは堪らぬといふ氣がするのであります。

ところが此の前議會で大藏大臣が報告されました所によりますと、——あれは極めて正確な報告と思ひますが——今申す通り日本は毎年一億三、四千萬圓の金が無くなるべきであるのに、事實無くなるのは先づ九千萬圓と見ておけばよい。それはどういふ譯かと云ひますと、其の調べはまちく、であります。先づ次の

如き調べが正しいだらうと思ふ。それは、亞米利加や南洋或は支那等に澤山日本の移民が行つて居りますが、其の移民が毎年日本に送つて來る金といふものは、少なからざるものである。それから日本の郵船會社とか或は東洋汽船會社とか、大阪商船會社とかいふやうなものが、其の船へ外國の品物を積んで、外國人から運賃を取るのもある。それから外國船へ保險をつけて、保險料を取るのもある。或は正金銀行とか三井物産とかいふやうなものが、外國で稼いで儲ける金もある。又外國の旅行者が日本へ來て使ふ金もある。さういふ金を合せると、六千萬圓位はあるのである。一億三、四千萬の金が毎年減るべきのが、實際は九千萬圓しか減らぬといふのはどういふ譯かと云ふと、今申したやうな種々な事で日本へ金を取つて來るからである。そこで極く問題を切詰めて見て、外國貿易と外國貿易以外に來る金高を寄せると、外國貿易は或は六、七千萬圓の輸入超過であつても、其の爲めに日本から金を出す必要は無い、斯ういふ事になる。併しながら前に云つた通り、日本は公債、市債の利息として毎年拂ふべき金が八千萬圓ばかりあるのであるから、これだけはどうしても出さなくてはならぬ。そこで簡単に云へば、今のやうな

結論になつて、結局日本が外國に拂ふ金は八、九千萬圓あれば宜しい、斯ういふ理論になるのであります。であるから、此の八、九千萬圓の金を今まではどうか斯うかして拂つて來たが、今後はどうしたら之れが拂へるだらうかといふことが、重大なる問題であると思ふ。

輸出増加の方針

そこでそれをするには、先づ第一は輸出を増加することである。輸入が今の通りであつても、輸出が漸次殖えて行けば差支へ無い譯である。輸出が増加するやうになりさへすれば、公債の利拂をするのは何でもない。それから第二には輸入を防ぐことである。輸入を防ぐには二つの方法があつて、第一は輸入して居る品物と同じ品物を日本で拵へるといふことである。即ち輸入の代用品を日本で拵へることである。第二は金融の作用で以て輸入が出來ぬやうにすることです。斯うすれば結局、輸入を防ぐことが出來るのであります。此の輸出を殖やすとか、輸入の代用品を拵へるとかといふ事に就ては、私は極く簡単に申上げて、最後にど

ういふ風に金融の調節をすれば輸入が減るであらうかといふことを、少し詳しく申上げようと思ふ。

外國貿易に關しては、日本の地位は洵に不利益な地位にある。日本は御承知の通り面積が狭い、従て農産物が少ない、自分の用ひる食料品さへも足らぬやうな譯で、此の點は實に日本の不利益な點であります。それから又天然の富源たる鑛石といふものが非常に少ない。僅かに石炭と銅とが外國に出る位で、其の他の鑛石は殆ど無い。日本に最も必要な鐵の如きは國內には無いので、支那から鑛石を買つて居るといふ状態であります。それから又、最も外國貿易に必要な資金なるものが、日本に非常に缺乏して居る。金利が高いのみならず、金が少ないのでありますから、外國貿易の上に於ては、日本は非常な不利益な地位に居ると見なければなりません。日本の輸出品はどういふものが主なものであるかと云ふと、諸君も御承知の通り、生絲、それから最近に最も殖えた綿絲、綿織物、其の次には銅、石炭といふやうなものであつて、其の以外になると、先づ多いものを拾ひあげて云ふ位で、殆ど擧ぐるに足らぬ位なものであります。それで生絲にしても綿絲にしても、其

の輸出品の一々に就て考へて見ますと、先刻私が申上げたやうに、非常に進歩の度合が良いのであつて、決して悲觀する必要は無い。例へば生絲は昨年の如き、一億八千萬圓位賣つて居る。それが十年前の三十七年には、やつと八千萬圓であつて、十年の間に一億も殖えたことになつて居る。加之、此の生絲の産額は、まだ日本では非常に増加するのであります。又世界の消費力も益殖える。さうなれば益、日本の生産力も殖えて來ると思ひます。其の次に殖えたものは機械工業であります。例へば紡績の絲、綿布、タオルといふやうなもので、最近支那に向つて非常に輸出が殖え、今日は一億以上、一億二千萬圓位なものを支那へ賣つて居ります。之れは印度へも行くが、殆ど支那に賣れるのであります。然らば十年前にはそれがどうであつたかと云ふと、四千萬圓足らずであつた。それが今日は、一億二千萬圓賣つて居るといふ有様である。其の他の銅にしても、石炭にしても、其の進歩の度合は皆同じやうな順序で殖えて居る。それであるから、此れ等の品物の輸出の進歩の程度は決して悪くはない。唯日本で缺けて居るのは、機械類の輸出であります。日本に於ては機械といふものは總て輸入であつて、一個たりとも輸出する

ことは出来ない爲めに、非常に澤山金を費して居る。紡績の機械の如きは、あれ程巨額の産額を有して居る工業の機械であるに拘らず、日本には一つも出来ない。唯單に一部の修繕が出来る位で、全部外國から輸入するといふ有様である。輸出、輸入の表を見ても、機械類の輸出といふものは一文たりとも無い。之れが日本の非常な輸出の缺點である。

輸入超過救済の方針

それから輸入に於ては棉が一番多い。棉は亞米利加又は印度から主に輸入して居りますが、昨年の如きは非常に大きな數字で、二億三、四千萬圓の棉を輸入して居る。さうして先刻申したやうに、それを製品に拵へたものを一億三、四千萬圓輸出して居る。それ程巨額なものを取扱つて居ながら、日本には棉といふものが出來ない。全部外國に仰いで、それによつて輸出をして居るといふ、餘程妙な現象を呈して居る。これは日本としては、大いに考ふべき事柄ではなからうかと思ひます。次には、油糟の如き所謂肥料を巨額に輸入して居ます。それから吾々の最も

憂慮すべき點は、日本で食料となるべき米を、毎年四、五千萬圓宛も輸入することにあります。米も輸入すれば小麥も輸入する、有りと有らゆる食料品は、日本に輸入して居るのである。其の國自身の食料問題に就て非常に苦心するといふことは、其の國の成立上餘程考ふべき問題であらうと、私は思ふ。一國が自己自身の食料問題に就て汲々しなければならぬといふことは、餘程國としては重大な事ではないかと思ふのであります。併し事實さういふ状況でありますから私は、輸出の奨励としては、先刻お話しした如く、これからは機械の製造といふことを盛にするの外ないと思ふ。獨逸の如く、化學工業を日本に發達させることも大切であります。之れは又必ず、日本は發達し得る位置に居ると思ふのである。其の販路としては支那であります。支那の如きは少し覺醒すれば、例へば紡績業の如き、その他機械工業の如きは非常に發達するのであるから、其の機械を供給することに就ては、日本が最も好い立場に居る譯であります。それから諸君に研究問題として申し上げますが、私は輸出奨励の一方法として、品物の検査といふことを常に主張して居ります。これは日本でも大分問題になつて居る事で、非常な反對論もあるやうであ

りますが、例へば生絲の如きは、生絲検査所といふものが出来てからは、餘程其の品質が良くなつて來た、從て輸出も大變殖えて來たといふ有様である。それで政府が立入つて検査をするといふことは、或は一方から云へば、人權問題とか色々な問題もあります、其の國の貿易を保護するといふ大なる政策から、世界各國共に皆やつて居る事であるし、日本には特に最も必要ではなからうかと思ふ。一例を申すと、三、四年前から亞米利加に、麻の眞田が千萬圓以上も輸出があつた。それは横濱とか東神奈川等で、僅かの工場で拵へて輸出したのである。ところが、輸出が多くなればそれだけ儲かる、儲かれば儲かるだけ粗製濫造に流れるといふ譯で、結局今日ではまるで行けなくなつた。花菘の如きも一時は亞米利加に非常に出たが、悪いものを出したので終に賣れなくなつてしまつて、今日では僅かのものしか出ない。さういふ風であるから、一國の上から云へば、品物の検査といふことは、實に必要ではないかと思ふのであります。

此の他、先刻お話しした輸入品の代用品を造る獎勵或は食料問題等に就ては、農産物の保護獎勵、其の他種々あらうが、特に機械工業の大なる發達を望むに就て最も

必要なものは鐵である。日本で今最も缺けて居るものは鐵でありまして、之れを十分出来るやうにすることが肝腎だと思ふ。

今一つは陸軍、鐵道院等、官廳が直接間接に外國から買ふ品物は、或年には六千萬圓位もあります。私は何も内地の高い物を好んで買へといふことを強ふることは出来ませぬが、官廳の使ふ金は租税で取つた金であるからして、一國の大問題を解決する爲めに、又内地の工業を助ける上から見、少し高くても内地の品物を買ふといふ方針を立てたならば、餘程外國から買ふ品物を減ずることが出来はせぬかと思ふ。之れを眞面目にやる事が出来れば、二千萬圓位な品物を減ずることは、強ち無理な事ではないと存じます。

金融の調節

最後に私は、金融を如何にすれば輸入超過を止めることが出来るかといふことをお話ししておきたいと思ふ。前に申した通り、輸入超過は四千萬圓ある。さうすると其の四千萬圓は、日本銀行の庫に在る金で以て拂はなければならぬから、丁度

日本の兌換券、即ち通貨の有高は四千萬圓減る譯である。これが一つの金融上の原則であります。例へば私が輸入者であるとして、茲に千萬圓の品物を買つたと致します。それは爲替では行かぬから、それだけの金を拂はなければならぬ。そこで千萬圓の兌換券を日本銀行へ持つて行き、金貨と換へて、それを外國へ送ると同じことになるのである。即ち千萬圓だけ日本銀行の金を無くしてしまふ。日本銀行は準備金のうち千萬圓だけを無くするから、それだけ發行する權能が無くなる。輸入超過が四千萬圓ならば、四千萬圓だけの日本の通貨は收縮するのが當り前の原則である。そこで其のやうに通貨が收縮すれば、日本の金利は上る譯である。金利が上ればどうなるかと云ふと、殖産興業が挫折を來す。即ち茲に一つの事業を起さうと思つて居る人がある。先づ六分の利で金を借りて仕事をすれば儲かると思つて居つたのが、輸入超過の爲めに通貨が收縮したので、金利が上つて六分五厘か七分になつた。さういふ金を借りてはとても引合はぬから止めるといふことになる。簡単に物の道理を話して見ればさうなる。さうなると事業が止まる。事業が止まれば輸入は無くなる譯である。即ち茲に紡績會社を起す

といへば、外國から機械を買ふ。従て輸入が殖える。然るに其の事業が止まれば、紡績機械等を輸入する人が無くなる譯である。それが極く普通の道理であります。輸入超過になると、日本銀行の庫に在る金が段々減つて來るから、之れではいかぬと云つて、第一、人が神經的に心配する。それから實際的には、通貨が少なくなるから金利が高くなる。金利が高くなるから事業は振はぬといふ譯である。然るに日露戦争後には、日本はさうなつて居ない。それはどういふ譯でなつて居ないかと云ふと、私が前に輸入超過を來すは外資輸入をするからだと言つたのが、其處に當つて來るのであります。外資輸入をすると、どうして今の原則外れになるかと云ふと、次の説明でお分りになると思ふ。例へば、政府が假に一億圓の金を倫敦で募るとします。其の金を外國で公債の利拂に使ふならば、何も内地の金融には影響が無い。併し假に一億圓募つて、其のうちを五千萬圓程内地へ持つて來て鐵道を架けようとする、其の五千萬圓を日本銀行に賣る。日本銀行はそれによつて兌換券を出すといふことになる。即ち政府が外國で日本銀行に金を渡す。すると日本銀行は、其の代り金を政府にやらなければならぬ。やるには内地で兌

換券でやる。政府はそれで鐵道を敷いて行く。其の結果どうなるかと云ふと、最前申した如く、四千萬圓の輸入超過があつたから四千萬圓の金を外國に拂つて、それだけ兌換券が少なくなるといふ原則が行はれないで、政府が五千萬圓程日本銀行に賣つたから、日本銀行は四千萬圓拂つても尙千萬圓殖えて居るといふ勘定になります。即ち内地の兌換券は、先刻の原則から云へば、四千萬圓程減る筈であるが、政府が一面に於て五千萬圓といふ外資輸入をした爲めに、尙千萬圓の兌換券が殖え、それだけ通貨が膨脹して金利が下るといふ譯である。加之、神經的から云つて見ると、日本銀行の準備が千萬圓殖えたのだから、皆安心して尙々輸入は殖えて来る。日露戦争後斯ういふ状態であつたから、日本の金融は普通の金融の原則を外れ、常軌を逸して來たのである。それであるから、彌が上にも輸入超過が殖えるやうな有様になつて、政府は段々外資を募る。外資を募れば募る程、最前言ふ如くに、物になつて這入つて來るか、金で這入つて來るか、何れにしても内地の金融に影響を及ぼすことになるのである。斯ういふ事を考へて、先日の大藏大臣の演説を讀んで見ると、債務國は總て輸出超過でなければならぬといふのは、私の説明と少

し違つて來る。併し私の考へる所では、現在債務をどん／＼こしらへて居る日本國であるから、輸入超過はどうしても免れない。若し之れが疾うに債務國であつて、今日は債務をこしらへて居ない國ならば、大藏大臣の云はれる如く、輸出超過を來すは當然の結果であるけれども、現在毎年々々金を外國から借りて居る日本に、輸入超過を來すといふは當り前の話なのである。

今後採るべきは積極方針、消極方針の何れにも非ず

そこで根本の問題になつて、世間の云ふやうに輸入超過がいかぬと云ふならば、外資輸入を全然止めない以上は仕方がない。外資輸入をしながら輸入超過はいかぬと云つても、それは出來る問題ではない。根本の問題は其處に在ると思ふ。そこで二つ議論がある。一つは、今お話ししたやうに、輸入超過はいかぬからして、外資輸入といふものを一切止めてしまはなければいかぬといふのである。又一方には、そんなことを云つても、それはとても行はれるものでないといふ議論がある。日本は日露戦争以後は政府も民間も積極方針を採つて、日本は資本が足らぬから

して外國から安い金利の金を入れて、大いに事業を起さなければならぬ。さうでなければ、日露戦争中に借りた金の金利は到底拂へるものではない。今日まで、大いに外資を輸入してやらなければならぬといふ積極的方針を採つて來た爲めに、其の結果が漸く今日現れて來て、輸出も輸入も段々殖えて來、十三億といふ大なる數字を出すことが出來たのではないか。さういふ議論を唱へるのである。

そこでこれから私が之れを評論して見ますが、第一の説に従ひ、日本に外資を輸入することを全然止めてしまつたならばどうなるかと云ふと、先刻私が話した如く、原則には叶つて來る。昨年例で云ふと、昨年は八千萬圓の輸入超過があつたとして、若し外資輸入をせぬとなると、日本銀行の兌換券は丁度八千萬圓減る。加之、先刻申す如く公債の利拂もある。併しそれは段々差引いて來たから、問題は公債の利拂の八千萬圓だけといふ簡單なものにはなつたが、今茲に外國貿易の方から結論して見ると、八千萬圓の輸入超過があつた以上は、正貨準備は八千萬圓減る譯である。従て日本の通貨は、丁度それだけ減つて來る。そこで金利も上る。斯ういふ事が、結果として起つて來るのである。併し之れも或は、一方から言ふと

極端な議論かも知れぬと思ふ。何故かと云ふと、日露戦争後十箇年、積極方針を採つて來て、外資輸入々々といふ聲が擴がつて段々やつて來たものが、今日急に、政府は勿論のこと、民間でも外資輸入をしてはいかぬと云つて、之れを總て止めてしまふといふことは或は極端ではないかと思ふ。そこで第二の議論に従ふと、折角外國貿易が發達して來たのに、此の先外資輸入を止めるのは甚だ宜しくないから、大いに外資を輸入してやるべしといふのであるが、私は之れも亦餘り極端な議論だらうと思ふ。何故かと云ふと、已に日本にも新しい發明が出來、新しい物が出來れば兎に角として、今日は有利の事業を起すには、どうしても外國から金を借りなければならぬ。そこで外國で金を借りるには、日本の状態からすると、どうしても六分以下では借りられぬ。六分で借りて日本へ持つて來て使はうとするには、之れを七分以上に廻はさなければならぬ。七分以上に廻はる事業といふものは、今の所、日本には左程澤山は無い。それであるから、六分の金を借りて來て、而も其の金が寧ろ損をしなければならぬやうな状態のものも中々多い。であるから、此の後外資を輸入する者は高い金しか借りられないから餘程日本で有利なものでなけ

れば外資輸入をしてはいかぬ。又其の額も段々小さくして行かなければいけないのである。何故かと云ふと、今日まで十何年間、所謂積極方針の論者によつて、外資輸入をすれば今に物が出来る／＼と云ふので、今まで釣られて來たけれども、中思ふやうにさう輸出は殖えない。殖えない所を見ると、此の儘で何年経つても輸出超過は來ないといふ論も出て來ぬでもない。それであるから、最も有利なものに限つて外資を輸入して、段々額を少なくして行くといふことが、最も必要であらうと思ふのであります。

それから今一つ附加へて述べておきますが、初めの論者の言ふ如く、絶対に外資輸入をしなければどうなるかと云ふと、先刻もお話する如く、從來の方針を急激に變へるといふことは商工業の上に悪い影響が及んで來るのであります。尙一つには、日本銀行の準備が二億三千萬程ある。多く積つて二億五千萬あるとして見ても、前に申す如く今日の状態から云ふと、一年間にどうしても九千萬圓の金を出さなければならぬ。さういふ事が一つある。尤も外資輸入をしなければ輸入超過は段々減るから、それで餘程其の高は減るといふ論者もあるが、併しながら私の

考へでは、外資を輸入しなければ輸出も亦減る。輸出も減り輸入も減つて、結局輸入超過がなくなるに相違ないが、其の間の打撃といふものは非常なものであつて、到底これは出來難い議論ではないかと思ふ。それで大藏大臣の演説にも、政府の外資輸入といふことは絶対にやらぬ、斯う云はれてありましたが、あの裏面には民間の外資輸入は別に禁ずる議論も無ければ何も無いから、或は民間に有利な外資を輸入するといふことを意味して居るのではないかと推察するのであります。私は大藏大臣の方針と同じやうになつたことを大層誇るやうであります。事實さういふことでなければとていかぬと思ふ。唯議論として見ると、兩極端の議論であつて面白いが、實行としては曖昧といふかも知れませぬが、中間を歩いて行くより外に途は無いであらうと思ふのであります。

外國貿易と國際爲替關係

(大正四年三月於文部省時局講演會)

私が只今紹介を受けました井上準之助でございます。今日皆様の前で何かお話をしますといふことは、誠に名譽な事でございまして、話します問題を選びますには餘程苦心を致しましたが、田所普通學務局長からなるだけ實際の問題が宜しいといふ御註文でございましたから、私が日常從事して居ります業務上の話を、極く簡単に搔摘んで致して見たいと思ひます。誠に面白くない問題でございますが、此の時局の始まりましてから以來、政府も外國貿易とか爲替とかいふやうな事に常に意を用ひられましたし、又世人、殊に新聞等に於きましては、常に外國貿易がどうか、或は爲替がどうか書くので、所謂世間の問題になつて居ます。殊に日本のみならず、外國に於きましては、戦争が始まりまして以來、國際間の貸借の關係をどうして決濟するかといふことは、大多數の人民から云ひますと、戦争以上

に苦心して居る問題でございますから、之れを簡単に話して見たいと思ひます。外國貿易の結果、爲替の作用の事は内國商賣の事よりも複雑になります。御承知のやうに、日本内地で品物を買ひまするには、買うた人が如何なる場所であらうとも、如何なる遠國であらうとも、日本の通貨を以て支拂ひますればそれで足りるのであります。例へば北陸の米を北海道の商人が買ふにしても、何時如何なる方法であらうとも、北海道から送金致しまして、日本銀行兌換券で支拂をすれば宜しいのであります。然るに國際間の品物になりますと、物を買へば必ず日本の金貨で拂はなければならぬ。兌換券は日本には通用しますけれども、外國に向つては三文の値打も無いのでありまして、買うた者は必ず實際に値打のある金貨を以て拂はなければならぬ。賣つた者は其の代りに金貨が取れるから、差引日本が餘計買ひましたならば、それに對して金貨を拂はなければならぬ。然るに金貨と云ひましても、日本の十圓金貨もあれば、亞米利加の五弗の金貨もある、英吉利の磅の金貨もある。此のやうに、處によつて値打の違ひが出て來る爲めに、外國貿易の決濟をしまするには、餘程内地の商賣より複雑になりますので、往々にして誤解を

來します。之れも矢張りよく理解せられて居らない向もあるやうでございますが、時局開始後は餘程人が注目致して居るやうですから、或はうるさい問題でございませうが、貴方がたの御参考になることがあれば大變幸福と存じます。

順序と致しまして、日本の外國貿易は果して吾々の満足する程度に進歩して居るものかどうかといふ事を一番先に申しますといふと、私は日本の外國貿易に關しては、之れを要するに、餘程満足して宜しいと思ふのであります。それはずつと十年毎に比較を致して見ますといふと、明治十年から日本の貿易表に數字が載つて居りますが、日本の買うたものと賣つたものとを合計致しますると、明治十年は五千萬圓のものが、明治二十七年には二億三千万圓、降つて明治三十七年には約七億圓、それから昨年の上には十二億圓、斯ういふやうな風に進んで居ります。日本の如きは、土地も狭く、工業もまだ非常に幼稚でありますし、國の開けて以來四十七年間の日本としては、餘程此の數字に満足しても宜しいと思ふのであります。併しながら、之れを他國の外國貿易に比較して見ますると餘程失望致しますので、世界に於ける外國貿易の額に就き順序を申しますと、英吉利、獨逸、亞米利加、そ

れから佛蘭西、斯ういふ順序になつて居ります。さうして昨年の日本が十二億であつたのに對して、英吉利では百三十四億といふ外國貿易があります。それから獨逸が百億、亞米利加が七十億、斯ういふ風な順序になつて居まして、世界各國中日本と凡そ同じ程の外國貿易の數字を探し出して見ますると、殆ど無いのであります。段々下つて來まして、白耳義は勿論、伊太利でも露西亞でも和蘭でも、日本よりは皆外國貿易は多いのであります。さうして吾々が歐羅巴で名を知つて居る國の中で、西班牙と瑞西、此の二箇國位が幾らか日本より多くございませうけれども、先づ日本と相匹敵する位の外國貿易であります。それで支那は國も廣うございませうし、人民も多いのでありますから、此の點から云ひますると外國貿易は振はぬのでございませうが、それでも日本よりは幾らか數字は多いので、十三億幾らであります。世界各國と比較致しまして、先づ國の有様から比較して見ますると、白耳義とか、或は植民地を餘計持つて居る國である和蘭、段々進んで來ましては伊太利、これ位の外國貿易に日本が及ばない譯はないのであるから、日本の外國貿易の進むべき餘地はまだ、非常にありますと同時に、今日までの趨勢から推しまして、

吾々は日本の外國貿易は前途非常に進歩するものと確信して居ります。

少し横道に這入りますが、世間ではよく日本は輸入超過で困る、或は日本の在外正貨が無くなりはせぬか、或は公債の利拂が出来なくなりはせぬかといふことを新聞等で屢、心配致しまして論じて居りますからして、之れを、私は自分の説は止めて、事實はどういふ風になつて居るかといふことを、貴方がたの前で申上げておきたいと思ひます。輸入、輸出の結果は只今申上げたやうな數字でございするが日本は日清戦争前には未だ工業が發達致しませぬ爲めに、寧ろ外國に餘計品物を賣つた國であります。然るに日清戦争を経て、殊に日露戦争後は、日本の種々の工業が發達致しましたので、外國の品物を買ふことが非常に殖えて來ました。近く十年間の平均をとつて見ますといふと、其の間に明治三十九年と四十二年との二箇年間に少し餘計外國に物を賣つただけで、あとは悉く日本が餘計買うて居ります。即ち賣買の結果は、外國に金貨を拂出さなければならぬ状態になつて居ります。其の高が十年間の總額で四億圓といふものになつて居ります。それと、いいますから、四億だけは日本は借金をした譯で、之れを拂ふには、日本内地に持つて

居りまする金貨を持出すより外に途が無い譯であります。殊に最近五箇年の平均をとりまするといふと、十年間は四億であつて、一年の平均四千萬圓になつて居りますが、それが五箇年の平均になりまるといふと、六千萬圓に殖えて居る。それで日本は此の最近十年間は輸入超過である。輸入超過は輸入超過に相違ございませぬが、世間で此の輸入超過といふことに就て考へて居りまする事は非常に程度が違ふのでありまして、私が事實を申上げますと、世界各国殆ど輸入超過でない國は無いのであります。例へて申しますると、英吉利にしる、又佛蘭西にしる、殆ど歐羅巴各國、輸入超過でない處は無い。輸出超過の國は、僅かに二、三國である。文明國の中で、亞米利加と露西亞とを除いては、悉く輸入超過の國であります。併しながらそこが餘程注意しなければならませぬ所で、英吉利にしても佛蘭西にしても、品物は外國から餘計買ひますのであります。同時に此れ等の國は外國に對して金を貸して居る國であります。英吉利で申しますと、南亞米利加に對しても、南阿弗利加或は支那、日本等に對しても、非常に巨額の金を貸して居りますので、從て品物を餘計買ひますけれども、それと同時に世界各国から巨額な利息

を取ることが出来るのであります。貸した金の利息が取れます爲めに、輸入超過に對して何等驚くことはないのであります。然るに日本は之れと違ひまして、巨額の金を借りて居て、巨額の利息を拂はなければならぬ國でありながら、それと同時輸入超過で、貿易の上でも平均しまして一年に四千萬圓乃至六千萬圓の金を拂はなければならぬのであります。今數字に訴へて之れを申しますと、日本は公債或は市債で外國から借金をして居る高が丁度、公債が十四億圓、市債、社債で三億圓程ありまして、合計十七億の借金を持つて居ります。之れによりますと、年利息八千萬圓宛を拂はなければならぬ。それに前申しました如く、十年間の平均にして四千萬圓、最近の平均で六千萬圓といふやうな巨額が、年々外國貿易の上で此方が餘計に買つて居りますから、之れに對してそれだけの金を拂はなければならぬ。さうしますと、公債の利拂で八千萬圓、外國貿易の買過ぎの爲めに支拂はなければならぬ金を假に五千萬圓と見ますと、合せて一億三千萬圓の金を毎年日本は拂つて居なければならぬのであります。然るに今一步之れを異つた側から見まするに、日本の持つて居ります金貨の毎年事實に於て減る高は、此の最近に

於てざつと九千萬圓宛であります。只今申上げました一億三千萬圓は、道理としては減らなければならぬのであります。實際に減つた高は毎年九千萬圓でありまして、其の間に差が鳥渡四千萬圓程出て參ります。之れは斯ういふ事で説明が出来るのであります。第一は、日本の移民の送金であります。亞米利加とか布哇とか、或は濠洲といふやうな處に、日本の移民が行つて居ります。此の移民が日本に毎年送つて來ます金といふものは、可なり大きな高であります。第二は、郵船會社とか或は東洋汽船會社とか、乃至は大阪商船會社等が外國人の荷物を積みまして、運賃を取る高が可なりあります。其の外に又、保險會社が外國人の保險をつけて、それで此方に金を取るとか、又は外國の軍艦とか商船とかが日本に來て、色々日本の商品を買ふ爲めに支拂ふ金とか、或は外國の旅行者等が内地に來て拂ひます所の金、此れ等も可なりの金になるのであります。又日本人が外國に行つて金を使ふのもありますから、矢張り差引いて見ますと、多い時で六千萬圓、少ない時で四、五千萬圓の金が日本に入りますから、前に述べたやうに勘定が違ひますのであります。それでありますから、理窟としては一億三千萬圓の金を拂はなければなら

ぬのに、九千萬圓しか拂はないで、残りの四千萬圓は貿易以外から這入つて来る金で、どうか斯うか辻褄が合ひます。それでありますから、少なくとも日本は平均九千萬圓の金を年々今日まで拂つて居る譯であります。五年経ちますれば四億五千萬圓の金を拂つて行かなければならぬ。若し過去の五年間の状態を以て今後の五年間を推しまするといふと、それだけの金が減らぬとも限らぬのであります。若し假に、左様な巨額の金が今後五年間に段々海外に出て行かなければならぬといふことになりましたならば、或は日本銀行に持つて居る正貨は、餘程減つてしまふといふやうな虞れが無いのであります。それならば之れをどうすればよいかと云ひますれば、どうしても外國貿易を盛にして、之れを補つて行くより外には名案はございませぬので、吾々が考へますには、何をさて措いても、此の日本の貨幣制度を維持するには、是非外國貿易を盛にするといふことが急務であると考へます。

尙一言申上げたいのは、此の問題に直接の關係は無いやうであるけれども、斯ういふ事を時々聞きますから序に辯解しておきますのでございしますが、一國の富を

評價するのに斯ういふ説がございします。貴方がたの間にはさういふ説を懐いて居らるゝ方は無からうと思ひますが、土地の値段、不動産の値段が上つたのは果して一國の富が増したのか増さないのか、といふ質問を受けることがあります。これは理窟としては何でも無い事かと思ひますが、唯其の議論を唱へる人は、不動産の高くなつたのは國の富が増した譯ではない、一國の富が増すには外國に持つて行き賣つて金の取れる品物でなければいかぬ、といふ議論を唱へて居る人であります。併し例へて見れば、一段の田地に一石五斗位の收穫しかなかつた田地が、耕作を改良した爲めに二石なり二石五斗なり取れるやうになつたので、不動産の値段が高くなつたといふ場合には、必ず國の富が増えたものと考へます。けれども今私が申しました日本の今日の状態が外國貿易を盛にしなければならぬといふ意味から云ひますと、或は外國に持つて行つて賣ることの出来る品物でなければ一國の富は殖えるのではないといふやうな議論も、今日の状態としては仕方が無いではないかと考へる位に、實は私は外國貿易の必要を認めて居るのであります。よく世間には二つの議論がございまして、輸入超過は何も懼れる必要が無い、

輸入をするのは輸出を奨励する爲めであるといふ議論もございしますが、之れも極端な議論であります。例へば棉の如きものは毎年二億圓からの輸入を致しますのであります。それで以て綿絲や莫大小やタオル乃至敷布等を拵へて、一億圓以上輸出致しますから、棉花は二億圓這入りましても其の半分は外國に賣ります次第でありまして、棉の如きは或は輸入しても一向差支へ無いと云ふ議論も出来るだらうと思ひます。それから機械類の如きも、若し其の機械を輸入致しまして、それが爲めに今の如き紡績絲が出来るといふものならば、何も必ずしも輸入を懼れるの必要は無いかと思はれる。又日本のやうな若い國が段々と工業が發達して行きますに就ては、何れの國の歴史を見ても、一時輸入超過は免れぬのであります。併しながら日本の輸出入の表によつて輸入超過の所以を考へて見ますと例へば米とか或は砂糖とかいふやうな、一國の最も重大なる食料品を巨額に輸入致して居りますが、之れは餘程輸入としては憂ふべき現象であらうと思ふ。兎に角輸入超過が最近餘程多い爲めに、政治家でも誰でも輸入といふ事はいかぬと云ふやうに論ぜられて居るのであります。が、數字に訴へて見ますれば、同じ數字の中

でも、之れは悪いとか之れは善いとかといふ區別は立ちませうが、最近十年間の結果は今申上げたやうな状態になつて居るのでありますから、甚だ憂ふべきであらうかと思ふのであります。これから更にうるさうございしますが、外國貿易の品物はどういふ風に賣つて、其の結果の金はどういふ風に始末をするかといふ事に就て、説明をして見たいと思ひます。若し私の説明の不足の爲めに、お分りにならぬやうな事がございましたならば、遠慮なく御質問をして戴きたいと思ひます。

日本の外國貿易で申しますと、輸出をするのは生絲が一番纏つた大きいものであります。其の生絲の總額の七分どこは亞米利加に行つて、其の餘りは伊太利と佛蘭西とに行くのであります。それが丁度一億九千萬圓ばかりあるのであります。其の次は紡績の絲或は莫大小、タオル、敷布の類が一億圓ばかりで、主に支那、滿洲、南洋であつて、印度及び亞米利加のカリフォルニアにも少し參ります。其の次は羽二重、其の額は三千萬圓、多い時で四千萬圓位なものが出ます。其の一番巨額に行きます先は英吉利、それから佛蘭西、亞米利加、濠洲へ行きますのであります。其の外に茶、之れは殆ど亞米利加に限つて居ます。銅は英吉利に參ります。石炭

は上海或は香港を経て、新嘉坡まで参ります。以上列舉したものが輸出の主なものでありますが、輸入致しますものうち、一番巨額なものは前申しました棉であります。棉は一番多く印度から輸入し、其の次は亞米利加或は埃及あたりからも輸入致します。羊の毛は多くは濠洲から輸入致しまして、極く値段の高いトップと稱します。モスリンか何かを拵へますものは、英吉利からも輸入致します。其の次は米、米は蘭貢或は西貢等から参ります。砂糖は爪哇、バタヴィアから多く輸入致します。其の次は肥料であつて、滿洲から豆或は豆糟を輸入致します。其の外に鐵類、斯ういふものが主なる輸入品であります。

品物は今申上げる通り、此方から行き向ふから來ますが、其の代金はどうなるかといふことを申上げますと、今例をあげて申しまするに、例へば我國が支那に賣ります高は合計一億五千萬圓程であります。日本が向ふから買ふものは僅かに六千萬圓位のものであります。そこで其の差額を一體どうして日本が持つて参るのだといふ疑問が起るだらうと思ひます。一億五千萬圓からの品物を送り、六千萬圓の品物を買ひますと、殘餘の九千萬圓はどうして日本に取寄せるのか。支

那は銀貨國であるのに、日本は銀は何の役にも立たぬ、それにどうして其の差額を日本に取寄せるかといふ疑問を持たるゝだらうと思ふ。それから印度に於きましても、我國が棉を買ひますのは一億七千萬圓程であつて、我國から出るものは羽二重其の他凡そ三千万圓程あります。さうすると、印度にどうして其の差額を持つて行くか。此のやうに國際關係には色々の缺陷がありますので、品物は今申しました如く、賣つたものは送つてやる、買つたものは向ふから取つて來ますから、内國の商賣と少しも變りはありませんが、其の貿易の差額は、どうして決濟する、買ふものはどうして金を支拂ひ、賣つたものはどうして其の金を取るかといふ事に就て説明して見ようと思ひます。之れは非常にうるさうございませうけれども、此の頃の問題になつて居るやうでありますから、申上げて見ようと思ひますが、お分りにならぬ事があつたならば御質問を願ひます。

第一、生絲の方から説明を致しまするといふと、世界中の總ての金の支拂、受取は悉く倫敦を經過せぬものは無いと、御承知おき下さつて宜しうございます。今申上げる通り、一億九千萬圓の生絲が出る、其の中で七分どこは亞米利加に行きます

が、其の亞米利加に行きます生絲を、假に簡單に一億二千萬圓行くとしまして、其の一億二千萬圓の生絲を亞米利加に持つて行つて、亞米利加では織物を拵へる。其の織物を亞米利加で賣つて金にするのであります。併し御承知のやうに、商賣人は貴方がたの御推察よりも以上に、自分の資力より以上の商賣をするものでありますから、例へば百萬圓の資本の商賣人は、年々四、五千萬圓の商賣をせぬ者は無いのであります。例へば横濱で生絲を買ふ場合に、第一買入れる資金が無い、其の時は横濱で銀行から借りて買入れます。それから今度、横濱から生絲を船に積んで送つた時にはどうするかと云ふと、手形を書いて、買つた生絲を船に積み、船荷證券を得て、之れを擔保にしてそれに對して手形を書くのです。さうすると、銀行では其の手形を割引します。割引した後はどうなるかと云ふと、手形を倫敦に送る。品物は亞米利加に行くが、手形は倫敦に行くのです。何故手形は亞米利加に行かないで倫敦に行くかと云ひますると、前に申上げました總ての支拂なり受取なりは、倫敦を金融の中心として世界中から集つて來ます。さうして倫敦の金利が、一番世界中で安いのです。手形は普通四箇月目に拂ふものが多いから、倫敦では直

ちに手形を割引して金にしますが、生絲は紐育に送つて、四箇月なら四箇月目には金を取立てて紐育から倫敦に送つて、倫敦の手形を決済致します。横濱で手形を書きますと、十五日かゝれば倫敦の方に行きます。十六日目には倫敦でそれを割引を致しますると、正金銀行は十七日目に倫敦で金が取れることになり、其の金は直ぐに使へるといふことになります。倫敦は世界中で一番金利が安いのでありますから、日本から云ひますると、日本で八分の金を借りましても、倫敦へ送つて其の手形が假に五分で割引が出来ますれば、横濱の生絲を買ふ相場は、日本の内地の金利を標準としないで、倫敦へ送つて割引する五分を標準とすることが出来て、大變に利益でございます。さういふ金が百萬圓なり二百萬圓なり倫敦に出來たとしますれば、それが一の正貨であります。其の倫敦の金をどうして使ふかと云ひますると、今度は輸入の分をお話しますれば直ぐ分ります。先刻お話致しました如く、孟買からは一億何千萬圓といふ棉を日本に買ひますが、其の棉を買ふには何處からか金を持つて行つて買はなければならぬが、其の金はどうするかと申しますと、只今のやうにして生絲の手形で、倫敦に出來た百萬圓なら百萬圓の金で以

て、孟買で棉を買つて來るといふ譯になるのでございます。それから最前申しました砂糖をバタヴィアから輸入し、米を蘭貢から買ひ、羊の毛を濠洲から持つて來る場合に、品物は産地から直接日本に積んで參りますけれども、其の金はどうして支拂ふかと云ふと、正金銀行が蘭貢なりバタヴィアなり、或はシドニーの銀行へ向けて指圖書を出します。例へばバタヴィアから砂糖を日本に買ふ場合に、バタヴィアに甲なる商人があつて、其の人が砂糖を假に百萬圓積んだと致します。さうすると、甲はバタヴィアの銀行に行きまして、手形を書いて買つて貰ひます。即ち銀行の方から云へば、正金銀行から買つてやつてくれといふ指圖書があるから、正金銀行の責任で其の手形を買ひます。買つた手形は直ちに倫敦に送つて、倫敦の正金銀行の支店に持つて行きますと、「支拂可申候也」といふ文句を書いて判を押します。さうすると、其の手形は正金銀行の責任手形になつて、それを今度は倫敦で割引を致します。さうして其の手形が三箇月間なら三箇月間といふものは、最前お話しした倫敦の最も安い日歩で割引をすることになります。三箇月経つと、日本で砂糖を輸入した人はバタヴィアから來た砂糖を賣つて百萬圓相當の金を受取りまして、倫敦

の自分の輸入した砂糖の手形を支拂ふ爲めに、横濱の正金銀行へ金を拂ふことになりまます。斯やうな工合に致しますと、日本で八分の金を借りて即座に拂ふべきを、砂糖が賣れるまでの間、倫敦の最も安い金利の處で手形を融通することが出来るのであります。砂糖でも羊の毛でも米の輸入でも、皆同じ方法で買ふのであります。要するに、倫敦の金利は世界中で一番安いから、日本で金を借りて直ちに拂ふよりも、倫敦の安い金を三箇月間使ふ、斯ういふ道理で此の方法が出来て居るのであります。それから先刻お話ししました支那との決済に就て申上げますと、一億五千萬圓ばかりの輸出品の代金は皆一旦倫敦に送つてしまひます。又支那から日本に買つたものの代金は皆倫敦から取りまます。例へば茲に、支那に四萬圓の輸出があつたとします。假にそれを三萬兩と致しますると、支那の輸入業者は三萬兩の銀を以て、支那に在る正金銀行の支店で、四萬圓の決済を致します。正金銀行では自分の手許に銀が入るから之れを倫敦に送らなければならぬが、送るのは不便であるからどうするかと云ふと、先刻も申しました通り、支那の外國貿易は十三億、其の中で輸出は四億幾らあるのであります。其の輸出の手形を正金銀行で

買ひ、四萬圓に相當する銀を出して、さうして英吉利拂の手形を正金銀行で取立てる、即ち先刻お話しした如く割引をしまして、四萬圓に相當する金を倫敦で持つて居ります。さうして必要な場合には孟買に送つて、棉を買ふなり何なり致します。今度は支那から日本に品物を賣りました時には、正金銀行の倫敦宛の手形を書きまして、それを外の商賣人なり誰にでも賣つて、四萬圓相當の金を取るといふことになります。即ち日本から支那に輸出した品物の代金は一遍必ず倫敦に送る、支那で品物を買ふ必要がある場合には必ず倫敦で支拂ふ、斯ういふ風に御承知おき下さつて宜しうございます。それでありますから、餘計賣つて少く買ふ處も、少く買つて餘計賣る處も、總て必要な金を倫敦に送り、必要な處に倫敦から金を送りますれば何も問題は起らない譯でありますが、茲に一つ面白い事があります。南洋の比律賓、爪哇、ボルネオ邊の金の支拂はどうして居りまするか云ふと、日本から其處には年額にして可なりの綿織物、莫大小類が行きますが、其の品物はずつと向ふに行くと共に、今度は手形も向ふに行きまして、向ふで取立てます。さうして其の金はどうするかと云ふと、日本には向ふから何も來ませぬからどうするか

とも出來ない。そこで之れも矢張り倫敦の方に送つてしまふより外に途が無いのであります。ところが此の時局が始まつてから、斯ういふ事があります。或汽船會社が船を南洋に持つて行つて運賃を取りましたが、船で持つて歸つて來るのには困るから、之れを日本に送つてくれと云つて外國の銀行に頼んだところが、いやだと云つたので汽船會社では非常に困つて居りましたが、いやだと云ふ理由を聞けば、時局が始まつてから金を倫敦に送ることが出來ない、従て日本に送金してやることが出來ないといふのである。即ち其の受取つた金を倫敦に送つて、倫敦の正金銀行に入れ、其の代りに、神戸なり横濱なりの正金銀行で拂つて貰ふ筈のが、倫敦に送れないからそれで日本に送れないといふのであつて、一寸聽きますと誠に諒解し難い事でありますが、さういふ事になつて居ります。それで英吉利が世界の金融の中心でありますから、有りと有らゆる世界中の金は悉く倫敦に送つてしまつて、必要な場合には總て其處から持つて來る、斯ういふやうな風になつて居ります。

然るに今度時局が始まりましたから、倫敦は總ての取引所といふものは皆閉鎖

してしまひました。第一には株式取引所、それから今申しました手形を割引します市場がありますが、其の市場も閉鎖してしまひました。さうして支拂猶豫といふ法律が出まして、銀行も預金を支拂ふ義務も無い、手形の期日が來ても支拂はぬといふ風になつてしまひました。其の結果としてどういふ影響が外國貿易の上に出て來ましたかと云ふと、先刻申しました例から云ふと、生絲は亞米利加に送つても手形は倫敦に總て送れない、送れないのではない、其の手形を倫敦に送つても割引が出來ないから、送つても金にならないといふことになつて來ました。それでありますから、今までの取引の順序が變つて、今度は亞米利加に生絲が行けば亞米利加に手形を送つてやるより致し方が無いやうになりました。それから羊毛とか、砂糖とか、米とかの輸入に於きましては、先刻も申し上げました通り、從來は倫敦の正金銀行宛に手形を送りましたが、今度はそれが出來なくなりましたから、現金か何かでなければ、手形では錢にならぬからいやだと云ふので、砂糖の輸入も羊毛の輸入も、八月一杯は全く杜絶してしまつたのであります。それから支那の貿易はどうなつたかと申しますと、支那は先刻申上げました四億内外の輸出があり

ますが、其の多くは歐羅巴向であつて、生絲とか羊の毛とか豆の油等でありますが、それも止みまして、上海、漢口あたりに輸出すべき品物が皆停滯致しました。品物の必要あつてこそ支那人も買ふ力がありますが、其の買ふ力が無くなつてしまふ、銀行から代り金を受取つて之れを倫敦に送る筈でありますのが、倫敦に送ることが出來ないといふことになつた爲めに、支那の貿易は大いに阻害されてしまつたのであります。それから今まで世間の問題でありましたが、孟買から棉の輸入が出來るとか出來ないとか、若し棉の輸入が出來なければ、紡績會社は休まなければならぬといふことを云つて居ります。今申しますやうな話で御了解でありませうが、支那から英吉利に品物が行かなくなつたから、支那から英吉利に金を自由に送ることが出來ない。又歐羅巴に生絲が行かなくなつた爲めに、其の代り金を倫敦に蓄積することが出來ない。斯ういふ點から倫敦の力がずつと減つて參つたのであります。其の爲めに孟買から棉を買ふ働きが出來なくなつてしまつた。従て孟買から棉の輸入が出來るとか出來ぬとかいふことを云つて居りますが、力が減つたといふのは、實際輸出の品物が減りました爲めに少なくなつただけであ

つて、絶対にそれが出来ぬといふことは決して無からうと思ふのであります。一方から云ひますと、金の爲めに輸入が出来ぬといふことになるかと思ひますが、又一方、獨逸、佛蘭西、白耳義等も戦争の渦中に投じて居りますからして、實際金があるうとも輸入が出来ない、斯ういふ事もあります。就中、甚だしいものは、獨逸から参りまするアニリン染料劑の如き、殆ど他の國には出来ぬものでありますから、戦争がもう少し續きましたならば、日本の鑛物性の染料が不足するだらうといふことであります。又燐寸の原料になります鹽酸加里は戦時禁制品であつて、其の爲めに燐寸の原料が無くなるといふことも亦事實でありまして、非常に困つた事であります。

貿易の現状なり時局の結果は斯やうであります。さうなれば此の時局の爲めに日本の輸出入の状態はどうなるだらうか、又日本の輸出貿易は時局後に大いに望みがあるだらうか、斯ういふ事は將來に屬しますけれども、唯單に私の考へだけを申上げて見ますといふと、前申しましたやうに、日本では今日まで非常に輸入が超過致しまして誠に憂慮すべき状態でありましたが、今日の所では時局の結果と

して、第一に非常に其の品物が安くなります。例へて見ますると、棉の如きは三割以上も値段が下つて居る。昨年と同じ分量の棉が這入つたと致しましても、昨年は二億一千万圓の棉であつたのが、本年は殆ど一億三、四千万圓の金があればそれで濟むといふことになりす。其の點に就ては、日本の輸入は非常に減るに違ひない。尤も其の爲めに、支那に行きます綿絲、綿布類も非常に安くなりましたし、先刻申上げましたやうに、綿は輸出として半分しか外國に出さぬから他の半分は内地で使ふ。内地で使ふには非常に安いものが使へるといふことになつて、普通の輸入の方から云ひますると、非常に好い状況になります。其の代りに生絲も多少安くなり、其の他日本に参りますものは全部非常に價格が下りますから、其の上は大いに國民が努力して、輸出がなるだけ減らぬやうに勉強しておきましたならば、私が先刻申しましたやうな心配な事實も、此の時局を利用して脱することが出来はせぬか、斯う私共は大いに希望して居る次第であります。それから又、戦争の濟んだ後に日本の外國貿易はどうなるだらうかと云ふと、色々考へがござります。併しこれは確かに事實になるだらうと私は思ひますが、此の戦争が長引かないで

此の儘止まつたと致しましても、第一に白耳義にしても佛蘭西にしても、獨逸でも英吉利でも、此れ等各國の工業の打撃は非常に酷いものであります。之れを恢復するには、少なくとも五箇年、長くば七箇年、可なりの時を要すると思ひます。其の間には、日本の品物を買ふ力も無くなるかも知れぬから、日本は輸出も減るかも知れぬが、日本の品物が最も多く行く先は亞米利加と支那とであつて、歐羅巴に行くのは少ない。従て其の心配は割合に少ないと思ふ。支那にしても印度にしても或は濠洲にしても、獨逸の商品は非常に跋扈して居るのであつて、只今の所では英吉利の品物は非常に良くて高い、併し獨逸の品物は、品物は悪いけれども安いといふことを標榜して、非常に英吉利の品物を駆逐しまして、日本と英吉利との間に獨逸が這入つて居るのであります。今獨逸が其の間から脱退してしまひましたならば、英吉利も殖えませうが、日本の品物は非常に多くなるだらうと思ふ。さういふ事が今日見えて居ります。現在さういふやうな現象がありますのは、亞米利加では陶器は從來主として獨逸から輸入したのであります。今日は日本から非常に行くやうになりました。又獨逸から玩具が非常に多く行つたのであります。が、それ

が無くなつた爲めに日本の玩具が殖えて居ります。それから佛蘭西等から織物を亞米利加に輸入して居つたが、其の織物が來なくなつたので日本から行くやうになつたのは事實であります。支那も印度も今日は時局の影響を受けて多少の購買力は減つて居りますけれども、漸次に恢復しましたならば、必ず日本の品物を大いに買ふであらうかと思ひます。これは私の話の範圍を脱しましたけれども、外國貿易を盛にしようと思ひます。今日でも、内地で品物を餘計造るといふことが主にならなければならぬと思ひます。今日でも、外國貿易をしようにも内地で品物が出來て居ないといふ現象もありますから、外國貿易に従事する者は爲替銀行と共に努力して内地で大いに工業を發達させましたならば、必ずや戦後に相當なる輸出貿易の増進を見ることが、期待致して居る次第であります。

戦後に於ける世界の金融

列國の戦費は公債による

(大正六年七月二十七日
於中央報德會)

私は極く簡単に、世界の金融が戦後如何なる風になるか、又其の影響を受けて日本の金融が如何なる風になるであらうかといふことを、豫測して見たいと思ふ。現戦争が何時終結を告げるか判明しない今日に於て、世界全體の金融を豫測するのは實に大膽なことであつて、或は正鵠を得ないかも知れないが、私は茲に正確なる材料を提供して、諸君と共に之れを判断し、豫測を立てて見たいと考へる。

世界金融の豫測に關する第一の問題は、列強は如何にして戦費を支へて居るかといふことである。之れに就て各國の採つた政策を約言すると、戦費は公債によつて支辨するも、公債の利息は増税によつて調へて居るのである。煩しいが二、三數字をあげると、英國は開戦以來三百六十五億圓といふ巨額の公債を募つて居り、

佛蘭西が二百五十億圓、獨逸が三百億圓、奧地利が八十億圓、伊太利が四十億圓、露西亞が百六十億圓であつて、合計千百九十五億圓に達する。過去三年の間、交戦諸國は此の驚くべき巨額の公債を募り、之れを以て戦争を繼續して居るのである。而して増税は實に僅かしか爲して居らない。併し英吉利の如き政府の力の強い國は増税も最も多く行はれて居るが、佛、露、獨の如き比較的政府の力の弱いところは、増税の高が誠に少ない。

此の増税の内容は頗る複雑である。例へば開戦以來輸入税は全然無くなつたけれども、それに代るべき税源を他に見出したといふが如き状態であつて、今其の大略を述べると、英吉利が三十七億五千萬圓、佛蘭西が二億七千二百萬圓、伊太利が八億四千四百萬圓、獨逸は僅かに六千四百萬圓しか増税を行つて居らない。斯やうに何十億の増税を爲したところは英吉利のみで、其の他の國の増税額は漸く公債の利息を拂ふに過ぎないのである。然らば其の外の戦費は何によるかと云ふと、中央銀行の金を借りて居るのである。即ち中央銀行に兌換券を發行させ、それで戦闘を續けて居る。従て各國に於ける兌換券の増加は著しい高であつて、英吉

利の通貨の膨脹高は戦前の六倍、佛蘭西も獨逸も同じく六倍、露西亞が十二倍、伊太利が二倍に上つて居る。通貨が或程度まで膨脹すれば其の價値の下ることは止むを得ない事であつて、露西亞の留はもと日本の一圓と略相對して居たものが、今は四十錢程に下つて居る。以て如何に其の兌換券が増加したかが察せられる。

戦後經濟界の壓迫

上述の三種の數字により、戦後は如何なる状態になるであらうかといふことを先づ財政上から観ると、戦後の財政整理或は軍事整理の爲めには、公債を尙一層増發するより外に途は無いと思ふ。若し與國が獨逸から巨額の賠償金を取つたならばいざ知らず、——それは殆ど想像がつかぬと思ふが——若し此の儘で戦争が終結したならば、今日既に巨額の公債を負擔して居る其の高を更に増加させるより外に財政整理の途は無い。然るに其の時に公債を募つたならば如何と云ふに、今日は政府が戦争の爲めに巨額の金を支拂つて居るから公債は甚だ募り易いが、戦後には其の支拂ふべき金も缺乏し、公債を募集することは非常に困難になる。

其の結果、必ず經濟界を公債の爲めに壓迫するといふことが想像される。従て歐洲交戦諸國に於ては、商業に必要な資金を財政整理の爲めに取上げることになるであらうと思ふ。尙今日の増税の中には、英吉利等に於ては、戦時特別利益税が多くを占めて居る。併しながら、斯くの如き租税は戦後無くなるべきものであるから、他にそれだけ増税の途を講ぜねばならぬ。従て税金は今日より殖えるのみならず、税目も非常に變つて來る。此の點に於ても亦、非常に經濟界を壓迫するであらうと思ふ。

今一つ最も重大なる影響を及ぼすであらうと思ふのは、各國中央銀行の通貨が著しく増加して居る事である。これは其の通貨を以て戦争をしたのも事實であるが、公債増發の爲めに信用の膨脹したことも確かである。何れにしても、此の通貨は戦後必ず或程度まで收縮する。即ち十二倍又は六倍の如き巨額の兌換券が出て居るところでは俄に舊には復せぬとしても、十二倍が六倍となるとか、六倍が三倍になるとか、いふ風に、漸次通貨の收縮を來すより外に方法は無い。今日、日本でも通貨膨脹の聲があるが、通貨が膨脹して金融が緩慢になると同時に物價が上

る。それが戦後には反対の現象を呈し、通貨が収縮して物價が下る。同時に潤澤であつた資金は必ず逼迫して來て、金利は非常に高くなるであらうと考へる。今日歐羅巴の狀況を見ると、中流以上の人が公債に多くの金を出し、其の金の大部分は下層社會に落ちて居るのであつて、戦後直ちに前に述べた如き現象は起らぬかも知れぬが、結局さういふ状態に陥ることは疑ひを容れない。例へば英國の南阿戰爭の後にも、五年目が最も金融の逼迫した時期であつた。又普佛戰爭又は日露戰爭の後の事を考へても、戰爭が終ると漸次資金の逼迫を來して金利が騰貴する。三年、五年經過する間に、必ず斯くの如き事情が生じたのである。

戦後産業資金の切要

次に之れを歐羅巴の經濟上から判斷して見ると、此の戰爭の三年間は公債に金を引上げ、或は通商殆ど杜絶した爲めに、産業に必要な資金の投下は全く停止して居る。然るに戰爭が終ると、急激に産業に金を投下する必要が起つて來る。それから今一つは、英、佛、獨、何れの國も、工業の全然形を變へたものが多い。普通の造

船所や鐵工所等は軍需品の製造所に充てられて居るから、之れが戦後に於て普通の工業に復する爲めには、莫大の資金を要することであらう。經濟上から考へて見ても、或年月の間には必ず金利騰貴の時が來ると信ずる。そこで歐洲の金融は斯くの如くなることを豫想し、其の結果我國に如何なる影響を及ぼすかと云ふに、御承知の如く、亞米利加は今日大戰に参加して餘程事情を異にするが、それは最近の事に屬し、今日までの大體の事情は日本と同様である。即ち交戦國に軍器、彈藥を供給して、輸出超過が非常な巨額に達し、莫大なる利益を得て居る。若し私の想像するが如く、歐羅巴の金融が逼迫し、兵器、彈藥の需要が無くなれば、米國の輸出超過は必ず減少するのみならず、或は戦前の状態に復するであらう。若し亞米利加が輸入超過となつたならば、必ず歐洲金融逼迫の大影響を受けることと確信する。而して米國と日本とは歐洲と異り、戦後には寧ろ甚だしく金融逼迫を感ずるであらうと思ふ。何となれば、米國も日本も共に非常な輸出超過で、事業が大いに擴張されて居る。其の事業を維持するには相當の資金を要するから、金融逼迫の時代が來ると、歐羅巴よりも更に痛切に感ずるであらう。

御承知の如く、戦前日本の金利は非常に高かつた爲めに、政府は英吉利より金を借りたのみならず、産業資金に大なる不足を告げた結果、日本の事業家にして、英国から二年又は三年の期限で借入れた金は案外巨額に上つて居る。開戦後それを返済したが、若し假に金融逼迫の程度が戦前の如くになり、歐洲から借りねばならぬことになる、我國では大いに擴張された事業を維持する爲めに、非常な資金を要するから、寧ろ歐洲以上に金融逼迫に苦しまねばならぬ。誰も知る通り、米國は開戦以來輸出超過の爲めに實に巨額の金貨を歐羅巴、殊に英吉利より持來し、参戦前は我國と同じく、餘りに金が多くて困つて居た。即ち通貨が非常に膨脹して居た爲めに、輸出超過が止んだならば其の通貨を通常に復する時の米國の苦痛は、蓋し甚だしいものがあらう。

米國の採れる對應策

此の豫想の如く、戦後三年、五年の間に世界を通じて金融逼迫が起ると假定して、之れに對し今日、日本の施すべき方策は無いかと云ふに、之れは自説を述べるより

も、寧ろ同じ事情の下に在る米國の財政家又は金融業者の常に研究して居る所を紹介したならば、日本の金融逼迫に對する準備として、恐らく解決を見ることが出來ようと思ふ。米國では参戦前、斯ういふ事を頻りに唱へて居た。即ち今日の如く金貨が流入しては、戦後反動的の金融逼迫が恐ろしい。其の爲めに折角戦時中に擴張された諸工業が潰れてしまつたならば、外國と經濟上の戦ひをして勝利を占めても、戦後の失敗に大困難を感ずるから、これではならぬといふことを先覺の士が唱道し、其の對應策を實行して居る。其の第一は海外放資。第二は外國政府の公債、而も其の期限は長くて二、三年位の公債に應じておいて、金融逼迫の來た時に、外國公債の支拂を受けて金融を緩和するといふ方法を採用して居る。第一の方法に就ては、米國では或は南米に或は支那に、限なく漁つて放資を選択して居る。海外放資を爲しておけば、それより生ずる利潤が金融逼迫の場合には大いに緩和の助けとなるから、資金の豊富な今日に於て放資することは頗る結構と思ふが、海外放資は一朝一夕に容易く出來難いもので、英吉利や佛蘭西の如く、數百年來海外放資に馴れて居る國民ですら、一年間に巨大な資本を投下することは出來ない。

況や日本の如く海外放資に馴れないところでは餘程努めて居ても、容易に順當な放資の高は出ない。此の點に就ては官民共に努力して居るが、今日、米國も同じことで、支那放資とか南米放資とか稱へて居るものの、其の高は幾らでもない。第二は外國政府に公債を發行させ、それに應ずることであつて、日本でも大いに進み相當な額に達したが、米國は又莫大の金を外國に貸付けたので、三年、五年の後金融逼迫の場合に、假令其の全額が取れなくとも、幾部分の返濟を受けたならば、金融緩和上非常な利益がある。

此の輸出超過を戦後までも持續させるには、大いに努力して品物を良くし、販路を擴めねばならぬが、金融逼迫の時が來ると、之れは一般的原因として輸出に重大な影響を及ぼすので、戦時中に擴張した事業を維持することが出來なくなる。國內に於ける貸借は全體の金融逼迫の助けとはならないから、短期の金を外國に貸しておき、日本に金融逼迫の起つた場合には之れを取立てて金融を緩和し、世界各國の弱れる際に、獨り日本は金融緩慢で事業の擴張を繼續して行くことが出來たならば、日本の經濟的位置を高めるに最も良い方法であらうと信ずる。

帝國經濟發展の方策

併し海外に金を貸す必要は無い、如何なる資金も産業振興の爲めに使用せよと稱へて、海外放資に反對する人もある。併しながら假に茲に一人の工業家あり、戦前五千圓宛の利益を得て其の五千圓を事業の擴張に用ひて居たものが、時局の爲め一萬五千圓の収益をあげるやうになつた。さうすると、物價は騰貴し、産業の發達した今日では、事業擴張の爲めに一萬圓使ふことが出來よう。さうして殘餘の五千圓を外國政府に貸しておくとすれば、三年後には一萬五千圓を外國政府に貸したことになるが、戦後に至つて其の利益が元の如く五千圓に減ずる時に、毎年貸した金を取り、依然として一萬圓を事業擴張費に充て得たならば、戦時に於て擴張した事業を維持するのみならず、戦後三年間は矢張り戦時中の如く事業を擴張することが出來る。此の例は頗る簡單であり、色々の異論はあらうと思ふが、強ひて一萬五千圓の擴張を行ふは則ち濫費に互り、無謀な企てであるから一萬圓に止め、毎年五千圓を外國に貸しておくことが、今日吾々の努むべき所ではなからうか。

此の戦争は何時まで続くか分らぬが、戦後に非常な金融逼迫が起り、それが五年までに極度に進み、頂點を通過することが出来れば金融の緩和を生ずるから、此の峠を越し得るやうに準備をしておいたならば、我帝國は大發展を遂げるであらうと思ふので、世界の金融の豫測をして、私の考へた所を述べ、御參考に供した次第である。

日米爲替關係と印棉買入資金問題

(大正六年十月二十七日
於第二十四回商業會議所聯合會)

私は、只今御紹介を蒙りました井上でございます。昨日藤山君から何か外國爲替の事を話せと云ふことでございましたが、どういふ事をお話致して宜しいやら全く考へ無しで只今参りました、お話を承りますと、亞米利加と日本との爲替の關係と、それに従ひ日本と印度との爲替の關係を話して貰つたらよからうと、斯ういふことでございますから、お話を致したいと思ひますが、多少實務に涉りましたやうなことで、貴方がたにお聴辛いやうな事があるかも知れませぬから、其の邊は然るべく御取捨を願ひます。若し不明の點がございましたならば、御質問を蒙りましたら御説明を致します。

御承知のやうに、日本は戦争前までは輸入超過の國でありましたからして、外國爲替の決濟を致しますといふことに就ては、何等苦心を致したことはございませ

ぬ。何時でも外國で資金が足りませぬので、借金に借金を重ねて居つたやうな有様で、爲替の決濟をどうしようといふやうな心配は、夢にも見ることは出来なかつたのでございます。今、戦争が始まつてからの経過を申しますと、御承知のやうに、從來世界金融の中心市場は英吉利でございますから吾々の爲替は、支那に輸出したのも、南洋に輸出したのも、亞米利加に輸出致しましたものも、何れの部分に對しまするものも、其の代り金は悉く英吉利に集めました。さうして品物を買つて参ります時は、英吉利から資金を取つて買つて来て居りました。戦争が始まりましてから二箇年間はそれと同じ事を繰返して居りましたが、唯中途に戦争の経過によつて英吉利の市場が段々危険を感じて参りました爲めに、其の一部を亞米利加に移すことになりましたが、相變らず其の通りにして参りました。然るに昨年暮から、印度と英吉利との間の爲替が一切杜絶されてしまひました。それと殆ど同時に、濠洲と英吉利との間の爲替も杜絶致しまして、丁度世界中で英吉利と亞細亞との間に一つの壁を拵へてしまつたやうな有様になりました。さういふ事が此の國際金融の上に非常な變化を來すことになりました。英吉利に金を送り

まして、其の金を印度に取ることも出来なければ、或は濠洲に取つて毛を買つて來ることも出来ぬといふことになりました。斯ういふ事になりました爲めに、日本の金は漸次亞米利加に向ける方針を立てまして、今日に於きましては、日本の輸出貿易のうちで八割位は悉く亞米利加拂になつてしまひました。即ちこれまでは全然英吉利に資金を貯めたのが、今日では日本の輸出で得ました八割位の資金は、皆亞米利加の方へ振向けて貯めるといふことになりました。さうなりますると、日本から輸出致した代金と亞米利加から買つて來るものとを比較致しますると、日本の輸出の方がずつと多いといふ有様になつて、亞米利加に日本の資金が非常に澤山出來ることになります。

それで亞米利加には日本の資金が貯まりがちでございますので、昨年暮に英吉利の公債を一億圓引受けました。之れは内地市場の金融緩慢といふ關係もございしましたが、亞米利加に貯まつた資金の處分の方法としてやつたもので、非常に適當な方法でございました。其の以前に政府が五千萬弗でございましたか、英吉利政府に矢張り亞米利加で金を貸して居ります。それも政府が持つて居ります

金が彌が上にも貯まつて、之れを利殖するに甚だ困るから、英吉利政府に其の金を貸したのであります。又今年の春から計畫致しまして、亞米利加の市場に在る英佛公債とか、或は英國公債をなるたけ日本内地の人に買はせ、正金銀行で爲替相場を保證するといふやうな途をとりまして獎勵致して参りました。之れが今までに三千萬圓位賣れて居るだらうと思ひますが、之れも亞米利加に貯まりました資金の一つの處分方法でございます。さういふことを官民共に大いに努力して参りましたが、猶亞米利加に資金が貯まるのでございまして、貯まつた資金は唯積んでおくことは出来ませぬから、止むを得ず段々亞米利加から金を日本の方へ取寄せて参りましたのでございます。今過去一箇年間を勘定致して見ますると、凡そ二億圓位の金を亞米利加から持つて参りました。英吉利に政府が一億圓貸して、尙其の上にこれだけの金を持つて参つて爲替の決済をつけたといふことになるのであります。此の以後にはどうなるかと云ふと、或は同額又は同額より以上の金を亞米利加から持つて来て、爲替の決済をする積りで居つた譯でございます。これは中間のお話でございますが、どういふ風にして其の二億五千萬乃至三億

の金が亞米利加に貯まるかと申しますると、唯單に日本が亞米利加に輸出超過をした高ではありませぬ。私が先刻お話を致したやうに、世界各国に日本が輸出した其の輸出超過の金を亞米利加に貯めますものでありますから、日本と亞米利加だけの輸出入のバランスを見ては、二億とか或は三億といふ數字は出て参らないのであります。貿易表を御覽になりますると、昨年度に於て日本の亞米利加だけの輸出超過は、僅かに一億三千萬圓でございます。尤も一億三千萬圓は、非常に違つた比較を致して居りますから其の數字が出て來ますので、亞米利加から日本に輸入しますものは、運賃も保険料も乃至は商人の儲ける利益も、其の中に這入つて居ります。然るに日本から亞米利加に持つて行きますものの數字の中には、運賃も入つて居らなければ保険料も這入つて居ない、乃至日本の商人の儲ける利益も其の中に計上して無いのであります。さういふ二つ違つたものを比較して居りますから、一億三千萬圓の輸出超過といふことになるのでありまして、吾々がざつと勘定致しましても、四、五千萬圓位は其の上に殖やしてもよいだらうと思はれます。これは極くざつとした考へでございますが、又一面から計算を立てますと、日

本と亞米利加との關係の爲めに運賃が幾ら取れ、保險料が幾ら取れ、移民が幾らの金を持つて來たといふ勘定をして見ますと、凡そ私が今云ひました數に適合致します。さう致しますると、日本と亞米利加との間の輸出超過は、一億七、八千萬圓といふ結論になるのでございます。それから其の外に、日本は支那に向ひまして莫大なる輸出超過である。其の輸出超過の金は、前お話を致しましたやうに、これまでは總て英吉利に送りましたのでありますが、——今日でも一部は英吉利に送りますが——戦争の始りました後には、英吉利が金を貯めるには不便なところになりましたのと、同時に英吉利と支那との貿易關係が非常に變化致しました爲めに、支那に向けました輸出超過の資金も、出来るだけ亞米利加に持つて參ります。即ち支那から亞米利加に向けての輸出の爲替手形に換へまして、之れを紐育に持つて行つて受取るやうにして居ります。其の外の南洋、譬へて云ひますると新嘉坡の如きから中々莫大の護謨や錫を買ひますが、此れ等も——新嘉坡、南洋を引括めて考へまして——非常な輸出超過であります。其の輸出超過の金を亞米利加向の爲替に換へまして、之れを紐育に送つて行きます。

さういふ風に致して、殆ど世界各國に向つての輸出超過の資金を、今日に於ては亞米利加に廻はす爲めに、日本と亞米利加との間の輸出超過より以上に、亞米利加に金が出来るといふことになつて居ります。これは亞米利加では不平は云へない話で、亞米利加から申しますると英吉利の跡取になつて居る譯で、即ち紐育が世界金融の中心市場になりつゝあるといふ事柄になるのであります。又日本から申しますると、英吉利に金を貯めても之れを取るに不便であるとすれば、世界中紐育が最も便利で安固な處であるから、其處へ持つて行つて金を貯めておくといふことは當然の義であらうと思ひます。其の爲めに、日本と亞米利加との間の輸出超過だけを眼中に置いて、亞米利加に貯まる金を計るといふことは出来なからうと思ふのであります。此の點に就きまして、尙序に自分の觀る所を申し上げます。今日に於ては、日本は東洋に於ける金融の中心市場であらうと思ふのであります。又さういふ覺悟を持つて、吾々は仕事をしなければならぬと考へて居ります。従て只今申します如く、亞米利加に向けた爲替の金も、南洋に向けた爲替の金も、之れは日本の手に於て世界各國、便利な處に持つて行くなり取るなり致さなければ

ならぬと思ひます。例へば支那に向けた輸出超過を千萬圓と假定する。其の輸出超過金は、悉く一度之れを亞米利加に持つて行きます。然るに日本の人が支那に於て之れを放資する場合にはどうかと云ふと、若し亞米利加が非常に便利な市場であつて、金もくれる、爲替の自由も利くならば、其の千萬圓の金を一遍亞米利加に送つて、支那に放資する場合は、日本の手で亞米利加から取つて來て支那に放資する、斯ういふ風になる譯であります。更に言ひ換へますれば、亞米利加に置いてある金は日本の金であるから、日本の金を支那に放資する場合には、さつさと日本から金を出して、其の代り亞米利加から金を持つて來るといふことをするのが日本の役目であつて、此の後自分の抱負から云つたならば、さういふ事であればならぬと思つて居ります。今のやうな有様でございまして、日本の輸出の金が亞米利加にさういふやうな風に集ります爲めに、稍巨額なものを亞米利加に残して置いて、其の他を日本に金で持つて來るといふ有様になつて居ります。

然るに先日、御承知の如くに、亞米利加から金を渡さない、金の輸出に就ては許可を得なければならぬといふことになりまして、今日では其の許可を得ることに努

めて居りますのであります。果して金を日本へ持つて來られるか來られないかといふことは、今日は分りませぬ。分らぬのみならず、亞米利加から見ますと、此の後に於ては非常なる巨額の公債を募らなければならぬから、其の公債を募る金融市場をこしらへる基礎となるべき金を外國に持つて行かれるといふことは、非常に困ることだらうと思ひます。金を出すことは如何に理窟はあつても、いやに相違はない。いやなものをして是非出してくれろと云ひますれば、或はそれならば日本から買ふものを制限しようとか、日本からの輸入を禁止しようといふことを云はぬとも限らないのであります。然らば此處に金を持つて來ずとも、日本の爲替が出来る工夫があるかどうかといふ問題になります。そこで今の如く、二億或は三億の金を持つて來ずとも、日本の輸出品に對して十分爲替がつくか、或は支那南洋あたりに對する輸出超過の金も十分に處分がつくかと申しますると、此の點は吾々の努力で出來ます。即ち前段の英吉利に金を貸したやうなことを繰返してやるより外はない。併しながら、之れは相手のあることだから出來ぬかも分らぬ。出來るか出來ぬか分らぬやうなものを相手にして將來の安心は出來ぬといふこ

とになりますると、今日に於ては、政府とか日本銀行とか、力の十分あり、又權威のあるものが此の外國爲替の援助をするより外に途が無いと思ひます。さうして政府或は日本銀行の裏には、國民全體が之れを援助するより外ないのであります。之れは唯私の空言ではない。政府が爲替を解決せんとすれば、或は内地で公債を募つて、海外で之れを維持するといふことをしなければならぬ。内地で公債を募ると云へば、國民一般が其の方針に向つて政府の公債を募ることに援助するより外に途は無いのであります。日本銀行は、亞米利加に在る金を準備として、兌換券の發行が出来るではないかと云ひますが、之れも凡そ制限があるもので、無限に行くものではなからうと思ひます。どうしても之れは、結局は國民一般の問題になることであらうと思ひます。併しながら今日に於ては、權力のある政府と所謂財力を握つて居る日本銀行が其の方針になりますれば、吾々一般はそれに信賴して、最後の覺悟を以て進むより途が無いと思ひます。又既に私の職責と致しまして、も、さういふ交渉を各方面に致しました爲めに、今日は亞米利加から金を持つて來ずとも、爲替が組めることを確信して居ります。又生絲の如き、年々に生産をして

行きますやうなものが、金が取れぬから賣れぬといふやうなことは無いと信じて居ります。賣つた金が取れぬから亞米利加に金を貯めておくといふことは忍びますが、賣るべき品物を賣らずに置くといふやうなことは、國として有り得べからざる事であらうと考へますし、又皆さんも私と、さういふ點に於て、覺悟は同じであらうと思ひます。

偕て、假に金が亞米利加から來なくなつたと致しますと、日本銀行の今日内地に在ります正貨の高は、新聞等で皆さん御承知の如く四億餘であります。今後如何なる方法を盡しましても、内地の産金額二千萬圓足らずのものを更に増加するより外、此の上一文も殖やすことは出來ないと覺悟するより外はありませぬ。而して此の戦争が續きます以上は、日本の輸出は稍減るかも知れませぬが、相變らず輸出超過であらうと思ひます。輸出超過を持続致しますれば、兌換券の發行高は非常に殖えるであらうと推察します。而して正貨準備は殖えないといふことも、はつきりした事實であります。此の二つの事實を考へて見ますと、先日、日本銀行から大阪の棉花同業組合や紡績聯合會や吾々爲替銀行に對して、亞米利加から金

が来ない以上は、これまで通りに印度に金を積出して、印度から棉を買つて来るといふことは出来ぬかも知れぬ、尤も交渉中であるからどうか分らぬが、出来なくなるかも知れないから、其の覺悟で居つて貰ひたいといふ申渡しがありませんが、一日も早くさういふ警戒を與へられることは、至極當然の事であらうと考へるのであります。其の後今日まで、其の方針によつて種々様々の準備をして居ります。

そこで印度と日本との間の棉の事がどうなりますかと申しますと、これは自分の本務でないことを當業者に就て研究しました結果でございますから、或は多少の間違ひがあるかも知れませぬが、唯爲替銀行の當局者として参考にする爲めに調べた事でございますから、其の積りでお聴取を願ひたうございますが、印度から毎年買ひます棉の總高は凡そ百五十萬俵でございます。百五十萬俵の代金を今日のピクルの値段にして割出して見ますと、一俵が百五十圓以上につきます。百五十圓以上につきますと、丁度二億二千五百萬圓といふ金が印度で要ります。二億二千五百萬圓の金を、毎年棉を買ひます爲めに支拂をしなければならぬ。昨年の暮までは其の金をどうして處分して居つたかと申しますと、前申上げまし

たやうに、英吉利に總ての金を集めておいて、棉の必要な場合は英吉利から總て送金を致して居りました。然るに昨年の暮から、印度と英吉利との間の爲替が非常に極限されました。既に今日までに、英吉利政府の命令で三、四度減額されて、今日に於ては、正金銀行の取前としては僅か二千萬圓餘りしか英吉利から送金は出来ませぬ。それも殆ど一箇月に一遍宛位に減らされて居りますから、此の上減るか、或は全然無くなるかも知れませぬ。併し假にそれが二千萬圓以上あると致しまして、其の外日本から印度に向けての輸出が七千萬圓ばかりあります。其の七千萬圓の中でカルカッタから鐵藥品、紡績棉、麻袋等を買ひます爲めに段々金を取られまして、結局棉の方にはこれまで五千萬圓位振向けて居ります。さうして其の足りない金はどうして居つたかと云ふと、此の一月以來は殆ど月々千萬圓、或は千萬圓以上も日本銀行から金を貰つて、印度に現送して居りました。然るに只今の如く、日本銀行から金が出なくなつて、残るものは英吉利からの爲替で送り得る二千萬圓餘の金と、輸出で得られる五、六千萬圓の金で、それより外には印度から棉を買つて来るとは出来ぬ。今まで二億二千五百萬圓の金を要して居つた印

度棉を買ふ代金が今申す如く、先づ七、八千萬圓位しか出来ぬといふやうな事實になりませう。それでございますから紡績會社としては、印度の棉をこれまで使つて居つたものは、非常に困るといふ結論を生ぜざるを得ぬ譯でございます。

併し差當りの問題としては、少しく説明を要する事でありまして、只今で申しますると、日本内地には印度の棉が五十萬俵以上あります。それから印度で買付けてあります棉、又途中の船の上に在ります棉、其れ等を加へますると丁度——此れ等は或は紡績業者から申しましたら祕密であるかも知れませぬ、或は私の云ふことが極く粗雑な數字であるかも知れませぬが、——先づ七十萬俵位ありはせぬかと想像がつかます。さう致しますると、紡績會社は此處に百二十萬俵以上の棉を、今日はちやんと買つて持つて居る譯でございます。即ち自分の手許に持ち、或は正金銀行あたりで爲替の金を用意してあるものが百二十萬俵以上ある。之れは來年七月までに使用する棉であるのでございます。さう致しますると今日、日本の紡績會社は、來年七月まで使ふ印度棉は十分あると云つてよいのでございます。問題は來年八、九月後の事でありまして、今日何も今のやうな事實が出て來て、紡績

機械が動くのに困るとかどうとかいふ問題ではないのであります。併しながら御承知のやうに、紡績會社は六箇月或は一年先の棉を買ひまして、其の損失の行かぬやうに、六箇月或は一年先の絲を賣つて居る。今日、日本全國の紡績會社では、恐らくは、來年六月までの絲を全部賣つてしまつて居るだらうと思ひます。さうして其の原料たる棉は、ちやんと來年六月までのものを買つて持つて居る。これから來年の七月、八月先物の絲を賣らうとすれば、其の絲は亞米利加の棉で拵へるか、印度の棉で拵へるかといふことを決めぬと、値段が定まらぬ譯でございます。それでございますから、商賣上から云へば今日の問題でございますが、工業上から申しますると、來年の七、八月位までは別段どう斯うといふ問題ではないのでございます。

それならば先日來新聞紙に傳はつて居りますやうに、印度棉の代りに亞米利加棉を買ふといふことはどうであらうかと申しますと、これは中々大變な問題でございますませうが、少し新聞にあります事を私は辯解しておきたいと思ひますのは、何れ日本銀行の當局の方も御説明になると思ひますが、途方もないことを世間で誤

解して居ります。日本銀行や政府が亞米利加の爲替資金の處分に困るから、紡績會社に對して亞米利加の棉を買へと勧誘をして居る、怪しからぬ話である、爲替資金は自ら大いに考究すべき問題ではないか、といふやうな事を或新聞か何かに書いてありますが、それはさうではないのでございます。即ち日本銀行は先刻お話を申上げましたやうに、爲替問題を大いにやつて見ようといふ決心もあられるやうであります。併し紡績會社としては印度棉でなければ非常に困るが、印度棉は斯くの如き状態で十分買へないから亞米利加の棉を一つ買つてはどうか、といふことを勧めた譯であらうと、私は承知して居ります。又さういふ風に聽いて居る。決して自分の爲替資金の解決問題の荷を軽くする爲めに、紡績會社に轉嫁した意味では毛頭無からうと考へて居ります。

それでは印度棉に代へるに亞米利加棉を使つてどうなるかと云ひますると、これは機械の上からは、印度棉を使つた代りに亞米利加棉を使ふといふことは差支へ無いのかも知れませぬが、吾々は當業者でないからよくは存じませぬけれども、商賣上から申しますると斯ういふ事があります。印度棉は御承知のやうに、三百

斤で、先刻私が申しましたやうに、百五十圓である。然るに亞米利加棉は三百七十斤で、今日の價格が一封度二十五錢と致しまして、丁度其の運賃と保険料を掛けると、日本へ持つて來て三百圓にたつてあります。印度棉は三百斤の棉が百五十圓であります。亞米利加棉は三百七十斤の棉が三百圓する。價格は倍であるが、斤數は僅かに七十斤しか違はぬといふことになる。それでございますから、印度棉に代へるに亞米利加棉を使ふといふことは、機械上宜しいと云つても、價格の上から致しまして、或は製品がそれだけ餘計出来るか、或は出來た製品がそれだけ高く賣れるか致しませぬと、丁度それだけ打撃を被る譯であります。併し其の打撃を被りますのも、内地では多分高く賣ることは出來ようと思ひます。高い原料を使つて拵へたものは、高く賣ることは出來るに相違ない。併し一番心配しますのは、支那の市場に持つて行つて、亞米利加の高い原料を以て拵へた絲と、印度の安い棉で拵へた絲と、支那の市場に於て競争した場合に、日本の絲がこれまでのやうな優勢の地位を占めることが出來ぬだらうと思ひます。此の印度棉と亞米利加棉との關係に就きましては、煎じ詰めますると、私は其處になるだらうと思ふ。諸君

の御心配になる點も其處ではないかと考へて居りますが、此の點に就きましては、折角數十年努力をしてやつと外國市場を建設したものを、今日之れが爲めに再び市場を閉鎖するやうな形になるといふことは、如何にも残念であらうと思ひます。此の點に就きましては、爲替銀行も勿論の話でございますが、或は紡績業者、即ち製造する者、之れを外國に持つて行く貿易業者、此の三者が集りまして相當な研究をして、なるだけ支那、東洋、南洋方面に於ける市場の縮小せぬやうに、之れをやる外途が無いかと考へて居ります。

印度の爲替資金は、只今も申す如く、金が參りませぬから非常に困る。それなら何か之れを充實する途があるか。斯う申しますと、これまで政府の手を通じて、或は自分の手で以て、英吉利政府に非常な交渉を致しました。それは私は、遺憾なく交渉したと申上げてよからうと思ひますが、假に申しますと、印度で金を貰ふ爲めに英吉利で金を渡さう、それが出來ぬならば、お前の必要とするものは亞米利加であらうから、亞米利加で金を渡すからどうか印度へ金を渡してくれといふやうな交渉までして、有りと有らゆる條件を提供して見たのです。併しながらどう

しても、英吉利政府としては之れに應ずることの出來ない事情がある。其の出來ない事情と申しますのは、又どういふ譯で英吉利から印度に向けての爲替を左様に局限したかと申しますと、それは斯ういふ事情である。印度の幣制が、言葉が悪いか知りませぬが、先づ紊亂して居る。それで印度で兌換券を此の上發行するには、どうしても金か銀かを持つて行かぬ以上は出來ない。それは又どういふ譯かと云ひますと、これまで印度に或一定の正貨準備を置いて兌換券を出して居つた。さうして印度は何方かと申しますと、英吉利に非常に金を拂ふ國であります。元來輸出超過の國でありますが、英吉利から公債で非常に金を借りて居る爲めに、其の輸出超過以上に終始英吉利に金を拂ふものでありますから、丁度日本の立場と同じであつて、在外正貨を澤山持つて居る。印度に在る準備よりも、英吉利に在る準備の方が多いのであります。此のやうにして兌換券を發行して居つたのであります。今日まではどうして居たかと云ふと、何時でも準備が足りなくて、英吉利から金とか銀とかを持つて來て居る。ところが戦争が始まりましたから、英吉利は如何なる事があつても自國から貨幣を出さぬといふ方針を採つて、今日

まで持續して居ります。即ち自國を保護する爲めには多少他を犠牲に供するといふやうな精神でありますから、金の如きも出させぬ。然るに印度はどうかと云ふに、先刻申しましたガニ・バッグや穀物の輸出が非常に多く、平時より以上に輸出超過でありますのと、印度は御承知の如く農産國であるから、農産物を皆内地で買入れる。内地で買入れるに、印度人は紙幣なんか受けぬから、皆銀でなければいかぬ。即ち兌換券を銀又は金に換へて以て買付に行く爲めに、輸出超過になればなるだけ孟買に在る正貨準備は減つて行く。減つて行くに拘らず、今申す如く英吉利に於ては補充する途をとらぬ。それでありませぬから、お前が亞米利加で金が欲しいなら亞米利加で渡さう、英吉利で欲しいなら英吉利で渡さうと提供しても、奈何せん、印度そのものに正貨準備が無ければ、どうしても兌換券を増發して行くことが出来ないものでありまして、英吉利政府としては中々之れに應じ難い譯でございます。それでありませぬから、日本から金を持つて行けば、それなら宜しいから受けようといふ譯で、金を持つて行けばそれを準備として兌換券を發行して行きます。さういふ有様でありまして、印度の幣制の爲めに英吉利から印度向の

爲替が極限される。吾々が種々様々な處置をとつても、中々英吉利がよいそれと應じない所以は其處にございます。

それならば何か爲替の資金を充實する途があるかと申しますと、先刻戸田博士のお話がございましたが、例へば印度へ爪哇あたりから砂糖が参ります。其の砂糖の爲替と、吾々が南洋に輸出をした其の輸出の代金で、印度で棉の爲替を買ふ。或は新嘉坡からも来る、香港からも来る。極力此の方法を講じて居りますから、之れは尠なからざる高が出来るのであります。それからもう一つは、新聞或は世人に大變誤解があつたやうでありますが、日本は支那に向けての輸出超過の國であるから、其の輸出超過の金を印度に送つたがよいではないかといふ議論が大分あるやうであります。之れは、事實を申しますと、昨年から今年の春にかけては日本の金餘程やりました。丁度上海から孟買に銀を積出しました高が、恐らくは日本の金にして六千萬圓位なものであります。併しながら其の積出した結果がどうなつたかと云ふと、上海では普通六千萬兩位の金が始終市場に在る。又無ければ、其處の爲替はどうしても處分して行けないのであります。吾々が向ふに積出した爲

めに、今日では二千萬から二千五百萬兩位に減少しました。それでございますから、若し此の中に支那貿易に従事されて居る方もあつたならば、甚だしく心配されて居ると考へますが、吾々の銀の力といふものは、著しく困難になつて居るやうな有様になりました。それでございますから、此の上支那から巨額な銀を印度に持込んで行くことは期待が出来ませぬ。加之、世界を通じて英吉利政府が銀を一手でコントロールするといふ處置をとつて、今日では各國人が印度に銀を持つて行くことを許しませぬ。英吉利政府が各國の銀を買つて、印度に必要な銀を持つて行くことに方針が極まつて居る爲めに、従前の如く吾々が銀を持つて行つても、それを受け付けてくれませぬ。それは歴史を釋ねますと、吾々のやうな爲替銀行が十二、三軒ありますが、世界を通じて爲替銀行が皆競争して、英吉利政府を向ふに廻はして處々方々で銀を買集めた結果、五十何片といふ高い値段に競上げて非常な不結果を生じました爲めに、英吉利政府は銀を印度に持つて行くことは英吉利政府一手でやることに致しまして、其の爲めに世界の銀の値段も下つて参りました。それでありませぬから、支那に對する輸出超過の金を印度に持つて行くこと

は、今日の所では全く望みが無いのでございます。其の外には、前に申しました印度に向けての七、八千萬の輸出であります。これは此の際是非とも殖やして見たい。運賃も下げ、爲替も尙一層便利にして、さうして一つ大々的に、印度の輸出を殖やして見たいといふ希望を有して居ります。これは當業者とよく連絡をとりまして、政府にも歎願して、極力やつて居ります次第でございますが、之れとても中々運賃を下げたからと云つて、急激に其の高を殖やすことは困難かも知れませぬが、先づ數千萬圓は殖やすことが出来ると思ひます。輸出を殖やすことは即ち永久的の利益になる事でもありますから、印度に向けての運賃をうんと下げて貰はうと思つて頻りにやつて居りますが、之れは貴方がたの援助を仰ぎましたら、却て出来る事かと思ひます。戦争前綿布一梱の運賃九圓のものが、只今では定期船で五十圓、臨時船で六十圓といふ高い運賃になつて居ります。これは世界一般の運賃の騰貴で、一向不思議はないのであります。輸出を奨励する場合には、もう少し運賃を下げて貰ふことが出来ないかと考へて居る次第でございます。

蠶絲資金の運用と蠶絲の取引に就て

(大正六年十一月蠶友會於)

私は貴方がたの前に出まして何かお話を致しますことは、私自身の研究にもなりませんし、又貴方がたの中に出てお話し致しますことは、何だか若くなるやうな気が致しまして、誠に名譽で有難い仕合せでございます。貴方がたの前に出て来てお話し致すのでありますから、何か少し研究して參るのが當然の義であります。少し忙しくございました爲めに、餘り研究もして參りませぬのは甚だ恐縮致しますが、私の平生従事して居る事で貴方がたの御參考になるやうな事、又貴方がたが平生學校で講釋をお聴きにならぬ事を、一つお話しして見ようと思ひます。

貴方がたが當時御研究になつて居る事、又世の中に出られて従事されんとして居る蠶絲業といふものは、日本の他の産業と比較しまして、非常に重大なる産業であります。それを極く分りよいやうに他の仕事と比較して見ますと、日本で一番

文明的で組織的の仕事であるものは、紡績業であります。其の紡績業は日本でどれ位な産業であるか、貴方がたが従事される蠶絲業といふものは、どれ位なものであるかといふことを比較致して見ますと、私が此の前に農商務省で聞いて居りましたのですが、——若し違つて居りましたら、校長さんに御訂正を願ひますが、——桑の植はつて居る段別が四百五十萬段といふことであります。其の桑の植はつて居る一段歩を假に百圓と見ると、四億五千萬圓の日本の耕地を使つて居る。それを假に五十圓と見ても、二億二千五百萬圓の段別を、桑の爲めに使つて居るといふことになりませぬ。さうしてそれには、非常に多數の人が従事して居ります。又其の製品がどの位あるかと云ふと、年によつて違ひますが、今から十五年前に調べた所に據りますと、日本の産額の半分は日本内地で使つて、あとの半分を外國に出すといふことになつて居るやうであります。然るに段々外國への輸出が多くなりましたして、今日では總高の三割を内地で使つて七割を外國に出すのです。此の調べは私が日本銀行に居る時にしたのであります。先づ今日の所、斯ういふ割合であります。そこで外國に出るものを假に四十萬俵と致しますと、内地で使ふもの

は大凡そ十五萬俵であつて、日本の産額は合計して五十五萬俵となる譯であります。今五十五萬俵の絲を假に一俵七百圓と見ますれば、——今日の横濱の相場は百斤千三百圓の値段だから七百圓になります——其の總額が三億八千五百萬圓といふ金高になります。尤も外國に出るものは値が高く、内地で使ふものは安いから、必ずしも斯うは行かぬのであります。大した間違ひは無い。總産額が三億八千五百萬圓であつて、其の中で大凡そ二億七千萬圓ばかりのものを外國に出して、あとの一億千五百萬圓のものを内地で使ふと見てよいのであります。貴方がたがこれから先、世の中に出て従事せらるゝ事業は、此の四億に近いものを拵へる仕事である。それを他のものと比較して見ますと、日本で米が幾ら出来るかと云ふと、内地で出来る米は大概五千五百萬石であります。それを十圓に積つて五億五千萬圓、十五圓に積つて八億圓位である。それから最前私が申した今日、日本で最も組織立つた産業である紡績に比較して見ますと、紡績は月に大概十五萬俵の産額で、一年に積つて百八十萬俵餘りになります。事業を短縮しないで全力を注げば、假に二百萬俵の綿絲が出来るとしてよい。さうして一俵の綿絲は大概

二百圓位であるとし、ますと、四億圓といふ價格のものが出来ることになります。生絲はどうかと云ふと、三億八千五百萬圓であつて、昨年度これだけ出来たと見てよいのであります。併しながら一步を進めて考へますと、紡績の四億といふものは原料を悉く外國から買つて来るのであつて、四億の綿絲を拵へるには三億の原料を買つて来なければならぬ。即ち四億の製品は出来るけれども、三億は外國へ拂出さなければなりません。然るに貴方がたの將來従事されます生絲の三億八千五百萬圓は、僅か肥料の一部を外國から輸入するだけで、殆ど全部日本に其の金が落ちる譯であります。即ち昨年度に於て外國に出した二億七千萬圓といふ生絲の高は、殆ど全部其の金が外國から日本内地に這入つて来たのであります。乃ち日本の産業として、先づ米は外國に出さぬ、出しては實に些々たるものであります。又紡績と生絲とを比較して見ますと、實に比較にならない。それであり、それから内地で生産したものの高を見ますと、米より少ないが、外國に出す力に於ては、日本國に於ては生絲が何より一番重大な産業であります。さういふ産業に従事せらるゝ貴方がたは、一言にして申しますれば、將來大いに有望で、偉いと申す外は

ありませぬ。

そこで段々細かい經濟上の話を致しますと、此の三億八千五百萬圓の絲を拵へる爲めに一番最初に必要なものは、最前申しました耕地の段別、それに要する肥料でございます。併し之れに就きましては私は餘り知識も無く、寧ろ貴方がたに聞く方がありますから、其の點は抜きまして、其の次に繭を買入れる金はどうしてこしらへるか、日本でどの位な繭を買入れてどの位な資金を要するか、即ち繭を買入れておいて、それで段々絲を拵へて行く間の話をしてみようと思ひます。日本で繭を買入れるにどれ位な金を要するかと申しますに、誠にざつとした勘定であります、一年に假に五十五萬俵の絲が出来て、それを七百圓に賣ると致しまして、其の中で繭の代金だけを先づ五百圓と見積るならば、大した間違ひは無いと思ひます。それから先は工賃、石炭代等、色々の費用を要する譯であります、繭の代金は先づ假に五百圓と積つてよからうと思ひます。即ち二億七千五百萬圓の金を要するのである。併し之れは春繭を買入れて、それを段々賣つて、さうして秋繭を仕入れるのでありますから、それだけの金を一時に要せぬのであります。そこで金

融社會に影響する金はどれだけ要るかと申しますに、製絲家が繭買入資金を調達するに三つの方法があります。製絲家が自分が持つて居る金で繭を買ふのが一つ。自分が繭を拵へて自分が製絲するのもありますが、之れは經濟上に餘り影響が無いものと云つてよい。第二には、銀行から金を借りて繭を買入れる方法であります。例へば信州なら、信州所在の銀行から金を借りて繭を仕入れ、それを絲にして賣るのである。それからもう一つは、横濱に絲を外國向に賣る問屋がありますが、其の間屋から金を借りる。先づ經濟上に影響を及ぼすのは、此の三つであります。もう一つ立入つてお話致しますと、製絲家が銀行で金を借りる場合は、多くは無擔保であります。即ち、私は今年はこれだけの絲を拵へるので、これだけの繭を買はねばならぬから、此の金を貸してくれ、と云つて借りるのである。あとで總括りにお話致しますが、例へば諏訪の製絲家が、買入れた繭を銀行の庫に入れて金を借りようとする場合に於て、例へば熊谷とかいふあの近傍に行きますと、さういふ倉庫が無い爲めに、製絲家が銀行から金を借りて繭を買つて、其の繭を自分の庫に入れておくといふ場合があります。横濱の間屋から製絲家が金を借りるのは

どうかと云ひますと、例へば茲に信州の製絲家が、横濱の間屋の或者と非常に密接な關係がある場合に、自分の處で出來た絲を貴方の處へ持つて來るから金を貸してくれと云つて借りる。それであるから、横濱の間屋と製絲家とは必ず金銭の貸借上、密接な關係があります。之れもあとで私は批評致します。さういふ風に様様の形を以て金をこしらへて、繭を買入れる資金をこしらへるのでありますが、其の資金は毎年幾何位の高に上るか云ふと、最も巨額に上る時は一億圓位の資金を要すると考へます。現在の所をお話すれば直ぐお分りになりますが、今年の七月一日から來年の六月三十日まで、即ち生絲の一期間には、必ず海外輸出の分として四十萬梱の絲を造ると思ひます。さうして海外輸出の分が最も金融に重大なる關係がありますから、内地消費の分を除外して此の分のみに就て考へて見ますと、今賣つて居る絲はどの位かと云ふと、まだ二十萬梱しか賣つて居らぬ。あと二十萬梱はまだ残つて居るのであります。即ち一梱七百圓として一億四千萬圓の價額のものが、今銀行の庫に在り、製絲家の手許に在るのであります。之れから見ても、今日之れに對して必ず一億圓の金は出て居ると思ひます。さうして今申

した三つの方法で、其の金が出て居るのであります。

さうして出來上つた絲が横濱へどういふ風にして來るかと申しますに、先づ一番簡単な例で申すと、假に信州の諏訪で或製絲家が生絲を二梱拵へたとする。さうすると、銀行へ持つて行つて荷爲替を組んで貰ふ。換言すれば、其の二梱の絲は横濱の價格にして千四百圓の値打があるから、——一梱七百圓の價格として——其の千四百圓の價額に對して、相當の金を銀行で借りるのであります。即ち先づ其の二梱の生絲を運送屋か又は鐵道に頼んで横濱に送つて貰ふと同時に、運送屋又は鐵道院より荷物引換證を貰ふ。さうして製絲家は千四百圓の横濱の間屋宛の手形を作り、之れに右に述べた荷物引換證を添へて、自分の取引先の信州の銀行に渡します。信州の銀行は、信州より横濱までの生絲の到達の大凡その日取を定め、其の日數に其の當時の日歩を掛けて、此の千四百圓の手形を割引して製絲家に千三百何十圓を渡します。前に申述べた通り、製絲家は繭を買入れた時に銀行に金を借りて居りますから、今の千三百何十圓といふ金を以て繭の買入金を返します。即ち先づ千三百何十圓の大部分、例へば千圓の金を銀行に返し、残りの三百何

十圓は雜費又は利益として自分の懐に入れるのであります。其の二梱の生絲が横濱に來るとどうなるかと云ふに、其の荷物の宛先が茂木商店といふ問屋であるとする、茂木商店は生絲が著いたといふ通知を受ける。さうして手形の金額を支拂つて、荷物を受取ることが出来るのであつて、例へば前の例で、信州の銀行が手形の取立を横濱正金銀行に依頼したとすれば、茂木商店は千四百圓の手形を支拂つて正金より荷物引換證を受取つて、運送問屋又は鐵道院から二梱の生絲を受取ります。其の時に茂木商店は、其の二梱の生絲を擔保として金を借ります。即ち生絲を擔保として金を借りて、手形の金を支拂つたことになるのであります。

今のやうな有様で、福島からも愛知からも四國からも、處々方々から横濱に荷物が這入つて來る。横濱では少ない時でも、一時に二萬梱は集つて來る。今日でも五萬梱位な絲は横濱の市場に在ります。そこで横濱で商賣して居る者は、自分の金を何十萬、何百萬と遊ばしておく者は一人も無いのであつて、買つた生絲は銀行へ擔保に入れて金を借りて居るのであります。即ち假に二萬梱あれば、七百圓の絲として千四百萬圓の品物がある。之れが五萬梱あれば、三千五百萬圓の品物が

横濱の倉庫に在つて、横濱の銀行が金を貸して居る譯である。其の絲は何時捌けるかと云ふと、生絲問屋が之れを今日の相場で千四百圓に輸出業者に賣るのであります。賣ると、輸出業者は茂木なら茂木へ千四百圓の金を持つて來る。茂木商店は元々千三百圓の金を借りて、之れを千四百圓に賣つてさうして製絲家に千四百圓拂つてやる。自分はそれに就て幾らかのコミッションを取つて、其の金を始末してやるのであります。

次に其の絲をどういふ風にして外國へ賣るか云ふと、横濱の市場で其の絲を賣るには二通りの機關があります。横濱には最前お話した通り何十軒といふ問屋があつて、各處から荷を送る人の代理となつて、荷物を受けたり捌いたりして居ります。其の外、直接紐育或は里昂などに店を持つて居る輸出業者があります。例へば三井物産會社とか、横濱生絲株式會社とか、原輸出店とかいふものが主なるものであります。それから外國人で、外國の註文を受けて、日本の生絲を買つて外國に送ることを商賣として居る者が澤山あります。即ちそれが輸出業者です。もう一つ、横濱取引所といふものがあります。其の取引所も、これから貴方がたが

世の中に出れば、直ちに頭に響く一つのインスティテューションであります。此の取引所は斯ういふ風にして取引をします。横濱で外國へ向けるものは百斤であります。此の取引所の取引は十斤建であります。さうして五箇月先の賣買が出来る。例へば五箇月先と云ふと、十二月から云へば、十二月、一月、二月、三月、四月、三十日までの絲を、取引所に賣つておくことも、買ふことも出来るのであります。ど
ういふ譯でさういふものが必要かと云ふと、一番誠實に取引をする人には斯ういふ事がある。紐育から三月に絲が千斤要るから其の絲を買ひたいと云つて來る、さういふ場合に、三月の先物を賣る人が、假に信州の絲屋の中にあればよいが、無いとしますと、輸出業者は取引所で三月の先物を買つておく。例へば今日相場が千三百圓であるとして、三月先物を定期で百三十圓で買ふ。さうして紐育の人へ千三百圓で賣つておけば、三月になつて假令絲が下つても損も無く、其の物に對する手數料が貰へます。それをせずして、假に紐育で三月に千斤の絲が要るといふ時に、大概三月は下るだらうと思つて千二百圓で賣つておくと、何ぞ知らん、横濱の相場が千四百圓に上つた時は、輸出業者は百斤に付て二百圓の損をしなければなら

ぬ。それであるから、先物は買手があれば何時でも取引所に行つて買へば今から先、四月までのものは買へる便宜があります。それが取引所を利用する方法であつて、一番誠實な方法であります。それからもう一つ製絲家の側から云ふと、繭を假に六十掛けで買つて、それで製絲をやる。絲は先に行つて幾らか下るだらうと思ふが、今繭を買はなければ買ひやうが無いから、今六十掛けで買はなければならぬとなる。そこで損を防ぐ爲めに、自分の製絲場では二月に絲が千斤出來るとして、先物を賣つてしまふ。六十掛けから割出して相當の利益が取れたら、前に賣つてしまふのであります。三月に千斤出來るとすれば三月に千斤賣り、四月に千斤出來るとすれば四月に千斤賣つておく。さうすれば其の場合に、どんなに相場が上つても下つても、今日約束した相場で錢が貰へる。其の代り高くなつても、今日約束したほかは貰へない。さういふ便宜の爲めに、取引所が出來て居ります。横濱の定期取引所の設立の目的を完全に達するには、今の二つの方法があります。併しながら多くの者は、其の設立の目的より以外に濫用する。其の濫用はどういふ風にするかと云ふと、先づ此處に一つ綿絲の成金があると斯う假定して、其の人

が、どうも日本では戦争の結果段々物價も何もかも上る、甚だしいのになると二倍にも三倍にもなつた、併し絲は大凡そ從來の九百圓とか千圓とかであつて、それが千三百圓にしか上つて居ないから、他の物價の上つた割合から見れば此の生絲も上るだらうといふ見込を立てて、取引所に行つて假に千三百圓で、二月にしる三月にしる四月にしる、ずん／＼買つておきます。さうして其の成金の見込が當つて、其の時の相場が千五百圓になると二百圓たゞ儲かる。其の千三百圓が千圓になつた時は、今度は三百圓損をすることになる。さういふのが澤山世の中にあります。横濱の定期はそれが多い。さういふ風なスペキュレーションの爲めに、絲の賣買をすることが多いのであります。さうすると、之れは横濱の定期取引所を濫用するといふことになります。それで取引所は、最前申したやうに、絲と繭とを買つてそれが餘計儲からぬでもよい、損をしないやうにするには、どうしても先に絲の出來高でずん／＼賣つてしまふのがよい。今のやうに紐育から先物の註文が來た時は、取引所で買つて向ふで賣るやうにしておけば、損無くして自分は手数料が取れるのであります。それが爲めに、横濱ではなくてはならぬ一つの機關であります。

す。それが一つ絲を賣る方法である。今一つは、最前申しました輸出業者であつて、横濱には澤山居ります。今では外國人の取扱ふ分が先づ四割と云つてよい。あとを日本人の手で取扱ふことになつて居ります。

そこで輸出業者へ生絲を賣る方法は、多くは斯ういふことになつて居る。これは貴方がたが段々地方に散在されて、此の點に於て横濱に對して一つの疑ひを懐きますから、私は第三者として説明しておきます。問屋といふものは、今のやうに地方から絲を送り付けて其の日の相場で賣ることを依頼されるのでありまして、即ち問屋は地方の製絲家の一つの代理人であります。さうして千三百圓なら千三百圓といふやうに大體の標準を極めておいて、それよりもなるだけ高く製絲家の便宜なやうに、輸出業者と色々値段を折衝して賣るのであります。買ふ方はどうかと云ふと、當り前は、此の輸出業者といふものは、十から百まで悉く外國から註文が來てそれから買ふものでありまして、さうでないといふと非常に損をしたり非常に得をする。即ち見込買をせぬのが當り前の道筋であります。併しながら外國との關係で、非常に商賣上競争が激しくなりましたからして、或場合にはこれから先

此の絲は上りさうである、今千三百圓といふのは安いからと云ふので、賣先が無くても横濱の輸出業者が自分の勘定で買ふことがあります。注文が来て買ふのもあれば、注文なしに自分の勘定で買つて置いて賣先を見付けて捌くものもあります。さうして其の金融は、斯ういふ風になります。例へば輸出業者が千三百圓で買はうと致しますと、今日は何百斤買った、明日は何千斤買ったといふ工合に、ちつと買溜をして置いて、後に亞米利加へ横濱から船が出る時、其の買った絲を悉く船に積む。船に積むと、汽船會社から生絲何十俵或は何百俵といふ船荷證券をくれる。假に之れを五萬弗の價格のものとすると、——尤も此の中には船賃、保険料及び利益等も籠つて居りますが——輸出商は此の船荷證券一枚を五萬弗の價格あるものとして、丁度五萬弗の手形を書く。例へば、當地の三井物産會社から紐育宛手形を書き、其の船荷證券と一緒に正金銀行へ持つて来る。恰も信州から絲を出す場合に、鐵道院から銀行へ這入ると同じ形で持つて来るのであります。其の手形が紐育に著いて後、三箇月目拂のものなれば、紐育に著くと同社の支店で之れが引受をする。これは引受後三箇月といふ手形であります。正金銀行は其の船荷證券

を取つてどう勘定するかと云ふと、日本から紐育まで行くのに大概二十五日かゝる。二十五日かゝつて向ふに著いて三箇月であるから、手形の振出日より其の支拂日までが百十五日間になる。此の百十五日間の爲替相場と云ふと大變ですが、極く簡単に申しますと、通常の場合、亞米利加向爲替の利廻は約年六分の割合と見積つて大差が無い。此の割合で百十五日間の利息を算出します。例へば假に日本百圓を亞米利加の五十弗とすると、之れに百十五日間、年六分の割合で算出した利子を加へて、其の爲替相場と致します。それはあとでお話してもよい、兎に角さういふ風にして、正金銀行は其の利子を取らなければならぬ。五萬弗の金に付て年六分の割で百十五日間の利息を取つて、さうして三井物産に對しては、假に勘定の見易いやうに、其の爲替相場を百圓に付五十二弗と致しますと、其の代金九萬六千餘圓を正金銀行から拂ひます。そこで三井物産は、これまで生絲を五萬弗だけ買溜める爲めに金を借りて居るから、正金銀行から九萬六千餘圓受取つた場合に、其の借金を支拂つてしまひ、残る所のものを自己の利益と致します。さうして其の手形は紐育に行つて三井物産の支店が引受けて、三箇月目になると亞米

利加の金で其の手形が支拂はるゝのであります。

それから此の生絲の取引に就ては、外の取引と少し違ふ所があります。それを一つ貴方がたに話しておかうと思ひます。第一、他の事と違ふ點は何處に在るかと言ふと、普通の場合、銀行に行つて金を借りますには、大概銀行の庫に持つて行ける擔保品があります。例へば株券を持つて行くとか、公債を持つて行くとか、いふのであります。若しさういふ擔保品が無ければ普通商業手形であります。これは擔保品はありませぬ、其の代り長くて三箇月、短かければ一箇月とか十五日とかいふものである。即ち擔保品のあるものは長く、商品の擔保品の無いものは短いといふのが普通の慣例であります。然るに繭を買入れた場合は、之れと少し違ふ。今諏訪には非常に大きな倉庫がありますから、其の倉庫に繭を入れれば銀行に擔保が這入つて居る譯であります。然し諏訪以外に擔保繭を入れる適當な倉庫がありませんから、製絲家の多くは、自分が持つて居る庫へ其の繭を入れて、擔保品を銀行に出して居ないのが普通であります。其の結果はどうかと云ふと、製絲家の金は日歩が高いのである。銀行から見ると、貸金の擔保品が自分の手許に在れば

安全であるが、それが製絲家の庫に在るといふことになる、一萬圓、二萬圓貸しておいてそれをぼつ／＼一年中に返すといふ貸方であるから、従て日歩が非常に高くなるのであります。それからもう一つ、横濱の問屋から金を借りるのは非常に高いのである。なぜかと云ふと、元來製絲家といふ者は非常に危険視されて居る。又事實これまでの歴史で見ると、製絲家は或場合には大變危険なことがあるのであります。銀行は金を貸さうとしても擔保品が無く信用が分らぬから、貸すことをいやがる。そこで製絲家は自分と密接な連絡のある横濱の問屋に行つて、色々内情を打明けて金を借りるのである。問屋は金を貸せば生絲を自分の處へ持つて來るから、自分の仕事が殖える譯である。そこで非常な危険を冒して貸す。其の金は問屋が銀行から自分の信用を利用して借りて來て、相當の利鞘を取つて貸すのであります。例へば銀行から六分で借りれば、製絲家から六分五厘取る。爲めに、製絲家は非常に高い金を借りるといふことになるのであります。要するに日本全國を通じて、製絲家は非常に高い資金を使つて居る。貴方がたがこれから先、世の中に出て製絲をやつて御覽なさい、金を借りる利息は製造費の大きな部分

であり、重大なる科目であることがお分りになります。これは大いに改良しなければならぬ事であり、日本全國に亙つて居る事であり、金を貸す方の側から云つても、資金を引入れる方の側から云つても中々困難な問題であつて、容易に改良が出来悪いのであります。

それから製絲を一つの工業と見て、他の工業と性質の違つた點は、事業が非常に危険であることとあります。何處が危険かと云ふと、最前紡績の例をとつて申しましたが、例へば紡績であれば孟買、紐育で棉を買ふ。孟買の一俵の棉は、今日の相場にすると、大阪まで持つて来て百七十圓かゝります。其の百七十圓の棉で絲を造れば幾らかゝるかといふことは、直ぐ出て来る。大概棉一俵が三百斤であつて、三百五十斤で絲が一俵出来る。其の絲が今日は二百五十圓になる。さうして紡績會社が孟買で棉を買つて、大阪まで来るには二箇月半かゝる。さうすると紡績會社は、孟買で一俵の棉を百七十圓で買つて、今から二箇月半、即ち來年二月半ばの先物の絲を二百五十圓で賣つてしまへば、丁度一俵に就て平均十五圓から二十圓位利益があります。さうして紡績會社は、絲が上らうと下らうと、棉が下らうと上

らうと、百七十圓の棉で二百五十圓の絲を賣れば、十五圓から二十圓の利益がちらちらと出て来る。二月半ばに棉が来てそれを絲に直せば、それで儲かるといふ譯であります。組織立つた工業は、斯ういふ風でなければならぬのであります。それをさうせずに、或紡績會社が孟買で百七十圓の棉を買つて、絲を賣らずに賣つて、ところが來年二月半ばになつて、絲が二百圓になつてしまつた。二百圓になつて見ると、百七十圓で棉を買つて二百圓の絲を拵へるから、三十圓以上も損をする。さういふ目に遭へば、紡績會社は潰れてしまふ。日清戦争當時の大阪の紡績會社は、さういふ状態であつた。棉花の先物を買ふことが出来ず、綿絲の先物を賣ることも出来ず、盲滅法に棉を買つて、それで絲を拵へたところが當てが無い。絲が上れば儲かるが、下れば紡績會社は潰れてしまふのであります。丁度、日本の蠶絲業は、紡績會社の日清戦争頃の有様である。例へば、三年前歐洲の大戦が始まつた時の事を見ますに、繭を仕入れた時は絲が千圓して居つた。其の標準で繭を仕入れて大いに儲けようとして居ると、八月に絲が七百圓までに下つて非常に損をして、日本の製絲家は殆ど全滅する程度まで行つてしまつた。これはどうして

も、今後は防いで行かなければならぬ事があります。ところが、それが中々防げない。それは今のやうに繭を仕入れる場合に、假に横濱の取引所で先物をどん／＼賣ることが出来れば大變よい。例へば六十掛けで繭を買つて、それに相當した値段で先物を賣つておけば、絲が上らうと下らうと、ちつとも差支へ無い。それが今日の製絲の状態はどうかと云ふと、組織が悪い爲めに唯買つて溜めておいて、先物は賣れない。又輸出業者も先物を賣らうとしても賣れない爲めに、絲が下れば非常に損をする。即ち現在に就て申すと、秋繭を仕入れる時、生絲は千三百圓であつた。さうすると平均をとつて、絲は千四百圓位に賣らなければ製絲家は損をする。それが今日は大抵千四百圓を下つて居る。夏の絲で儲かつたから今日の損は堪へて行くが、秋繭だけでありますると、百斤に付て百圓宛損をして居ることは明かな事實であります。さういふ風な危険があるから、これはどうしても將來は繭を仕入れたら、自分の月々出来る製絲を量つて先に賣つて、危険を防ぐやうにしなければならぬ。これは今日の機關が悪いだけでない。製絲家といふ者は、昔から投機心に富んで居る人が多い。信州などには絲價が段々上ると云つて、賣れるもの

を賣らずにおくうちに、今度のやうに非常に下つて来る。さうすると信州あたりの製絲家が何十人も東京に来て、會議を開いたりなどしなければならなくなる。組織も悪いが、どうも製絲家の頭も悪いと思ひます。今後は必ず繭を仕入れたら出来るだけ先物を賣るといふことにして、危険を防ぐやうにしなければならぬのであります。それには色々の關係があつて、紐育に於て先物を賣ることが出来るといふことであります。之れは段々改良して行くべきものであらうと思ひます。今日組織立つて居ります日本の紡績業と製絲業とを比較して見ますと、製絲業はまだ非常に幼稚である。製造法にしても金融上にしても、非常に改良を要する事が多いのでありますから、貴方がたがこれから先、従事される仕事として、非常に有望であると思ふのであります。

それからもう一つ序に申します。これは少し話が大きくなるかも知れませぬが、支那の生絲といふものがある。今日世界中で生絲の産出は、日本と佛蘭西と伊太利と、それから僅かバルカン半島で出来るのであります。其の外支那であります。支那の生絲は、年によつて産出高が違ひます。之れは産出の總高は分りませ

ぬが、外國に出した高から見ますと、或場合は七千萬圓、或場合は一億五、六千萬圓といふ高でありますが、先づ一億圓以上の生絲が支那から出るものであります。それは従來は多く佛蘭西等に行つたのであります。今日は紐育に行つて、日本の生絲の敵と云うてはおかしいけれども、兎に角競争品であります。日本の製絲家は、常に支那の絲を頭に考へておかねばならぬ今日であります。絲の出来る處は上海、廣東で、養蠶の多くは揚子江に沿うた處であります。之れに就て一つ問題があります。之れは、貴方がたの若い方には恐らくさういふことは無からうと思ひますが、昨年あたりから非常に議論があります。支那の製絲と日本の製絲とを比較すると、支那の絲は或物は、大變品質が良いが、製絲の方法は幼稚である。そこで日本人は支那の製絲を如何に考へてよいかといふ問題でありまして、幼稚であるから之れを今の間に潰してしまふがよいか、日本人が手を延ばして支那の製絲を掌握した方がよいかといふ問題である。前の説は非常に固陋な考へであるが、日本人が上海、廣東に於て製絲の改良をする所を支那人に見せたならば、支那人が日本人の長所を採り、終に日本の強敵になるだらうといふことを恐れるのである。後の

説は、そんな世界に通用せぬ議論は駄目だ、日本人がやらなければ他の亞米利加人や佛蘭西人や伊太利人が来てやるにきまつて居る、まだ外國人が来て改良せぬうちに日本人が行つて、製絲權を握つておくがよいといふ議論である。私は後の説の主張者であります。まだ幼稚と云はれる支那の製絲に就て、今のうちに日本人が支那に行つて大いに製絲をやるがよい。製絲を日本人の手に掌握してしまふがよい。さうして世界の製絲を日本人の手に掌握しなければ、製絲の大勢上いかぬと、私は考へて居ります。段々日本もさういふ風な氣運に向いて來ると思ひます。それでこれから貴方がたのやうな若い方には、支那は非常に活動の餘地があるらうと思ひます。世間で斯ういふ事を云ひますが、それも一理あると思ひますのは、養蠶、製絲といふものは、段々其の國が開けて物價が高くなると餘程困難になるといふことである。今日、日本も段々物價が高くなつて來たが、それにつれて改良も出來、又規模も大きくなりました。併しながら日本には、外に段々農産物も出來るのである、生絲の價が高ければよいが、假に今日のやうな時代に何か事があつて、生絲の價が七百圓とか八百圓とかいふことに落ちて來たら、日本で養蠶、製絲をす

ることが中々困難であらうと思ひます。さういふことに考へられるからして、私は支那の如き非常に廣漠なる處、人口の多い處、從て工賃の廉い處へ段々養蠶を移して行つて、日本人がコントロールすることが、今後の大勢上最も注意すべきことであると思ひます。

辻褃の合はぬ事を大變長く申しましたが、私の申上げる事はそれだけでありませう。尙外國爲替の事に就て細かくお話すれば一時間やそこらお話する材料はあります。今日はこれ位にしておきます。

東洋に於ける日本の經濟上及び金融上の地位

(大正七年六月十九日
於財政經濟考究會)

今夕の私の演題は、日本は果して東洋の金融の中心となることが出来るや否やといふことであります。何故斯ういふ問題を出したかと申しますと、私のやうに直接對外金融の仕事に従事して居りますと、時々此れ等の實際問題に逢著致しますので、自然こんな考へが起ります。其の實際問題と申しますのは、若し他日、日本が東洋の金融の中心となるならば、これ位の犠牲は拂つても差支へ無いではないかといふやうな事柄が生ずるのであります。さうして此の問題を他方から申しますれば、他日東洋の金融の中心になり得ないものならば、何も此處でこんなことを苦勞して犠牲を拂ふ必要は無いのであらう、斯う考へます。こんな實際問題に逢著してこんな考へを起します爲めに、斯ういふ表題を掲げて研究して見たい譯であります。もう一つは、御承知の如く、戦争が始まりましたから日本の外國貿易

の状態は一變して、戦争前には常に輸入超過でありましたから、外國貿易の金融は總て日本以外の歐米で致しましたが、戦争が始まりましたから輸出超過になりました爲めに、外國貿易の金融は悉く日本内地でしなければならぬことに變化致しましたのも、此の考へを起しました所以であります。又何か斯ういふ理想を懷きまして仕事に従事致しますことは、向上心を養ふのに大變よからうといふやうなことから、斯ういふ考へを起しました譯で、今夕諸君の前に意見を披瀝しまして、果して之れは私の妄想に過ぎないか、或は假すに時を以てし、又努力をしますならば、相當の程度まで此の理想を實現することが出来るかどうか、其の邊の點に就きまして腹藏ない御意見を承りまして、自分も一層大いに研究して見たいと思ふのであります。

説明の順序と致しまして、先づ金融の中心とはどういふことを云ふのか、之れを説明すると同時に日本の現状を述べて、それと比較して見たいと思ひます。世界の金融中心市場と申しますれば即ち倫敦でありますから、これより倫敦市場の状況を説明しつつ、私の考へを述べて見たいと思ひます。

金融の中心市場たる絶對的條件

- 一、金の自由市場たること。
 - 一、世界の取引の決済を爲す市場たると同時に資金調達の場所たること、即ち clearing center たると同時に credit center たること。
- 其の以外に須要條件としては、
- 一、對外放資の多いこと、又放資の餘力あること。
 - 一、對外貿易の殷盛であること。

金の自由市場

絶對的條件の第一は、金の自由市場たることと考へます。言葉を換へて言ひますれば、其の市場に資金を有する人が何時にても、又如何なる巨額にても、世界に共通の價值ある金に引換へて、其の人の欲する何れの場所にも持出し得ることの必要なことは自明の理であつて、此の條件は即ち其の市場をして世界の資金の貯蓄

場たらしむる譯だと考へます。之れは、現状に於きましては、世界中に唯倫敦あるのみであります。倫敦が戦争が始まりましたから今日になりましたさへも、猶兌換の停止をせず又金貨の輸出も禁じないといふことは、即ち倫敦の苦心の存する所と考へます。勿論今日實際に於ては、英吉利から一磅の金も出ませぬ。さうして之れは法律規則によつて禁ぜられて出ないといふのではないので、金を持出すことは英吉利の方針に反する、英吉利の利益に反するからして、苟も英吉利と同盟國であり、又英吉利の國旗の下で仕事をして居る者は、英吉利の不利益を圖らぬといふ精神からして、實際に於て出て居りませぬし、又出さうとすれば妨害を受けるのであります。戦争前に於ては、佛蘭西に於きましても、金で兌換をするか銀でするかば佛蘭西の勝手であるといふやうなことであり、獨逸の如きも、中央銀行に於ては絶對的に金の兌換を拒絶は致しませぬが、或場合には非常なる面倒と不利益とを被らしめるといふやうなことがあります。之れも完全に金を以て兌換するとは云ひ得ないやうな有様でありました。従て戦争前に金の自由市場は、世界中唯倫敦あるのみでありました。

倫敦が金の自由市場であるといふ説明は茲に止めまして、之れを日本の状況に照して申述べたいと考へます。さうして先づ順序として過去の歴史に就て見ますと、大正三年及び四年に亞米利加に日本の金が續いて六、七千萬圓輸出されたことがあります。それから又一昨年から昨年にかけて、支那に殆ど同額の金が輸出されたことがあります。それで此れ等に對して、日本は如何なる考へを持つて居ればよいかといふことが問題になります。即ち私が今夜皆さんの前に斯ういふ問題を提供する必要を感じるといふのは此の點でありまして、即ち亞米利加や支那に金が出る場合に、單に日本の正貨準備だけの考へから申しますと、法律の力によつて之れを禁止するのが一番安全で勝手であるのです。併しながら假にこれ位の金は出ても現在の日本の正貨準備には差支へ無い、又將來に於て出るべき金の高は、斯くの如き原因から来るからして凡そ數量は分つて居るといふ見込が立つて、換言すれば日本の兌換の基礎を直ちに危くするやうな事柄でないならば、茲に考へを要するのは、法律の力で之れを禁ずるのは誠に容易いことであるが、他日、日本の抱負が金融の中心市場ともならうか、さうならずとも世界各国

に日本の金融市場の安全なることをよく知らしてよく必要があるといふ抱負がありますならば、目前の苦痛を忍んでも、或は他に相當な犠牲を拂つても、此の兌換禁止をするとか、或は積出を禁止するとかいふことをしてはならぬといふことが出て來るであらうと思ひます。前に述べました二つの事件共に中々色々な議論もありましたし、世評もありました。又大藏省とか日本銀行とかいふ關係の各處では種々様々の研究もありましたやうですが、遂に兌換停止、輸出禁止をせず、此の兩事件とも濟みましたので、日本の金本位制度には傷をつけずに濟んだ次第でありました。

日本は現今、日本銀行の金庫の中に五億近い金貨を持つて居ります。それなら私の云ふやうに、日本が果して倫敦の如く金の自由市場となり得るであらうかどうか。之れ位の金貨を持つて理想を實現し得るや否や。御承知の如く、英蘭銀行の正貨準備と申しますものは、餘り澤山は無いのです。十億圓と上つたことはありませぬ。或は五億圓とか或は七億圓とかいふ位の高で濟んで居ります。尤も英吉利は其の國の關係からして、南阿弗利加の金は自由に取れるといふことと、

それから對外的に巨額なる放資を持つて居る爲めに、巨額の金が無くても稍安心の位置に居ります。其の點は日本とは非常に違ひますが、私の考へでは、日本の外國貿易が輸出超過である間は、又東洋、殊に支那に於て、歐米の放資が停止せられたる間に日本が大いに放資に努むるならば、日本は東洋に於ける、完全とは申されぬかも知れませぬが、或程度の金の自由市場たることは出来るであらうと信じて居ります。御承知の如く、日本に金貨が五億圓ありまして、海外に預けてある資金、即ち在外正貨と稱して居るものが六億圓位あります。さうして朝鮮或は黒龍江等の金を集めますといふと、年に日本銀行の金庫に這入つて來るものが、二千萬圓から三千萬圓近くあるものと見て、差支へ無からうと思ひます。さすれば金の自由市場としても、相當の準備を維持することは更に困難は無いと考へます。

尤も縦し輸出超過が續きましても、時々事情の爲めに金を持出されるといふことは、何れの國と雖も免れぬ事であります。例へば大正三、四年に亞米利加に出ました金の如きも、從來の輸入超過が重なつてあの金が出たとは説明がつかまされども、其の少し以前から日本は既に輸出超過であつた、然るに金が出ましたの

は、種々國際間の爲替作用で此の現象を見たのであります。又最近に現れました狀況は、印度の棉を買つて來るのに爲替が梗塞した結果、日本から金貨を持出さなければならぬことになりまして、相當巨額の金貨を積出しました。斯ういふやうな事は、縦し日本が輸出超過であつても、常にあるといふことを覺悟しておかなければなりません。又もう一つ、日本が金の自由市場であるといふことに就て最も深い考へを用ひなければならぬのは、隣邦の支那であります。支那は比較的に金の産出高の少ない處であつて、これまでの吾々の經驗で申しますると、支那の金は黒龍江省から出て、之れが北京に廻はつて、北京の赤足金となつて支那の需要を満たして居つたのであります。今日まで分つて居ります所によりますと、あれ程人口のある國で、可なり金を使ふ國で、金の産出といふものは頗る少ない。従て支那と日本との貿易は、支那に對する狹義の輸出超過であります。それでも昨年、一年に金が出た如く時々金が出るといふことがあるのであります。隣りに此の支那を持つて居るといふことは、日本としては餘程心配であつて、且つ注意をしなければなりません。

話は横道に入りますが、過日から支那の幣制改革の問題がありますが、世上には銀貨本位から一躍して金貨本位に變るといふ議論があります。それに伴ふ議論は、何人が支那の金貨本位に對する金貨を提供し得るか、大いに考究を要する問題でありまして、私は之れは重大なる問題として考へて居ります。例へば印度の如く金爲替本位であるならば、金は一文無しで濟むかも知れませぬが、一躍して金貨本位に變ると云つたならば、あれ程の金を使ひ、あれ程の人口のある處には尠なくとも二億圓、三億圓の金貨そのものが無ければ貨幣制度の改革は出來なからうと思ひますが、世界今後の事を考へて見て、果して何人が此の準備を提供し得るかといふ問題は、容易ならぬ問題であらうと思ひます。それで日本が果して金の自由市場たることを維持し得るや否やの問題は、此處にはこれ位に止めまして、第二、第三と段々愚見を述べて行くに従ひ、此の問題を多少宛解決して行つて見たいと思ひます。

絶對的條件の第二は clearing center 及び credit center の意味でありまして、詳細に申しますれば、世界中の資金が此處で支拂はれ、又調達せらるゝといふ意味であります。之れが倫敦の世界金融の中心たる最も大なる條件の一つであります。最も信ずべき經濟上の著書に、世界の貿易の半分は英吉利に於て金融 (finance) されるといふことが書いてありますが、倫敦の市場の大きさの程度は、之れで大凡そ推察の出来ることと考へます。

説明の順序として申上げますが、金融の中心市場としては、外國の公債とか市債とか社債とかいふものが、非常に簡単に且つ便利に發行することが出来なければならぬ。此の點に就きましては、英吉利、佛蘭西、日本の市場等を比較致して見ますと著しき差違がありまして、世界中で外國の公債、市債を取扱ふのに倫敦位簡単に出来る處は無いのであります。然るに佛蘭西に參りますと、佛蘭西の人は殆ど外國關係の金融の事を十分に理解して居らぬやうに感ぜらるゝが、これが日本になつて見ますると、殆ど外國の事は理解して居りませぬのであります。之れは今日の如き市場となりまして未だ時日の短いのも一原因と考へますが、我國も金融

の中心市場となるには、公債、市債、社債と云はず總て外國關係の金融の事を十分理解して居るといふことが、一大必要になる譯であります。従て外國の有價證券に對して金を貸し、又此れ等を便利に且つ容易に賣買が出来なければなりません。此の點に就きましては、實に倫敦の状況を唯々羨望する外はありません。世界の何れの部分の公債、社債でも、全く自國のもの同様に、如何なる巨額のものでも便利に取扱ふことが出来ます。之れは唯順序を逐ふ爲めに申しましただけの話であります。其の次に申します手形引受、即ち言葉を換へて言ひますれば信用 (credit) を出すこと、或は信用狀を發行すること、之れが私の茲に最も詳しく説明して見たいと思ふ所でありまして、日本の現在と比較致しまして日本に全く缺けて居る所でありますから、之れを主として説明して見たいと思ひます。

御承知の如くに、倫敦には手形引受業者 (accepting house) と手形割引會社 (discount company) と、それから株式銀行 (joint-stock bank) と、其の上に英蘭銀行とがあります。其の中で、手形引受業者といふものは手形の引受に就ては専門でありまして、銀行も手形の引受を致しますが、併し専門は手形引受業者であります。簡単に説明

致しますれば、

第一、輸出手形の場合。即ち英吉利から品物を輸出する場合に此の手形引受業者といふものがどういふ風に働くかと申しますと、例へば亞米利加の人が英國のリヴァプールから毛を買はうとするときに、亞米利加の銀行から信用状を出します。其の信用状は米國の銀行がリヴァプールの毛の仲買人に向つて幾ら幾らの毛を亞米利加の何某に送つたならば、それに對する手形を書き、さうして倫敦の何々といふ手形引受業者又は銀行に宛ててくれといふ信用状を出す。リヴァプールの仲買人が五萬磅の毛を積出したとしますと、米國の銀行の指圖通りに、手形引受業者又は銀行に宛てて五萬磅の手形を書いて引受を取りまして、其の引受手形を倫敦のビル・ブローカーに送りまして、倫敦で割引をします。さうして期限に至つて、亞米利加の毛の輸入商が亞米利加の銀行を通して、五萬磅の金を支拂ひます。此の金融業者の引受手形が即ち銀行手形(Bank bill)と稱するものでありまして、此れ等の手形は即ち第一流の手形でありまして、倫敦の最も安き日歩で割引が出来ます。

第二、輸入手形の場合。即ち英吉利へ品物を輸入する場合の事を申しますと、例へば日本から羽二重を輸入するときにも、輸出のときと同じ事を繰返します。倫敦の羽二重の輸入業者が倫敦の手形引受業者に向つて、五萬磅の羽二重の輸入をなす爲めに信用状の發行を請求しますと、引受業者又は銀行が之れを出し、それが横濱に参りますと、其の手形引受業者又は銀行は世界的に信用の知れたる者でありますから、横濱で爲替銀行が其の手形を買ひます。さうして倫敦に参りますれば、信用状を出したる手形引受業者又は銀行が之れを引受け、手形は期限内に倫敦で割引せられます。それで英吉利は、自國の品物を賣つても自國に品物を買つても、悉く自國の貨幣、即ち磅で商賣をして、何等外國爲替に關係はありませぬ。從て英國人は外國貿易はしても、資金の外國關係を知りませぬ。此の點が、世界金融の中心たる位置の然らしむる所と考へます。茲に申しましたのは英國の輸出手形と輸入手形との事でありまして、換言すれば英吉利自體が外國貿易に關係したときに生じたる手形の金融の事であります。

第三、英吉利は自國の貿易に何等の關係の無い金融を致しますことが非常に

多いので、これが世界の金融中心市場たる意義の上に最も重きをなします。例へば、日本から生絲を紐育に輸出します。生絲そのものは紐育へ送りますが、戦争前には、紐育に送りました八割以上は悉く英吉利でフィナンスする。即ち前に述べた倫敦の手形引受業者又は銀行が信用状を出して、それによつて横濱で手形を買つて、其の手形が悉く倫敦に行く。倫敦で引受を取つて銀行手形となつて割引をなし、紐育の生絲商が期日に資金を倫敦に送つて手形の支拂をなします。他の例は、日本が蘭貢の米を買ひましても爪哇の砂糖を買ひましても、悉く此の金融は倫敦でやるのです。殆ど全部と申してもよいのであります。其の方法は少し複雑で煩はしいのですが、日本あたりにも非常に参考になる事でありますから一つ申上げておきますが、蘭貢から米を買ひます場合に、在日本の爲替銀行、例へば正金銀行に信用状發行の依頼をします。さうして其の信用状は蘭貢の香港上海銀行に宛てたとしますと、其の信用状の内容を申しますと、米を三十萬圓蘭貢の何某が日本の何某に送つた場合には、倫敦の正金銀行宛の手形を買つてくれろといふ信用状であります。さうすると、米を日本に送ると米の賣人は倫敦の正金銀行宛に手

形を書きまして、之れを蘭貢の香港上海銀行に賣ります。香港上海銀行は、正金銀行の信用状がありますから手形を買ひます。さうして其の手形は倫敦に送つて、正金銀行の倫敦の店の引受を取ります。乃ち之れは正金銀行の引受手形となりましたので、前に申しました手形引受人の代りに正金銀行が立ちましたのであります。さうして此の手形は、正金銀行の信用で倫敦で融通せられます。さうしますと日本に米が来て、それを賣拂つて代金が出来たところで、其の期日に倫敦に金を送つて支拂をします。斯くの如くして自國の輸出入は勿論のこと、自國に全く關係の無い商賣でも英吉利が金融をする爲めに、世界の貿易の半分はフィナンスするといふことになるのであります。

只今私の説明しました英吉利と亞米利加、英吉利と日本との關係は、戦争前に於きましては獨逸の關係も同じことでありまして、青島、漢口あたりから出るものは大多數漢堡に行きます。併し手形は悉く倫敦に行くのであつて、此の手形が倫敦拂の手形になつて居ります。斯くの如く、世界中の手形は倫敦で支拂はれる。従つて此の支拂資金を、世界中から英吉利に貯めておくといふことが伴つて來ます。

乃ち資金の支拂と其の支拂ふべき資金の蓄積とが同時になければならぬ、さうして支拂をするが爲めには、倫敦に於て非常な金を借りなければならぬ場合がある。其の金を借りるには即ち手形で借りるといふことは只今の説明で分りませんが、手形のみならず、倫敦に在りまする有價證券を以て巨額の資金の融通を受けなければならぬといふことが伴つて参ります。従て實際の例で申しますると、吾々倫敦にこれまで仕事をして居る銀行としては、常に倫敦に巨額の有價證券を持つて居る。さうして或場合には其の有價證券で融通を受けるといふことになつて居りまして、正金銀行だけの勘定から見ましても、殆ど世界中で取立てる資金は一文と雖も他には置かず、倫敦に送ります。倫敦が、戦争前には世界中で最も安全なる資金の蓄積場所としてあつた。これは實際其の局に當らぬ人には想像が出来ぬやうな事でありますが、例へば支那で日本の輸出手形によつて資金を取立てまして、明日之れを支那に使用する必要がありましたも、兎に角今日は英吉利に送つてしまふ。さうして明日は又明日に必要なだけの資金を取るといふやうなことを致しますので、世界各地に於きまする爲替銀行は、倫敦以外の支店に巨額の資金

を持つて居るといふことは殆ど想像しませぬ。それでありますから、日本の輸出と輸入との差額は悉く戦争前は倫敦に貯めてある爲めに、政府や日本銀行の資金を除いても、日本の貿易の資金としては尠なからざる高が倫敦に貯めてありました。それは日本だけでない、世界各国が皆英吉利を支拂場所にする爲めに資金を貯めておくから、其の額は非常なものであらうと思ふ。一例を申しますると、一八四四年の英蘭銀行條例を停止した時に、世界に非常な誤解を來して、英蘭銀行が支拂を停止したといふやうな噂をした爲めに、世界各国が英吉利から資金を取出し、英吉利の銀行は非常に困つたことがあります。さういふ事がありますといふと非常に困るだけ、平素巨額な外國資金が英吉利に貯まつて居ると云つてよからうと思ふのです。又一九〇七年か八年かに、時の大藏大臣たるロイド・ジョージ氏が社會主義を唱へて、此の主義を財政に應用した爲めに、英吉利の財界の人との意見が合はず、英吉利の市場は非常に恐怖心を起した爲めに、金利等も大變高くなつたことがあります。が、元來佛蘭西あたりの者は、英吉利は政治上最も安全な場所、又世界の金融の中心であるからといふので金を貯めてあるが、さういふ極端な

社會主義を財政上に應用する人が出て來た爲めに、他國は英國の將來に就て危懼の念を抱いたから、英吉利に在る資金を多額に引出したといふことを申して居りましたが、さういふ事を以ても、平時英吉利に非常に巨額な外國の資金が貯まつて居るといふことは、明かなことであらうと思ひます。

前から申します如く、英吉利は自國の輸出、輸入品は悉く自分の貨幣、即ち磅で商賣をし、又自國に全く關係の無い他國の貿易も自國でフィナンス致します爲めに、英吉利人は全く外國爲替といふ事を知りませぬ。英吉利の銀行に行きましても、外國爲替といふ事は全く知らぬと云つてもよい。例へば支那と英吉利の外國爲替であると、香港上海銀行あたりがちやんと爲替を建てて、爲替の商賣は爲替専門の銀行の手でして、英吉利の普通の銀行は自國の貨幣の外何も知りませぬ。英吉利には、書物にも外國爲替の餘り良いものがありませぬ。從て斯ういふことの爲めに、一つの面白い現象が出て來て居ります。之れは大分専門的でありますけれども、參考の爲めに申し上げます。外國手形の中に、利付手形といふものと外國爲替手形と二つあります。利付手形と申しますものは、其の國の貨幣で手形が出來て

居ります。即ち英國ならば磅の手形でありまして、期限まで之れに對して利息を支拂ふのであります。外國爲替手形は、貨物の輸出先に當る外國の貨幣で手形が出來て居ります。英國より佛蘭西に輸出の場合に法で出來た手形であります。前者の利付手形には利息を支拂へば事が済むが、後者の爲替手形には磅と法との間に相場が建つのであります。そこで英吉利人は世界の金融の中心たる位置に居る爲めに、他國の貨幣は信用しませぬ。其の結果、英吉利から輸出します場合は、殆ど全部と云つても宜しうございますが、皆利付手形、即ち磅手形であります。反對に日本から生絲を英吉利に送ります場合には、英國の貨幣の磅手形であります。さうして英吉利から日本に品物を送るときも、圓拂の手形でなくして磅手形であります。斯くの如くして、英吉利から世界各国に向けた手形は殆ど皆利付手形であります。さうすると、英吉利の人は磅でなければ物を賣らぬ、又磅でなければ買はぬといふのですから、英國人には外國爲替はありませぬ。言葉を換へて言へば、爲替の危険は日本の品物を買ふ人が負擔するといふことになるのです。其處が英吉利の偉い所か、餘り改良せぬ所か知りませぬが、英吉利人は磅で物を賣つて磅で物

を買ふ。所謂一磅は九圓幾らに當るとか、米貨の四弗何十仙に當るとか、そんな問題は研究をせずに、自國の貨幣の磅で商賣を致します。それからこれは不思議な話で、日本が偉い譯ではないが、支那が銀貨國であるが爲めに、日本から支那に行くものは利付手形です。百の中で八十までは利付手形と云つて宜しい。即ち普通ならば、日本から生絲を英吉利に出す場合に磅の手形を用ふる如くに、支那の兩又は弗の手形を使用する筈でありますが、さうでなくして圓の手形、即ち利付手形であります。さうして之れに五分とか六分とかいふ利息をつけて、期日に至つて元利合計したものを、其の日の兩又は弗の相場で日本に送りまして返濟を致します。換言すれば、爲替の危険は買人たる支那人が負擔します。此の利付手形であるか外國爲替手形であるかは、何れにしても商賣上の便利と利益とになれば、どうでも我れ關せずで宜しうございますが、自國の立場を將來向上せしめようといふ理想を懷くといふと、斯ういふ事は大いに影響を來す所であつて、又色々研究すべき材料になります。

偕て話は元へ返つて、前に述べました引受手形は、倫敦では手形割引會社或は銀

行の手に這入つて居るので、即ち此れ等の會社、銀行の放資物になつて居る譯であります。倫敦市場に於ける引受手形の高は非常に巨額のものでありまして、此の大戦争が始まつた當時、手形引受業者の引受手形及び銀行引受手形を英蘭銀行で救濟することになりましたが、其の節の調べに據りますると、此の種の引受手形が倫敦中に三十五億圓あつたといふことですが、其の位は平素から何時でもあると、私等も考へて居ります。即ち三十五億圓とか或は四十億圓位のもは、何時でも倫敦で割引されて居ると考へて差支へ無からうと思ふ。斯ういふ數字を持つて來ますといふと、實に倫敦の偉く大きいことが分つて來ますと同時に、これから日本の事を比較して見ますと、大分懸隔が激しいやうな氣が致さぬでもありません。日本の市場に於ける外國の公債の事は皆さん御承知の事でありまして、過去、現在、將來の事は略しまして、日本の市場に於ける手形引受の事に就きまして、過去、現在、將來の事に就き申述べて英吉利と比較して見たいと思ひますが、日本では外國貿易に關係致しまして信用狀を發行する習慣がありません。もう一つ根本に遡りますと、今の日本には手形引受業者といふものがあります。之れは日本が英吉利の銀行

制度の眞似をしながら、まだ機關が完全して居ないと云ふより外はないのである。英吉利では今日、手形引受業者、手形割引會社及び銀行の三機關が無ければどうしても動きませぬ。然るに日本は英吉利の眞似をして、株式會社組織の銀行といふものは出來たが、未だに手形引受業者は出來ない。手形割引會社は、手形が多くなければ必要上出來ませうが、手形引受業者とか又は金融業者 (financing house) といふものは日本の市場に缺けて居るのであつて、之れは私は英吉利の眞似をしながら機關が完全しないのだらうと思ひます。従て日本では、外國貿易に對して信用狀を發行する専門的機關は皆目無い。又普通の銀行にも、其の習慣は全くありませぬ。従て外國より貨物を輸入せんとする人は、止むを得ず外國爲替を取扱ふ銀行に信用狀の發行を依頼致します。斯くの如き習慣の爲めに、英吉利の輸入手形と日本の輸入手形とは非常に差異を生じます。なぜならば日本の場合には、爲替銀行が信用狀を發行して同一銀行の出先の支店が其の手形を買ひますから、日本に到着しましても手形の引受を爲すのは輸入業者でありまして、倫敦の如くに信用の確かなる手形引受業者ではありませぬ。若し日本に手形引受業者が無くと

も、内地銀行に信用狀を出す習慣がありますれば、手形が内地に到着致したる後は内地の銀行の引受手形となりまして、日本の市場でも自由に低利に割引せられる譯であります。日本には此の習慣がありません。そこで現今の日本の輸入手形は、銀行の引受手形に非ずして輸入業者の引受手形でありまして、輸入業者の信用は取引銀行にこそ判然しますが、世間一般には更に分りませぬのみならず、其の信用にも尠なからず差等がありまして、到底市場に於て、一流の手形として低利にて割引せらるゝことは出來ませぬ。若し割引せんとすれば、倫敦の如く引受人の信用で割引せらるゝのではなくて、其の手形の裏書人たる銀行、即ち只今まで申述べました例によりますれば、爲替銀行の信用で割引せらるゝこととなります。換言すれば、其の手形を引受けたる輸入業者の信用よりも銀行の信用の方が高いのでありますから、此の結果を生ずるのであります。而して各機關に於て責任を分擔しようといふ妙味は更に無くなりまして、倫敦あたりの状態とは全く違つたものになる。即ち前に申述べた輸入業者の引受けました輸入手形を正金銀行が日本の市場で割引するには、全く自分の信用で割引することとなります。然るに自分

の信用には各、限りがあるから、それには制限をせらるゝことになりませう。爲替銀行は世界何れの市場をも相手に仕事をして居りますから、倫敦でも前に申述べたやうに、非常に自分の信用を賣つて居る。何處でも此處でも信用を賣つて居るから、日本の市場でも單に自分の信用のみで輸入手形を巨額に割引しますれば、自然と外國で賣つて居ります信用の程度が極限せらるゝことになりませうから、輸入手形の割引は此の意味に於て自然と制限せらるゝこととなりませう。それ故に、日本の市場に輸入手形を割引する習慣をつくりませうならば、根本的に日本の各銀行に外國貿易に就て信用狀を發行し、其の輸入手形の引受をなす習慣を創造したいと考へませう。

そこで先日から手形の引受の事に就て色々な説があるやうですが、手形引受の本來の發達は外國貿易から來るものが主たるものであつて、其の以外のものは殆ど従たるものであります。之れは餘り獎勵すべからざるもの、餘り重きを置いて考へることの出來ないものであらうと思ふ。それはどういふ風のものかと云ひませうと、戦争の始まる前に、日本の工業會社が資金が足らぬから倫敦で資金を借り

ようといふことで、日本の銀行に裏書をして貰つて、正金銀行が保證をし、倫敦の銀行が引受をして之れを倫敦の割引市場に出して、それで此れ等の工業會社が數百萬圓の金を使つて居つた。それが戦争前に二千萬圓以上もありましたらう。それも一つの引受手形であります。換言すれば、日本の銀行が正金銀行と結びついて共に保證狀を出して、それに基づいて倫敦の銀行が引受をして、倫敦の銀行の名前で割引をするのであります。之れは非常に制限をしなければならぬ。何故ならば、實際の取引に伴ふ資金の融通に非ざる融通手形 (accommodation bill) の一種と云へるのであつて、何れの國でも非常に極端に制限しますので、斯ういふものが手形引受と共に大いに發達しますと金融界に弊害を生じまして、天然自然に發達すべき外國貿易より生ずる手形引受の發達を阻害するやうなことがあるだらうと思ひませう。

それならば前に述べた銀行の引受輸入手形に對する中央銀行の政策はどうなればよいか。之れは極く簡單なる問題であらうと思ひませうのは、假にさういふ銀行なり或は手形引受人の手形が段々出て參りましたならば、日本銀行が進んで大